

寮母日記

武田ミヤ

【全面広告】

寮母さん募集

年齢

40歳～55歳

待遇

単身住込のできる方
当社規定により支給

勤務

個室提供 社保あり
池田市

応募

当社女子寮(約20名)で
食事の世話と清掃など
1月15日までに履歴書写
真を左記へ郵送ください

〒541 大阪市東区

(株)人事部 06
(111) 111

A Matron's Journal 1983-89

by Miya Takeda

Copyright © 2015 by Miya Takeda

はじめに

家を出て二男と実家へ戻り、病床の父を看ながら友人の出版の仕事を手伝っていたが、いずれこも出なければと思っていた。

そして新聞にM社の「寮母さん募集」という広告が出たのでとびついた。面接があり、でも十人の応募のところ三人を残したと言いながら、初めからくわしい内容のやりとりで、あれ、私に決めてるのか、と思わせる応対だった。

しかし部屋を出たら次の人が待っていて、上品で、かしこそうで、美人で、趣味がよくて（こんな人がなんで寮母になりたいのかしらん）非のうちどころのない素敵な人であった。ああもうあかん、人事氏は私に決めていてもあの人を見たら気が変わる、でもあの人なら仕方ない、面接に残してくれただけで満足しよう、とけろつとして帰った。

しばらく何の連絡もなし、だめならポンと履歴書を返すだけでいいのにといいなが

ら、京都へモネ展を見に行き、ひとりであちこち歩きまわって帰ってきたら、息子がM社から話があると電話があつたと言う。ここで息子に寮母に応募したこと、でも素敵な人がいたからきつと折角ですがと断られるでしょ、要領は分かつたからこの線で仕事を探す、と言ったところ、そんな仕事しかないのか、おれは反対。と不機嫌に二階に上がってしまった。夜、M社から、よかつたら来てください、明日中に返事をいただけますかとの電話。私は場所も見たいし息子を説得したいから時間をくださいと言ったら、どうぞ息子さんも一緒に見てくださいと言われた。

息子を納得させようと思うのに逃げ出してつかまらず、とにかく寮を見せて言ったら案内しますと言われ、会社へ行ったら折角だから健康診断を受けてくださいとのこと。まだお返事してないのですけどと言ったのに病院へ連れて行かれ、そのあと池田市石橋の寮を見学。案内の若い社員と一緒に会社へ帰るよう言われているからとまた会社へ行つて、でも二十人の寮生は多いけれど何とかやれそうに思えて、現れた人事氏によりしくお願いしますと言ったら、手には入社用の書類を持っているという手際によさで、一週間後に着任できますか。私は引き受けた仕事が残っているからとよやく二日間延ばしてもらい、出版の仕事を優先。でも予定通りに運ばず見切り発車となつてしまった。

息子とは前日に話し合った。彼の気持ちは、母の面倒はみるつもりというのが底にあつて、教師の免状があり簿記もやったのだから、それを役に立てることはできないのか、寮母というのははよ言うたら賄いのおばちゃんやろということだった。私は遅言うてもおばちゃんですよ、あんたももの知らんね、五十歳すぎて働くところは賄いぐらいしかないよ。でも人事の人が、主婦の経験と、親の気持ちで寮生の面倒をみてやつてほしい、教師の免状があるのは好都合と言わはったんやから、ちゃんと役に立たんやから。友達におかんは寮母と言うのが恥ずかしかったら言わんといたらええでしよ、私は前からこうしようと決めてたのやから喜んで行くよと言ったら、おれは恥ずかしいことない、分かったよ、せっぱつまつてやけくそでそうしたのでないのやつたら何も言わへん。と言つて引つ越しを手伝つてくれた。

ここから始まつた寮母生活の記録は、友人の徳永さんが当時編集印刷に関わつていた、月一回発行の同人誌に寮母日記として掲載してもらつた。

書くことで発散、反省、発奮することになつて有難いことであつた。

二十数年経つて、終活のひとつとして本にすることを思ひついた。何やかや言いながら私もよく働いたではないかというかなりの手前味噌ではあるけれども。



左から：二男の女友達（現・妻）、二男、著者、長男（1990年、寮の車寄せにて）

一年目

二月

果報は寝て待て。というけれど、あんまり寝てるからチャンスの方がしびれを切らして起こしに来たような、そんな感じでこの仕事がやってきた。スポーツ用品メーカーMの女子寮の寮母。寮生は現在十八歳から二十五歳までの二十人。近くに第一寮があり私のところは第二寮。

仕事は夕食とお風呂の仕度、門、玄関のあけしめ（これがかなり煩雑）、掃除など。食事は全員というのではなく、半数の時もあり、メニューは給食屋が決め、材料を前日に持つてくる。それを調理するだけ。当然むづかしいのはなし。でも数の多いのは二人分より作りがいがあるし、魚料理で希望者が少ないとがっかりし、よしそのうちなんとかして食べさせようと思ったりして、交野にいた人とここにいる人が同じ人とは思えない。しかし要領よく仕事を終えれば自由にできる時間はたつぷりあり、大きな顔して読んだり書いたりできるので、これでお金をもらうのは抵抗を感じるくらい

のものである。

○日 寮会

正式に顔合わせ。いっちよう演説をぶつてやろうと思つていたけれど、しょっぱな、私は五十歳でみんなのお母さんくらいだから大阪のお母さんと思つてと言いたかったのに、五十歳と言ったところでどよめいて中断。息子しかいないけれど自分自身が娘であつた経験があるから何でも相談して言おうと思つたのに、息子と言つただけで、紹介してほしいと声がかかり、ルールを守れ、まず門限を守れ、ボーイフレンドとデートの時は必ず送つてもらえ、女を大事にしない男はだめ、これから間接的に男をしつけるから友達にそう伝えよ。これらはそれぞれ嬌声やら歓声が入つてとぎれとぎれ。末が思いやられる。

○日

夕食はカレーライス。朝からねかせておいた私のカレーは好評で、「ひとくち食べさせてもらったけどおいしかった、欠食せんといたらよかった」という子もいて、してやつたりとほくそ笑んだ。

夜十時すぎ男侵入。ここは女の城だから時々ヘンなのが来ると聞いていたけれど、何も着任早々来なくてもいいのに。しかしこの男、酔って近所の家に侵入したため警察に追われて逃げこんで来たらしい。偶然私が見つけ、出てくさいと言ったら戻りかけたが、空家の旧館があるし庭も広いので見失ったら大変と思い、迎えに行く形となってしまった。刃物なんか持ってたなら危ないとは思ったけれど、ここで私がしっかりしなくては、と果敢？に立ち向かった。幸い無事に門の外へ押し出したら、ちょうど警官が通りかかり、「お知らせですか」「いいえ知りません、勝手に入りこんだんです」その間に男は逃げ、オートバイに追われてつかまえられたが、おかげで名前をきかれ年をきかれ、こちらは大災難。

夜池田署からも電話がかかり、また状況をきかれた。しかしそのあとがへんな具合。「住居侵入だと思えますか」「侵入したから侵入でしょう」「訴えますか、説諭にとどめますか」なんで私が罪と罰を決めんなんのよ。「私としては、はじめはとにかく出てくれればよい、と思いましたが、私も若い女の子を預かっている責任がありますから無条件で許すというわけにはいきません」「そうですね、では嚴重に叱りおくということでしょうか」「こんなのが民主的というのか、いやになるよ全く。

それにしても叱りおくだけでいいのか、あれはきつと酔っていたからだ、日本では

酔っていればかなりのことでも許されるんだから。

その日はあいにく一寮からお風呂に入りに来ていた子があって鍵をかけていなかったのだ。帰る子を電灯とゴルフクラブを持って送って行ったら「帰り気をつけてね」その子が言ってくれた。

○日

会社へ昨夜のことを報告。「何事もなくてよかったけれど、そういう時は寮母さんの中から鍵をかけて警察を呼んでください」と叱られてしまった。とにかく外に出さなければ、というのが頭にあつて、ケイサツなんてと思ひ浮かばなかった。どうも、私が、というのはいかんらしい。

○日

ようやく少し余裕が出てきたので大掃除開始。布巾、雑巾を白くし、塩の入れ物をお湯につけて寝たら、翌日もまだお湯につかっている。アレと思つてよく考えたけれど、いつまでもお湯であるはずがない。どうやら誰かが朝、熱湯にかえておいてくれたらしい。誰か分からんけど、オヌシヤツテクレルヤンカというところ。

○日

夜、ご飯が足りるかとのぞきに行ったら山程残っている。ひとり五勺見当で炊いているのに。最後のH子にもつと食べなさいと言ったけれど、残るのは必定。

おにぎり作ろうか。H子が前はほかほかのでも捨てられた、私は作る側の人間だからもったいなかった、と言い、私だつて代用食で育っているから捨てられへんよ。テレビを見ている子にも手伝わせ、梅干し、塩こぶを提供してもらつて、大小形とりどりのおにぎりをきやあきやあ言いながら作り、あしたの朝食べようとみんなにつこりして引きあげる。

○日朝、はよ行かんとおにぎりなくなる、とH子がねぼけ顔で走りぬけた。

○日

夜、P子が、帰りが十一時をすぎると電話してきたので、いつもは点検終了しましたというのを聞いてからお風呂に入るけれど、今夜はその前に入ったら、当番の子二人がお風呂場まで言いやって来た。「見たな」と言ったら笑いながら行つてしまった。

結局P子は十一時半に帰つて来た。「罰はあるよ、分かつてるね」「分かつてます、

お風呂洗います」でもお風呂洗いは私の体重減らしになるから譲れない。＼おばさんの肩たたき＼にしたろうか。ソレガイヤナラハヨカエレということだ。この日は、もう寝るといふのを「どうせ着替えるのだし、お化粧を落とすのでしょ、お風呂残してあるから入ってお湯を抜くこと、それが罰よ」とした。

○日

寮の中を春一番が吹き抜ける。天候のせいではなくて、新入社員が入ってくるため、半数は他の寮へ替わらなければならない。一寮へ行くのはまだしも、甲子園の第三寮へ行くのはいや、とみんな言う。三人部屋で二人の先輩のところへ入らねばならないからだ。希望者がいなければ抽選で決める。どうせ当たるのなら、と三人が一寮を希望する。退寮するというのが二人あつて、確率は三十三パーセントに減った。三寮へは一人、となる。抽選のための寮会はあさつて午後十時半と決定。

今夜のメニューは八宝菜。豚、イカ、白菜、人参、ピーマン、玉葱、もやし、椎茸、きくらげ、メンマで十宝菜やんか。十二人では白菜は大きい的一個。それぞれを同じ大きさに切る。切るといふのもなかなか楽しい作業。先日大豆と豚、人参、筍、じゃがいも、コンニャク、平天を煮るのがあつた。この時は全部サイコロ。これも夢中で

やっていた。

「ご飯が足りません」（なに？ あんたら気まぐれが揃ってるの）そういう時用に少しとつてあるのを出してジャーに入れる。「残ってる人の数見て食べてね」やがて「おばさん、一人分足りません」えー今日に限ってよう食べるんやね。仕方ない、炊きましよう。九時すぎから炊く。十時、遅番で帰ったK子が最後に食べてる。「ご飯どう？」「おいしいです」「固くない？」「いいえいつもとおんなじです」ああよかった。どうも洋食でスパゲッティがついている時などはあまり食べないらしい。カレーライスの時は一人当たり七勺炊くけれど余らないし、気まぐれではなさそうである。

○日 抽選の寮会

「おばさんクジ作ってください」「えっ私が作るの？ そんなのいやよ」「毎年おばさんが作ります」「そんならアミダクジにしよう。名前を書いて、それぞれ線を加えてよ」

結局若い子ばかり五人、一年目のA子も当たった。A子は去年十人で一緒に入っただけ、一人だけ出なければならぬ。じつとうつむいていたけれどやがて泣き出した。（誰か年長の子が替わってやればいいのに。でも私からは言えない）「誰が三寮へ行

くか相談して決めますから」しばらく話し声が聞こえていた。代表のI子がやって来て「A子がかわいそうだからU子がかかります。U子は私も一緒の方がいいから。三寮へはZさんが行きます」私は年長のG子が「当たらんかってよかった」という顔でさつさと引きあげたのにこだわっていた。でも二年生がやさしく後輩を残してやったことで少しほっとして「ありがとう。つらかったわね」とねぎらった。I子は「毎年ある別れの季節」とひとこと言つてにつこり笑い、おやすみなさいと出て行つた。

○日

二週間経つた。どうやら体が時間を覚えたようだ。いろんなチェックタイムも、もうそろそろかと時計を見たらやはりもうそろそろなのだ。

朝、テレビを聞いていたら昔なじみの名前が聞こえた。へえテレビに出てはるの。食堂へ画像を見に行く。この間はシカゴから絵ハガキが来ていた。中国やイギリスへ行ったり、国内でも飛び回っているらしい。私の、地球上の一点にじっとしているのと対照。でも彼がたとえ北極にいても神戸にいたとしても私からは同じ距離。

ラジオにテレビの音が入るので、それを聞いているのだけれど、これでけっこう事が足りる。ドラマのせりふが見ているのより強く聞こえ、俳優の上手下手がよく分か

る。目の部分が耳に加わるのだろうか。しかし平山郁夫のシルクロードの絵が出ていた（らしい）時は、美しい音楽が鳴っていて思わず目がそちらへいつてしまった。何べん見てもラジオしか見えない。

今日は寮生の欠食が多く帰りも遅い。給料日だからだ。食堂にいた子たちも機嫌がいい。ゆうべ泣いていたA子も「わたし、替わってもらいました」とにこにこしていた。私の分は本社のB子が「初給料です。キャッシュで入っています」と給料袋を持って来てくれた。どちらが寮母か分からぬことをやってお給料をもらえるのだからこんな有難いことはない。おまけにお腹がへつこんで足も細くなってきた。調子にのつて朝走ろうかと思う。

M子が「お先にお風呂いただきました」と言いに来たので「ごていねいなごあいさつおそれいます」と言つてやったらキャツキャツと笑つて行つた。「一緒に入つたらいいのに」「いやよ衰えを確認したくない」「刺激されてシェイプアップすればいい」「それが可能な年じゃないよ」H子とこんな会話。

三月

○日 引つ越し

六畳に二人暮らしなのにどこに入っていたのかと思わせる荷物の山。一寮へ四人が引つ越すのに小型トラックが三往復もした。

一寮へ行くことになっていたU子が病気がちのため、こちらで預かることになり、付添役としてI子も残る。

三寮へはN子とY子の二人が行くことになった。二人がさよならを言いに来たら、涙が出そうになる。一か月しか経っていないけれど、どんな状況であつても別れは悲しい。二人も淋しそうにしてるから道まで送りに出て、車の中へ投げキッスをしてやった。キャアという声が遠ざかる。

夜、U子の具合が悪くなり病院へ運ぶ。I子を残しておいてよかった。しかしU子の病気は栄養失調ではないか。食べ物を見ただけでむかつくとか、好きな物だけをチヨ

コツとつづくだけと言っていた。もちろん寮の食事は食べたこともなし。

このおかずは上等ではないけれど、毎日目先を変えて栄養が行き渡るようになっていく。I子と二人でU子に食べさせる共同作戦を開始。

○日

寮を出た子が欠食のサインをしたり、しなかったり、U子とI子の分が一寮から戻ったりして食数が合わず、きのうも今日も私の分はなし。きのうはS子にも謝って欠食にしてもらった。

実費計算表というのに書き入れたり消したり数字が合わないので四苦八苦していたら、明石の仕事の原稿を取りに来た友達が「あなた、簿記二級なんでしょ」チクシウこんなの簿記と関係ないよ。

しかし欠食を頭数で処理せず、誰が、と顔を思い浮かべたら間違うことはなかったのだ。

最年長のG子が退寮した。

○日 日曜日

テレビっ子のR子に留守番をたのんでダイエーまで行く。ほんとにシャバへ出た、という感じがする。外出できないというよりあの鉄柵の大きな門がいけないのだ。

A子が「ダイエーへ行くのなら歩いて行けますよ」と教えてくれたけれど、ほんとは電車に乗ってみたかった。もう一か月以上電車に乗っていないから。「それなら梅田まで電車乗りに行ったら」とも言ってくれたけれど、そんな時間はないのでやつぱり歩いて行った。カーテン地を買う。しかしシャバに出た、と喜んでいたが人の多さにぞつとして逃げて帰って来た。この間もらった給料の大半を使い、このあとひと月暮らせるか。

○日

メニューは煮魚。サバの、大きいまるまるしたやつ三びき、ごろんとある。出刃包丁はまだ見たことない。一寮の先輩寮母さんに電話。

「ここに出刃というのはないのですか」「ありますよ刃の欠けたのが」「えっ先がなくてどうやるのですか」「ホ・ホ・ホ、技がありますやろ」「ワザてひよつとして私の腕前のことでしょうか」「そう。技でどうぞ」笑いごとじゃないよ。もう知らん。こくなったら大名おろしだ。

しかし三びきめは上手におろせた。上手になったらおしまいかな、もっとやりたい。

○日

疲れ果ててお風呂に入る元気なし。

最後らしいK子にお湯ぬいておいて、と言って寝ていたら、ドアをトントン叩く音がする。よっこらしよ。K子がいって「疲れた時はお風呂に入った方がいいと思います。まだ熱いお湯が出ます。入られても決して後悔しないと思いますよ」

折角言ってくれるのを無にできなくてつかりに行く。お湯の中で長々と寝そべっているとK子の言う通り疲れがとれる。それは分かっているんだけど始動がきかないのだ。

静けさの中蛇口から時々落ちる水の音が、何か優しく聞こえた。

○日 新入社員入寮

七人全員高卒十八歳。

九州からブルートレインで来る子は朝早く着く。しかし午後四時までにということなのでぼつぼつと到着。家族と共に来たのは四人、三人はひとりで来る。最後の子は

大幅に遅れ、電話をかけてきて荷物があるから迎えに来てほしいと言う。

人事部の若い人がとんで行ったが、布のバッグと紙袋二つ。片手でも持てそう。このごろの若いモンはこんなものか。彼女たちを前にした人事氏の訓話も小学生に話すような口調であった。

今夜は新入生の就職を祝って全員赤飯とブリの照り焼き、こうやどうふ、筍、ふきの炊き合わせなど二十五人分は最多。一寮の寮母さんにだし巻を焼いてもらう。彼女、卵を五十個割って大ざっぱに焼き出し、二十五人前に余りもせず足りなくもなし。さすが。シャッポをぬぐ。

先日六人が出て行ったあと新入生が来るまでに休もうと思ったら次々と荷物が届くので休めず疲労困ぱい。友達にSOSを発し、弁当の差し入れをたのんだらコーヒに果物、ビタミン剤まで入っていた。

新入生を部屋に案内した。鍵を渡し、自分で開けさせる。同室の先輩からの手紙が机の上にあり「やったア」と大喜び。

夜はそれぞれ先輩がケーキの箱をさげて帰り、これからペアで生活する後輩の歓迎会をするとのこと。

○日 新入社員入社式

玄関に紺色スーツの集団がいた。「誰か待ってるの、ああ先輩に連れてもらうのね。先輩はまだ……」と言いかけて横切ろうとしたら中にT子がいた。「あ、ごめん。見えなかったのよ」T子はプウとふくれている。しかしT子はきのうまで幼い顔していたにも末っ子という感じだったのに今朝はどうだろう、たしかにお姉さん、という顔になっていた。これは不思議といえるほどのことであつた。

新ちゃん（前からいる寮生は新人をこう呼ぶ）は何をするにも七人一緒。帰りが遅いので心配していたらそれぞれ手に買い物袋をさげて帰つて来た。市場やスーパーで買い物をしてきたらしい。もちろんレジで並ばねばならないけれど、みんな終るのを待つて、そろつて次の所へ行き、同じことをして、とやるものだから時間がかかるのだ。寮の中でも集団で移動している。

○日

しばらく新人生のために朝食も作ることになる。ご飯を前の晩と一緒に炊いて、朝の三十分をさぼろうと思つたのに朝の分は残らない。結局炊き直し。分かりましたよ。こそくなかせぎはやめにします。

避難はしご点検日。袋の中にハシゴがついている。「寮母さん降りてください」「えーっ私？ スカートはいてるから」「スカートでも降りなくては」「そうですね」休みの子三人をたたき起こして参加させたが、やっぱり先頭は私らしい。観念して三階の窓から庭へ降りた。

下から見ると大きなイモムシがくねくねしているみたいで大笑いする。しかし、イザという時揺れるハシゴを確実に踏めるかなという心配が残った。一度全員にやつてもらわなければならぬ。

○日

休みのK子がい物に出るといので手紙をことづけ、おみやげねーとふざけて送り出したらたこ焼きを買ってきてくれた。「冗談だったのに」と言えば「私も冗談のつもりで買いました」「いくらふざけながらも、聞けば買わずにはおられないだろう。悪いことをした。」

K子が行ってきます、ただいま、掃除機借ります、お風呂お先にいただきました、おかずおいしいでした、ごちそうさまでしたと挨拶をよくする。当たり前でよくとは言えないかも知れないけれど他に何もしないのが多いから目立つのだ。

もう全く口を開くのはやめにしていると思われる子がいる。私がおはようと言つても横を向いたまま、おはようと言つてるのかどうか分からない。その子が畳替えの時にやつて来て、どの畳を替えるのか図で示してほしいと言つた。ステレオがあるからとのことであつた。

新人生の集団は二人、三人と分かれはじめた。細胞分裂を見るようでおもしろい。でも何か伝えたい時、一人に言えば、すぐに、確実に伝わる。

○日 日曜日

従妹がのぞきに来た。何かほしい物あるかというので砂糖入れとスプーンをねだつておいたから持つて来てくれた。他に叔母からお寿司、チョコレート、いろいろなどの差し入れ。叔父から写真と沈丁花の花束。久しぶりにしゃべりまくる。しかし時々「おばさん」に変身しなければならない。

今日は野菜のため。従妹がおもしろそうだからやりたいと言う。エプロン貸して、私はカントク。食堂にいたK子が「妹さんですか」あれ、似てる？ でも似てるなんて言われると両方で気が悪いヨ「実は従妹」「お世話になつております」「こちらこそ」従妹も、切るの楽しいねえとザクザクとやつている。

R子が入って来た。「妹なのよ」「従妹さんでしょ。聞きました」

この前のお風呂をのぞかれた時、後日H子に「Eさんに裸見られたよ」と言えば「知ってる」。あんたら放送局持つてるのか。

○日

E子が突然怒鳴りこんで来た。「どうして新ちゃんにお茶碗買わせたんですか。かごは別にしてください」なんのことかさっぱり判らない。どうしたのか、あんた瞬間湯沸かし器？「え？ お茶碗は自分用のを買うのと違うの？」E子は「あんなことしてもらっては困ります」とばかり興奮して言っている。とにかく食堂へ行く。

かごに伏せて置いてあるお茶碗は、会社が買っているものだったのだ。それを私がめいめいで買うのだと思いこんで新人生に買っていらっしやいと言ったからみんな好きなのを買ってきたわけだ。

しかし待てよ。新人生が来た日、本社のK氏がお箸とお湯呑みとご飯茶碗は自分で買いなさいと言ったではないか。私といえどそうそう勝手にことを決めるわけではないのヨ。

でもこうなれば仕方ない。新しいお茶碗は新人生に引っこめてもらう、という解決

法をとる。E子はまだ怒っていたけれど、私はお茶碗を引きあげ新人生に謝りに行つた。「ムダづかいさせてごめんね」

○日

時々来られる本社のK氏は前は人事部で私の面接をした人だ。異動で寮を管轄する総務部へ変られた。だから一番よく声を聞き、顔を見る。この前自転車息子に届けてもらおうと思つてると話したら、会社のを持つて来る、と言われたので放送局に知らせたのになかなか届かない。しびれを切らして催促したら、その夜ワゴンに積んで持つて来て下さった。一緒に私の誕生祝い（会社からの）と海苔、鰹、若布の詰め合わせを下さる。おにぎりに鰹を入れ、たつぷりと海苔が巻けてみんなも喜ぶだろう。ご飯は相変らずたくさん余る時と足りない時という。おにぎりを作ったら、朝までもたず、その夜のうちになくなってしまうこともある。

○日

遅番の子が帰って「おばさん、私のおかずありません」あれまたか。この前足らんかって欠食にしてもらったS子。私はもう食べてしまったし。前科があるのでおそる

おそる確かめる。しかし間違っていないかった。大きな顔してマイクで呼びかける。「どなたか欠食にしたのに食べた人いませんか」

すぐにバタバタとかけ下りて走りぬけ食堂へ飛びこんだのがいた。私もついて入る（食堂にサインした紙がはつてある）。「ごめんなさい。やっぱり私やった。食べていいのかなと思いつながら食べた」とT子。S子は「私も悪い予感がしてた」今日は豚の生姜焼き。おいしかったのだ。T子は「すみません」と小さくなっている。「どうしてくれるのよ」とS子は笑いながら言い、私に「よくあるんです、慣れてます」「この間は私が一枚加わったしね」

「私はSさんとTさんの欠食を入れかえておくから、後の精神的なものはお二人でどうぞ」T子はS子に「何でもしますから」ととりすがり、S子は黙ってインスタントうどんを取り出している。

「ほら、早くお湯を入れてあげなさい」「ハイッ」

○日

目の下がけいれんし、なんかいらいらするので外へ出る。自転車初乗り。ついでに付近を探検する。住宅街の中には商店は全くなし。ポストもない。買ひ物はやっぱり

石橋か池田まで行かねばならない。石橋まで行ってノーションと暮しの手帖を買って帰る。

ようやく本を買える身分になった。音楽会の切符も買えそうだけれど、夜出られなければ聴きに行けない。暇もお金もある、か暇もお金もない、かのどちらかだと思っていたけれどお金はあるけれど行かない、というパターンもあるのねえ、知らなかった。

四月

○日

なんか静かすぎる。寮生が帰ったら名前を書いて時間を書き入れるノートを見に行くと静かなはず、半数が帰っていない。

九時過ぎにA子から電話がかかってきた。「梅田でみんな一緒に仲良くやっています。遅くなるけど責任持つて連れて帰るから」「みんなって誰よ、名前を言つて」「B、T、K、N……」「わあおぼえられへんよ」「遅くなる人みんなです」とにかくその時点で九人が帰っていないかった。門限は十時。

十時十五分、I子が帰る。「私が最後でしようか」「あなた一人？　じゃ八人まだ帰ってないよ」「へえっ」

十時四十五分、待ちかねたチャイム。門を開けに行く。「ただいまア」「ただいまア」「まあまあようこそお帰りで」「すみませーん」「みんなで帰ればおぼさんもこわくな

い、というところね」「新人の歓迎会をしてたんです」（まあいいことやつてたんね）」「ところで私におみやげぐらいあるんでしょね」「いやおみやげ話でいかがでしようか」「もういいわ、早くお風呂に入りなさい」「入っていいんですか」「いいですよ。私だつて折角焚いたのに半分しか入らへんのは残念よ」十時半からは入られないことになっているが、長湯っ子がいて十一時を過ぎる時もあるから同じことだ。ドタドタ、ガヤガヤ、ボタンボタン、夜更けてようやくいつもの二寮らしくなった。

○日

ゆうべの集団門限破りにつきあつて、今朝は店卸しがあるからというS子につきあつて、私は睡眠不足。でも昔の午前様と朝の弁当作りにいつ寝たのかいつ起きたのか分からない生活よりはまし、と思うことにする。それに昼寝ができるのだ。こたつに足を突っこんで寝るのに毛布は大きすぎるのでベビー毛布を買おう、と思ったけれど、もう外出用のコートはいらないのだし、ためこんである布の中から気に入ったウール地をそれ用におろす。これまでも夏服用の布はいくつかエプロンに化けた。もう少し増やしてウィークリーエプロンといこう。

○日

I子がおばさんのおかずは並べ方がいいから食欲が出ると言ってくれた。それに「料理によってお皿の変るのがいい」「そんなことならお易いご用よ。でもお皿が陶器ならいいのね」（ここのはプラスチック）「割れるからでしょ」「あらお皿は割れるものよ。割れなくちゃ」そのあと、私はコーヒークップを割ってしまった。これは大倉の上等だったのに。あんなこと言わなけりゃよかったかな。生あるものは必ず滅す、形あるものは必ず碎く。なんだけど。

ガス代を心配しなくていいから気を大きくして料理ができる。例えばカレーやシチューの時、玉葱をトロトロになるまでいためてベースを作れるし、サラダの時、じゃがいもを丸ごと茹でて、冷えてから皮をむき刻む、この方が形がこわれず味もよいから。

幕の内風とか炊き合わせとか名前が違っても中味はほとんど同じ。だし巻が続くので今日は明日の材料から人参、葱を少しまわして掻き玉にした（実を言うのだし巻は不得手）。その代わり、というわけでもないけれど野菜をいためて卵でとじるとあるのを一人前ずつオムレツにしたりする。

ここにはすごいフライパンがあって（すごいというのは使いこんだ、という意味）、

目玉焼きなら六個焼けるくらいの大きいのと、オムレツ一人前用の小さいのが特によくて気持ちよく使える。ただし、大きい方は重くて片手では持てない。オムレツを二十人前でも焼きたくなるのはこのフライパンのせいかも知れない。とにかく私はオムレツ、サラダとなるとうれしくなつて味を変えたりして楽しんでゐる。私はエンジンのかかりは遅いけれど、やり出せば好きな方らしくて、気がついたら四時間も台所でコトコトやつていたという時があつた。

○日

門限破りが続く。ノートを調べたら、私になつてから断然多い。ナメテルノートチャウカ。私も怒つたらこわいのよ。きのうまず黒板に門限は十時。十一時には部屋に帰ること。十時半以後の電話は取りつがないと書いておいた。今日は仕事で遅くなつた一人を除きみんな門限内。素直やねえ。みんなおりこうさん。

○日

昨夜遅くものすごいブザーの音。すわ火災か、ととんで行つたら受水槽減水というところに赤いランプがついていた。どうすればいいのかこれは聞いてなかった。とに

かく音を消し、長電話している子から電話をとりあげて一寮へSOS。でもあちらも長電話か、どれも通じない。自転車で走り、寮母さんに来てもらったが彼女にも分からない由。あしたのことにしましょうと寝たら今朝はランプが消えていた。一応会社へ電話したら「バルブの具合がいつとき悪かったのでしょうか、そのまま様子をみてください」とのこと。このバルブめ、時々猛烈な金属音を出すのだ。この前は「やかましいね」と言って叩いてやったらピタッと止んだ。

人が言うように三か月から六か月が第一の危機らしいから、これは私に対する警報だったのかも知れない。

五月

○日

寮母になって九十日。二回目の休み。初めて電車に乗り外出する。友達のある受賞を祝う、コーラスOBのパーティに出席、他のお友達二十三人にも会う。始まる前に世話をしたO氏に「あの人のパーティやからこれだけ集まったけど、私のやつたら集まらへんやろね」と冗談を言つてたら、O氏は挨拶のあとで「ミヤさんが出版記念パーティをやるそうですが、ひがんでたからその時は行つてやつてください。会場はロイヤルホテルです」私はとび上がったが、みんな昔から冗談や駄洒落の好きな連中で「なに？ 出版記念？ シュッポン（出奔）記念やつたらすぐやれるでえ」「必ず出席するからサイン入りの本ちょうだい」しかし、老クリスチャンに「そういう仕事もやつておられるのですか」とまじめな顔で聞かれて困つてしまった。でもみんな、冗談にのつたふりして私を励ましてくれたのだと思う。一緒に歌い、三十年付き合つてきた

人達だから。

○日

朝、緑地公園へ遠足に行く、とかわいらしくおにぎりを作っていたS子が、門限をかなり過ぎて酔って帰る。私が出て行くとO子がさつと隠すようにS子を抱えて連れて行った。O子は私に叱られることからかばってやろうというつもりだった。S子は階段を上がりながら「おばさん、すみませーん」と大声でわめき、折角の思いやりも水の泡。しかし私はあの酔っぱらい特有の臭さに昔を思い出してたじろぎ、言葉も出ず見送ってしまった。

しばらくして我に返り、裏切られたような腹立たしさはあるけれど、まだ免疫もできていない若い子があんな酔い方をして急性アルコール中毒になつてもいかん、と見に行った。同室のN子はもとよりみんな親切に新聞紙を敷いたり洗面器を置いたり介抱してやっている。K子がトイレ掃除をしていたらしいので「汚したの」と聞くと「いいえ、違いますっ」

S子よ。お前さんはGパンはいたままころがつているけれど、寮友たちのこのかばい方はどう、よく見なさい。

○日

もう一か月近く放送機が故障しているが修繕に来てくれない。電話の取り次ぎや、お風呂どうぞ、というのを三階まで言いが上がっている。「親切で足の運動させてくれるのでしょ」とイヤミを言いながら走っていたが、今日電気部の人に来て、一分もしないうちに「マイクのテスト中」という声が寮内に響き渡った。「あれ、もう直ったのですか」「マイクの差し込みがゆるかっただけです、ままあることです」と軽蔑の眼差し。ナンチュウコツチャ。かなり機械や電気には強いはずの私なのに、門のチャイムが気まぐれのように鳴ったり鳴らなかったり、原因不明の警報が鳴るし、またか、と思つてよく見なかったのが失敗であつた。三階までのかけ上がりは自業自得のようなもので、イヤミを言う資格はなかったのだ。と素直に反省している私に電気技師は追い討ちをかけた。受水槽の警報について「ブザーが鳴った時、受水槽の蓋をあけてのぞいて見てください、中へ入ってはいけませんよ、水が入っていますから」差しこみも分からぬおぼはんにはこれくらい言わないと見に入つて溺れ死ぬと思つたか。しかし大丈夫よ、その蓋というのが鉄製でビクともしない。したがつて溺れる心配ありません。

○日

連日電器店からテレビが届く。新人生の一人が買えば（親に買ってもらえば）次々と伝染した。テレビがなけりゃステレオや大きなラジカセがあるし、ないのは寮母室だけだ。それに日曜日、テレビっ子でにぎわった食堂もシンとしていて、留守番をたのんで抜け出すというのもできにくくなってしまったではないか。誰か下りて来よ。前のように食堂でわいわい騒いでよ。

六月

○日 洋裁教室始まる

廊下にあったミシンが、寮のもので、こわれているから使えない、と聞いたのはつい最近のこと。調べると、大したこわれ方ではなく、私の手で足りて縫えるようになった。「空室を裁縫室とするから使つて。よければ洋裁教室を開く」と黒板に書いたら「ベリーグッド」と書いた子があり、教えて、と言つてくる子がいた。

教室といつても、めいめいが縫いたいものを縫い、アドバイスをする、ということにする。

U子がウエストにゴムの入った吊りスカートを縫う、と布を買つてきた。「あなたがトップとはねえ、お天気変らないかしら」などと言いながら裁断をし、まち針を打つて「ここ縫つていらつしゃい」「ここをまつるの」これじゃ半分は私がしてしまうことになるのだけれど、二晩で完成した。「みんなに見せてこよう」みんなに「可愛い」

と言つてもらつてU子はご機嫌。「会社でも自慢してやるんだ」と出勤して行つた。

家政科だったというS子とJ子は「血がさわぐ」と言い、今まで何も縫つたことがないというN子も「布をいくら買えばいいのですか」と聞きに來て、やつぱり女の子だなあと思う。やり出せば、きつとみんな縫う喜びを知るだろう。

○日

みんなで草取りをすることになった。ノルマは一人一時間。都合のよい日を予告して、と言つたがすぐやろうという子はいない。やがてN子が○日にすると言つた。N子は何をするのも一番あとで、ゆうゆうと見えるのんびり屋さんなだけけれど。

そしてその一番手がノルマを終えた日、本社から常務さんが旧館を視察に來て、草ぼうぼうの庭も見て「草刈りの人をよこします」と歸られた。私は今までの例で、即実行されるとは思わなかつたけれど、すぐ業者が下見に來て明日から始めますということになった。

黒板にぼちぼちと予定の日が書かれつつあつたのを消し「草取りは業者が來ることになりました。Nさんには申しわけないのですけれど」と書いておいた。

夜みんなが歸り、歓声をあげ、N子に対して同情の声。私も「こういうことになつ

ちゃってごめん」と言ったがN子はニコニコしていた。しかし黒板の申しわけないの横に「ホント!」と書き入れがあり、N子を書いた由。

草取りは結局屈強の若者五人で二日かかった。それはもう徹底的で、我々とはやり方が違うけれど、それと取り組もうとしていたのは無理ではなかったか、と思う。常務さんのお出ましはラッキーだった。

○日

今日のメニューはロールキャベツ、マカロニサラダ、漬け物。ロールキャベツにトマトケチャップがついてサラダに西洋人参が入り、大根のさくら漬け。レッドとオレンジとピンク。こんなの許せない。私の美学(?)に反するのだ。たいていは仕切り皿を使うのだが、お皿を替え、ケチャップをめいめいにかけてるようにし、漬け物は別の小皿に入れる。オーバーに、何事ももう辛抱しないというモットーに従った。

○日

夜、熟睡できず、神経が少々異常である。拘禁性ノイローゼだと素人判断する。もう一か月以上休んでいない。時々石橋、池田まで出かけるけれど、大っぴらでないか

ら気が引けるのだ。もっと休むことにしよう。私が疲れたと言ったら「子」が「休んでください」と言い、行きかけて「年なんだし」とつけ加えた。私は「聞こえたよ。これから月二回休む」と宣言した。

○日 一日ゴキブリの気分

ゴキブリ用の薬をまきに來たので各部屋で立ち会わなければならない。しかし一部屋で降参、あとは廊下で待つ。人畜無害だというけれど、なにが無害なものか、目が痛くなり、頭が痛くなり、体がだるくなって、寝転びたい感じ。要するにゴキブリがひっくり返って虚空をつかんでいる心境がよく分かるのである。

夜になっても匂いが残りムカムカするので、食堂にいたS子達に「私、ひょっとしてゴキブリじゃないかしら」とふざけて気をまぎらした。

○日

今月二回目の休日。この前、月二回休むと宣言したからではないのだけれど、市民会館にオーケストラがやって來るので聴きに行くことにした。

きのう「あしたは目のくさるほど寝るから」と言ったら、みんな笑いこぼれた。目

のくさるほどという言葉を知らないみたい。しかし目がくさるどころか、いつも起きる時間にばっちり目があった。ゆうべは、早く起きなくていいから、と夜更かしをしたからなんのことはない、いつもより睡眠不足なのだ。コンサートで寝ることにしよう。と思ったが、市民会館の広くないホールは音があふれんばかり。久しぶりの生の音楽に酔いしれ、興奮さめやらず。

七月

○日

私の休みの日、どういうわけかF子の休みとよくぶつかり、F子が寮当番をかって出してくれる。食事作り以外の、掃除、留守番をすれば会社から日当が出るシステム。私は出かける時「それじゃ寮母さん行つてきます」と言い、百パーセント「おばさん」を離れ、安心して行くことができるのだ。

しかし、帰ったらY子が「F子が鍵を持って歩いている姿はぴったりで、みんなが『そのまま寮母さんになったらいい』と言ってたの」とおかしそうに報告した。私も想像してそう言われれば、と笑っていたが、トンデモナイ、F子ちゃん、寮母になるのは二十年くらい後にしてね。私はこの仕事が入っていて、まだ譲る気はないのだから。

○日 洋裁教室繁昌

夜は誰かが私のところに来て縫い物をしている。ミシンは二階にあるのだし、手でするところは自室ですればよいものを「この方がすぐ教えてもらえるから」とか言つて座りこむのだ。

それなら雑談しながらいろんなことを聞いてやれ、と思つたら、P子にもN子にも「お婆さんはどうして寮母になつたのですか」と聞かれてしまった。どうやら寮生達もこのチャンスに私の身上調査をやるうと思つてゐるらしい。

○日

M子が「私、ふられたんです」と言う。「えーっ、ふられたつて、いわゆる男にふられたのふられた?」「そうなんですよ。若い女にとられました」若い女にと言つたつて、M子だつて二十歳になつていない。「あなたのような可愛い人をふる男の気が知れんわねえ」「これから休みの日は寮のヌシになります。その前にいつペンめちや飲みしよ。お酒をめちや飲んで、みんなに迷惑かけて……」「それはいいねえ、そうしなさい」

M子はきれいにカールされていた長い髪を切つた。別人の如くボーイッシュになつ

てみんなを驚かせたが、少し憂いを含んだ、お化粧つ氣のない顔は、言いようのないほど美しかった。

○日

ある事件が起こり、私が寮生をかばったために、その子の部内で寮母は何をやつとるんだという声が出た。当然そうなるだろうと覚悟の上のことなんだけど、母親代わりではあるが、こちらでも会社に雇われの身、どこまでやればよいのか、これはむづかしい問題。

幸い、その声が総務部まで届かなかったのか、K氏が無視したのか、お叱りは今のところまだない。

○日

O子とS子の名前が外出票にあるのに、顔を見かけた。「あれ、お出かけじゃなかったの」と言うと「あしたから沖繩へ行きます」と言う。うれしくて待ちきれず書いたらしい。

ここは土曜日も一日中働く代わり、何回もまとめて休みが取れる。もはや若狭、瀬

戸内、南紀へ幾組も泳ぎに出かけ、黒ン坊がいっぱい。冬はスキーで雪焼けしているし、どこへも行かずに焼けている私も目立たなくてよい。

O子とS子を「楽しんでいらっしやい。おみやげはいらないよー」と送り出した。

○日

B子の佐賀県の実家からみなさんに、と西瓜が届いた。「西瓜パーティーをします」マイクで呼んだらみんな下りて来た。その早いこと、寮会の時と比べものにならない。それに「パス」とするという子がいるかと思っただけれど、全員ニコニコと集まった。均等に切れないことがにぎやかさを増し、しかし恨みは残さず、皮と種を残して夏の夜のパーティーは終りを告げた。

○日

屋上で洗濯をしていると、チャイムはもちろん、電話のベルも聞こえない。以前は回しておいて下りていた。ゆすぎにかえてまた下りて、と四十二の階段を三回往復していたが、最近、横着さと体力の加減で、本を持って上がりしばらく屋上で過ごしている。

その間、ベルは鳴っていないよね、きつと。

○日

左手の親指にタコができています。はじめは箒のためかと思ったけれど、タコのできるほど掃除はしていない。気にしながら一日を過ごしてみたら、重いフライパンが原因と判った。片手では持ちにくいけれど、どうしても片手一本で持つことになるのだ。ペンダコならぬパンダコであった。右手にペンダコといえるほどのものはまだない。

○日

M子がお盆休みは後輩のY子に譲って一か月早く島根の実家へ帰った。ビキニの水着を買って日本海で泳ぐ、とうれしそうに出かけたのに、直後の豪雨禍。時間的にみて、家へは帰り着いているはずだけれど、全く連絡はとれない。大阪にいるおばさんから、浜田にいるおじいさんがM子の家へ向かってみたけれど、橋が落ち、道がなくて諦めて引き返したという情報が入る。

寮生はM子の安否を気遣い、毎日帰るなり「Mさんから電話ありましたか」と聞く。

M子は血液型がRhマイナスで、けがでもすれば交通の途絶えた所では大変だろうと

いう心配もあった。

三日後、ようやく店に電話がかかり、元氣でいることが判ったが、こちらからは相変らず通じない。

しかし、予定に一日遅れただけでM子は帰って来た。みんな大歓声で迎えに出る。

M子は「山崩れを二回見た、生きた心地がしなかった、徒歩とタクシーとバスで、電車の動いている所までたどりついた」と話してくれた。

その夜の食事は作ってあったのだけれど、M子が「私の分もあるのですね」と確かめに来たので「ありますよ、お赤飯を炊きたい気分だけれどオムレッツでかんにんしてちょうだい」と言ったら、M子特有のキャツキャツという笑い声が返って来た。

○日

N子が十一時を過ぎて帰ったので、当然分かっていていると思い「日曜はお風呂洗いよ」と言えば、「えーどうしてですか」と言う。「どうしてですか、寮の規則でそうなっているでしょ。いやなら早く帰りなさい」しかしN子は「たった四分過ぎただけなのに」とふくれている。「四分でも過ぎたらだめ、門限からは一時間以上ですよ」とこちらにもむつとする。女の子だし、遅ければ尚のこと無事に帰るよう待っている私の気持ち

も察してもらいたい。やりとりを聞いていたH子が「N子、あきらめえな、楽あれば苦ありよ、遊んで来たんでしょ」

H子、I子、P子はお風呂洗いのベテラン。H子は門を開けに行くと「タダイマア、○日にお風呂洗いまーす」と入って来る。I子のような「お風呂を洗いたいから遅く帰りました」という言い方もある。

○日

ここは虫の多い所。蚊、蠅、ゴキブリはいそうでないのだけれどいろんな虫がいっぱいいる。蟬の声もやかましいくらい。夜は外でカナブンや、雀かと思うほどの蛾がばたばたと飛び、それをねらって大小のヤモリが首を動かしている。

ここ数日は毎夜クモ騒動。掌くらいの大グモが出没するのだ。外へ追い出しても昼の間にちゃんと戻っていて、あれも決まったテリトリーがあるのだろうか。I子とU子の部屋が好きらしい。I子は「もう一緒に暮らすわ」とあきらめた。「まあ豪傑ねえ、私はこわくていてられへんわ」と言っていたら私の部屋へもやって来た。I子の所とは別もの。二回目に追い出す時「こんど来たら殺すからね」と言い渡した。

小さなクモは数知れず。調理場へ行っていて部屋を留守にし、帰ったらクモの糸に

引つかかったりする。大グモは「殺す」が聞こえたか、まだ戻って来ない。

○日

洗濯機を買う。屋上まで行くのがしんどいのと、手拭き、食器拭き、台拭きなどの洗濯を機械にまかせて手の荒れを防ごうという魂胆。応対をした店員が珍しく感じがよかったので冷蔵庫もついでに買った。（こんな買い方する人あるかしら）これで食材を入れる冷蔵庫を半ば私有化していたのも解消。

今までのキャンプ生活みたいなのから脱して、私の部屋もだんだん人の住めるような形になってきた。しかしクーラーはないから、今日は部屋の中で三十三度もあった。職権濫用してボイラーに火を入れ、シャワーにかかって一息つく。

八月

○日 お盆休み

寮生のほとんどは郷里へ帰ってしまった。残っているのは、先月帰ったM子と、沖縄へ行つて来たO子とS子、九月に姉の結婚式に帰るからというE子の四人。

おみやげを先に宅配便で送り、バッグ一つで行く子や、両手一杯の荷物でどうしようと言っている子などさまざまで、しかしみんなうれしそうに出て行つた。

「だれかー、私を連れて帰つてくれる人いないのー、みんな私を捨てて出て行くのねー」といやがらせをやっていたら、I子が「おばさんも休みをとっていなかへ帰つたら」と言つた。しかし私には帰る所はなかったのだ。仕方ない、私は寮でおとなしく留守番しているから、みんな、思う存分うちの人に甘えておいで。

○日

みんないなくて私一人。昼間はいつもこうなんだけれど、夜になっても帰って来ないのだと思つたらなんか淋しい。残っている子達に早く帰ってねと言つておいたら、ちゃんと早く帰つて来てくれた。あした私が出かけるから鍵を持つてくれる人は誰か、と相談するのは家族会議の感じ。いつもは尋ね歩いてさがすのだけれど、あつさり決まつてしまった。

夕食作りは四人分だと普通の家庭と同じ、お風呂はなしで、シャワー用のお湯を沸かすだけ。掃除もさぼり、私も久しぶりの骨休め。

○日

ふるさとの空気を一杯吸つて、戻ったなまりもそのままに、みんな続々と帰つて来た。しかし一様に台風の影響で遊べなかつたと不服そう。

台風さんよ、折角の貴重な休みの時に来ないでやってくれませんか。

○日 日曜日

朝、K子が、薬と体温計と氷枕を、と言つて来た。T子が発熱していた。とりあえず風邪薬をのませたけれど熱は上がり続け、昼頃タクシーで休日急患診療所に連れて

行く。

咽喉炎との診断で薬をもらい一安心、と思ったが、夜になっても熱は下がらず、下痢がはじまって、もう手に負えなくなり、救急車を呼んだ。救急隊員にどこへ行くのか聞いても分からないとのことであつたが、幸い近くの市民病院と決まり、入院した。落ち着くまでは付き添い、夜中の道を一人帰る。

勤労青少年指導者大学の講座生が、企業研修に来て、今日から四十日間、二寮で預かることになった。

○日 寮会

きのう、研修生が到着するなり、T子の入院騒ぎで紹介もできず、今夜あらためて歓迎会をする。

二人とも大学を出ていて二十二歳、やはりさすが、と思わせる。が一人は「芸人」なので、いずれみんなを遊ばせてくれるそう。この二寮も、もひとつにぎやかになりそうだ。

○日

五月山の太文字の火と、猪名川のほとりから打ち上げられる花火を屋上から眺めた。夜は涼しい風が吹いて、はげしかったこの夏もようやく衰えを見せ始めた。今日は処暑。

九月

○日

久しぶりの雨。雷公をお供に景気よく落ちて来た。M子が「毎年今日は雨が降るんです」と言う。どうして分かるのかと思ったら誕生日だからとのこと。「とうとう、二十歳になってしまった」「しもうたということないでしょ、成人おめでとう」やがてO子と梅田へ祝杯をあげに出て行った。他の寮生達も後から合流する由。

雨は、止んで照ったかと思えばまた降り、かなりの降水量であった。

夜になって、H子、A子、B子から「バレーの試合で優勝したから飲んでます。遅くなりませう」と連絡が入る。まわりにいたF子達に「バレー部が優勝したそうよ」と知らせると「ウッソー」「シンジラレン」。私は「そんなこと言うたら怒られるよ」とたしなめていたのだけれど、遅くに帰ったH子達の顔を見て「雨を降らしたのは君達か」と言ってしまう「ワーヒドイ」「先輩におばさんがそう言うたと言うてやろ」と、

恨まれた。

○日

T子が退院した。二、三日で治るだろうと思ったのに、はかばかしくなくて十日もかかってしまった。それも、まだ早過ぎるというのを無理やり帰つて来た。老い(私)はもちろん、若きもこの暑さで参っている。

T子の入院中、寮生に見舞いの手紙や縫いぐるみをことづかつて届けた。「縫いぐるみは恥ずかしいなあ」とT子は言つたけれど「折角だから」と置いてきたら、次に行つた時は抱いて眠っていた。可愛らしかった。

病人用にスープを炊いておいたら、K子が味見をして「おいしい！ 私おばさんの味好きです」と言うのでうれしくなつて「特別よ」とカップに分けた。

○日

秋刀魚を焼こうと袋を開けたらサンマ、サンマ、サンマ、サンマ。おかしいよ。若いモンは魚を敬遠し、希望者は少ないはず。確かめに行つた。九人で二ひきずつ十八ひきあればよかった。四十ひきもあるので返さなければいけないかと給食センターに

電話する。「間違つてすみません、処分してください」処分してと言つたつて……きれいなおいしそうな秋刀魚、捨てられぬ。誰か食べてくれる人いないかな。Rさん(市内に住む三十年來の友人)に聞いてみよう。「助けてよ」「どうしたの」「秋刀魚いらん?」「いる」「二十ぴきもあるのよ」「……とにかく行くわ」助かった。

給食センターでは早朝からパートさんが材料の箱詰めをしているとのことだけれど、ちよくちよく間違いがある。多いばかりではなく、少ない時もある。いつか、焼売六個ずつ十一人分のところ五十個しか入っていない時があった。その時は五個ずつ十人に分けて、私の分はなし。私は作り手として必ず食べることにしているからまわすことができるけれど、まわせない時はどうするのか。給食センターに文句を言ったら「すみませんでした。その代わり卵で入れておきます」と後日卵が六個届いた。これを、焼売が一個足りない十人と、六個足りない私とでドウワケリヤイノサ。多いのも困るし、少ないのはもつと困る。

○日

I子を相手に碁を打つ。I子のお父さんは自称二段とかで、少しは見えて知っているらしいけれど、初めからやつてと言うから、私も早く碁敵をこしらえたいので性急に

いろんなことをつめこんだ。夜になって「寮母さん、私、熱があるの」と言ってきた。「どこもしんどいとこないからこれは知恵熱よね、きつと」

暮のために熱が出ては申しわけないから「もうやめとく？」と言えば、「いいえ、面白いからやりたい」とたのもしい言葉が返って来て、週に二時間ずつすることになった。彼女はきつと私より強くなるだろう。

○日

この頃イカの料理がよくある。私はイカは食べられないので、今まで丸のままのイカを調理したことはなかった。おなかの中はイカなることに（！）なっているのかおそろおそろ開いてみたら、まあ魚と似たようなものであった。

子供の頃からイカを食べると胃痙攣のような痛みが起こり二時間ほど七転八倒しなければならぬ（もつともイカが原因と判るまでに十年くらいかかった）。タコも同様。イカ、タコにあるタウリンという成分がそうさせるとのことだけれど、それで腰が抜ける人もあつて、かなり強力なものらしい。タウリンはコレステロールを溶かす性質があるので、きらいならともかく、好きなのに食べられないのは残念なことである。

○日

涼しくなりかけて一息ついたところで気がゆるんだか、とうとうへばってしまった。鬼の霍乱。丈夫が取り柄の私なのになさけない。歯にもきて顔半分腫れ上がった。鼻が空向いて面白い顔。もう美人になりたいなんて思わない。元の顔でいいから戻りますように。

ここは二日前に食数を知らせてあるし、前日に食材が来ているから、急に休むわけにはいかない。掃除はさぼって、食事だけを休み休み作る。ほとんど寝て暮らす。

寝ながら読む本をと、寮生にマンガを貸してもらった。たいてい可愛らしい恋物語だけれど、読み出したらやめられなくなって、続きや、前の号に戻ったりして、こちらの方にも病みついた。早く次の号が出ないかなあ、と待ち遠しい。

○日

夜、バレーボールをする組と、ジョギングをする組が玄関でわいわい言っていた。バレーボールは隣の公園へ、ジョギングは寮の周りとのこと。

「あんまりキヤアキヤア言わずにやりなさいよ。走る人はかたまつてね」「おばさんもバレーボールやりませんか?」「私ね、バレーボールは苦手なのよ。ジョギングの方へ、

もちよつと元気になつたら参加させてもらうわ」「わー、やろうね、やろうね」

みんな背が高く、ウェアはおてのものであるから、スポーツ選手の集団という感じ。立っているだけですごい迫力がある。これなら痴漢もおそれをなして近寄らないだろう。

十五分ほどしてジョギング組が帰り「疲れたア」とオーバーにロビーでひっくり返る。「えーつ、もう帰つて来たの。まだ十五分しかたつてないよ」「でもー、長いこと走つてへんかったからー、しんどいよー」「汗かいたー、おばさーん、お風呂入れるー」もう、あんたら見かけ倒しなんだから。ウェアが泣くよ。「しょうがないわねえ、まだ少し早いけど入つていいわ」「わー、サンキュー」

こんな調子で、私が参加できるまで続いているのかな、三日坊主、いやあしたはすでにだめかも知れない。

○日 研修生による寮母受難(?)の記

長いと思われた四十日もあつけなく過ぎて、勤労青少年指導者大学の研修生が帰る日が近づいた。「お別れの寮会をやってくださいますね」と本人達からも言つてきて、ひと晩たつぷり時間をとつて歓送会をした。

ジュースで、ありがとう、お元気で、また会いましょうの乾杯をし、感想やら、はなむけのスピーチがあつて、いよいよメインの遊びが始まる。

女ばかり二十二人のキャアキャアワイワイで、食堂は割れそう。お隣さん、かんにんしてください。

研修生は、なれたもので、次々とゲームを進める。二人一組で、相棒の名を呼ばれた時に返事をし、次の指名は本人がする、というゲームで、私はP子と組んだ。練習がすみ、本番となったしよっぱな「Pさん」……Pさんということは私が返事か……「ハイ」

ところが判定は「遅い！」みんなも薄情に「アウト！」「だめな人は抜けて」

テキは、私が年をとっているから反応は遅い、とみたか。しかし確かに返事は遅かった。ガツクリ。その時友人から救いの電話がかかり、中座した。

I子が呼びに来て戻り、みんなで肩を組んでゆれながら歌うのに加わる。これは、歌が一小節終ればトタンに阿波踊りのような格好で踊り、すぐさま元に戻って歌うというのである。私の踊り方が足らんと言われ、これもやけくそでやっていたが、歌が三小節終り、踊りもこれで終りかと踊ったら、他の誰も踊らない。私はみんなの輪の中で一人手を振っていた。

どうやら電話中に、私をおとしいれる相談ができていたらしい。みんなニコニコ。「こらあ。年寄りばかりいいじてえ。末が思いやられるなあ。嫁さんになつても姑をいじめたらいかんよお」私はくやしまぎれにわめきちらした。

二人の研修生は、教員と福祉の仕事に就く予定で、寮生活は初めてで楽しかった由。初めにお客扱いはしなうと言つてあつたので、トイレ掃除も寮当番もやつていた。

寮生は入れ替わり彼女達の部屋を訪ねていたから、別世界の見聞を広げたに違いない。私も違う雰囲気があつて楽しかった。最後にカモにされたけど、まあいいわ。

またきつと遊びに来ると約束して、彼女達は帰つて行つた。別れを惜しんだS子は、送つて行く、と一緒に出かけ、大阪駅まで行つてしまったとのことであつた。

十月

○日

ここにいると、いろんな生き物に会おうけれど、最近また出てくるな、という予感があり、次はなんやろと思っていたら、ロビーの天井に黒いもの。クモにしては足がないし、複雑な形をしている。そろつと見に行ったら蝙蝠であつた。ぶら下がらず、へばりついているから蝙蝠という感じはない。

寮生の反応が面白かつた。「きやあこわい」「ひよつとしてコウモリ?」「やあ可愛い」「コウモリてこんな顔か」「子供の頃よく遊んだわ、体は冷たいよ」「おしっこはどうやってするか知ってる?」「飛ぶ瞬間にするのよ」「血イ吸うの?」「それはマンガでしょ」「なんでこんなところにいるの?」「おばさん飼うの?」「自閉症と違うか、群から離れてじつとして」「ここで冬眠する気やないやろね」「ばたつと落ちたら死んでたなんて」「やめてよ」

結局、二日間へばりつき（夜だけ糞を落とす）三日目、明かりの消えたロビーの中をしばらく飛び回っていたが、開けてやったドアから夜の空へ出て行つた。

何を考えていたのか知らないけれど、どういうつもりかと気になる存在であつた。

○日

今日はお風呂は休み、やつぱり気も体も楽でほつとする。お風呂のある日は、七時半から焚き始め、お湯と水を出して、湯加減をみながら九時までに入れ終り、入浴を始めてからは、ボイラーの温度計と、あと何人かをみて消す時間を決める。お湯の使い方もご飯の残り具合と同じで、その日によつて異なる。ガスの節約はした方がいいし、早過ぎたら、私の入る時にはお湯は出ない、ということになるのでむづかしいところ。

十月から週一回休みになり、今日で二回目。誰か忘れて入りに来る子はいないかと思つていたら、果たしてF子が洗面器とタオルを持つてやつて来た。「ごめんね、今夜はなしよ」「あ、忘れてた。でも、廊下でSさん達に会つたのに、何も言うてくれんと笑つてた。くやしい」

○日

大雨。朝「出かける人は大変ねえ、着替えを持っていらっしやいね」などと言っていたのだけれど、そのうち、食堂に池ができ、下水はあふれ、配電盤の中を水が流れ出した。配電盤の方は技師がとんできて直ったが、食堂の水はモップで拭き取る、という消極的な方法しかなかった。休みのＹ子に手伝ってもらったけれど、雨の間中水との戦いであつた。もうクタクタ。

○日

寮生達の部屋着は、ほとんどトレーニング用のシャツとパンツ（ズボン）である。ただし若いのに（若いからか）赤い色は少ない。寒くなつて、私も長袖トレーナーを着たら「わあ、トレーナー着てはる」と何人かが言つた。「なんでえ、私がトレーナー着たらおかしい？」「いえいえ、若々しくていいです」「そうお？　なんかもつと言いたそうやったよ」

虹色のスリッパを履いたら、「やあ、おばさん、ブリっ子」「あのねえ、スリッパくらい可愛らしいの履かせてよ、私のシュミは幼稚なんだから」

でも、わあトレーナーと言われたのだって、白で胸に黒い線が一本入っているだけ

のさみしい物。私のシュミではない。よし、これからやあだのわあなんかひるまず、派手なものを着ることにする。I子に、「トレーナー買ってちょうだい。紫や緑や黄土はだめよ、赤かピンク」と頼んだ。「みんな赤いのは着ないから、これでバランスがとれるでしょ」

○日

I子が栗拾いに行き、茹でてください、と、ドサツと栗を持ちこんだ。四キロあった。大きなざるに一杯の栗がどうなることかと思っていたけれど、一、二、三時間のうちにあつさりとなくなった。

夜、小さな栗が一つ残っているざるを見た時、ピラニアに喰われた魚の、骨だけになった姿を連想してしまった。二十人というのはやはり、すごい。

○日

Rさんの所へ遊びに行った。留守にしてはいけなかったけれど、内緒。Rさんは昔のコーラスの友人なのに、しゃべってばかりで歌わないから、いっぺん歌おうよということになった。予定はエレクトーンを弾いて歌う、だったけれどエレクトーンはむ

つかしかった。低音がないと言ったら、足で踏むのと言われたけれど、頭がこんがらがってモタモタし、とても伴奏にはならない。

Rさんと私の距離は、直線距離で三・五キロであるが、Rさんが寮へ来る時は二十五分かかり、私がRさんの所へ行くのは二十分足らず。

なんでこうなるかという、自転車でRさんはおとなしく走り、私はぶっ飛ばすから。私だけについて言くと、往きは早く、帰りは遅い。往きは早く着きたいし、帰りは後ろ髪を引かれる分遅いというわけだ。

内緒だし、思うように歌えなかったけれど、久しぶりに大声出して、モヤモヤは解消した。

○日

栗ご飯。一寮さんから、栗をむくのが大変だから、寮生に手伝ってもらいなさい、むくのはいやと言ったら、別メニューにすればよいとのアドバイス。それで一寮は卵料理に変えたとか。うちは「むくから栗ご飯炊いてほしい」と言う子がほとんど。「そうよね、旬のものの食べないと。それに同じようなメニューで飽きるものね」

大きな栗が百個ほどあり、前の晩に鬼皮は私が、渋皮を寮生にむいてもらうことに

する。一人五個。私は、次々と帰って来る子達と一緒にむきながら、おしゃべりと、それぞれの手つきを眺めて楽しんだ。

N子、J子が思いの外上手にむくのでほめると、J子が「おばさんとカツラむきの競争をしてもよい」とのこと。お母さんが食堂をしているから、いつも手伝っていた由。「いやあ、もう先に降参するわ。多分負ける」

それに比べ、H子、D子の危なっかしい手つき。ハラハラし過ぎて神経に悪いので「たのむからもうやめて」とノルマを返上してもらった。でも「包丁が使えなくてどうするの。リングで練習しなさいよ」と言っておいた。包丁の持ち方も教えないで、娘を社会に出す母親の気が知れぬ。その他E子とT子がすっぱかした。

翌日、自分でむいた栗の入っているご飯は特においしかったのか、いつもの倍ほどの量のご飯は、一粒残らず食べ尽くされた。

○日

三十五日ぶりの休日。何はともあれ電車に乗らなければならぬ。友人と京都に行った。

電車に乗る、動く風景を見る、石畳を歩く、木々に囲まれる、これら何の変哲もな

い事柄がうれしくて、やはり何かに不自由するということは、物の有難さが分かってよいのかも知れぬ。それと共に、一つの望みが叶うことと引き換えに、また別の何らかの辛抱はあるということか、などと考えた。

楽あれば苦あり。なるほど、私の待望の外出日に天は味方せず、雨が降り出した。おまけに、履きなれた靴で出たのにマメができてしまった。毎日スリッパやつつかけばかり履いているから、足が伸び伸びとくつろいでいたらしい。しかし目的は達成したので早々に寮へ帰る。

十一月

○日

夜、隣の庭に入りこみ、有刺鉄線の向こうからのぞいている男二人を見つけた。「何かご用ですか」と声をかけたら、自転車に乗って逃げて行った。中学生か、高校生のようであった。のぞいたところで何も見えはしないのに。しかし、こんなのはまだしも、この間は一寮の子が後ろから抱きつかれ、腕をかんでこと無きを得たが、警官が来て気をつけてくださいと言っけれど、私としてはどうしようもなくて困ってしまった。この頃は早くに暗くなる。

○日

東京に帰った研修生から手紙が届いた。四十日間の研修で、寮生活を抜いては何も語れない、とあった。

職場でいろんな事を学んだが、特に寮生の高卒で働いている人と話したことで、改めて大学まで行けた自分の恵まれている環境を実感し、大学生、大卒者にならない強さを見た。高校の教員になる自分にとって、何よりの貴重なものを得られてありがたかった、と書いていた。

その他、帰って他の企業に研修に行った仲間達と話し合った結果の、寮の在り方や、アドバイスがこまごと書いてあった。

私にも外部から見た感想はありがたかった。

○日

新聞の酢の広告に出ていたサワー漬けというのをやってみた。大根、人参、胡瓜を棒に切って、酢、塩、砂糖、花鰹、レモンで漬ける。いつも自分でお漬け物を作っているO子に、残った材料と広告を渡した。後でそれぞれのを試食する。同じように作っても味が違っていて、他の寮生達にも分けてにぎやかであった。

いつか寮に泊まった高知工場の人から、柚子をたくさん送ってもらったので、レモンの代わりに柚子を入れ、鰹を抜いてやってみたら、これが一番いいということになった。

ここしばらくサワー漬けに凝っているという次第。

○日

編み物が大流行り。洋服縫うのは熱が冷めて、今は専ら編むことである。この方は、寮生達はお手のものだ。高校時代にボーイフレンドとお揃いでセーターを編んだ、というのが何人もいる。アラン模様の複雑なものも榮々とこなす。私も編みたくなくて、毛糸をたくさん買った。でもその前にやってしまわなければならない縫い物があるので、今は眺めているだけである。早く編みたい。

○日

休みのA子が「今日は一日中、寮にいて留守番するから、おばさん出かけてもいいですよ」と言ってくれたので、お言葉に甘えて、塚口の叔母の所へ、自転車で行くことにする。

前から、いかにして遠回りせず、自動車の少ない道を行くか、と少しずつ開拓していたのだけれど、猪名川を渡るのには、どうしても一か所大きな道を使わなくてはならない。自動車で走っていた時は、橋なんか何とも思わずに渡っていたのに、それと、

自動車にとつて、自転車が横を走っているのはすごく神経を使うものだから、排気ガスもいやだけれど、なるべく自動車の邪魔になりたくないのである。

空港横の、飛行機が頭上すれすれに飛ぶ道は鶏が遊んでいた。見物人もいたけれど、飛行機が離陸に失敗すればお陀仏、というところ。

地図を見ていながら、左へ曲がる所を右へ曲がつて、大分損をし、一時間後に着いた。走行距離は十キロ。帰りは途中まで別の道を従弟に伴走してもらつて八キロ。四十分足らずであつた。

久しぶりに会つた叔母は「もつと居りなさい」と言つたが、寮が気になるので、後ろ髪引かれながら歸つて来た。道が判つたから、また行きますよ。

○日

門限破りが多いし、罰つきの深夜帰りも多い。果たして門限を破らないのはいるかと、私が来てからのノートを調べてみた。このノートは各自サインと歸つた時間を書くもので、十時を過ぎると赤ペンで書く。

結果は一人もいなかった。ようやるなあ。

P子はお風呂洗いが三回たまっている。十一時を一分でも過ぎたら罰がつくの

だけれど、少し不公平な感じがしないでもない。十一時すれすれに何度も帰って来るC子は、要領がよいと言えばそれまでだけれど、お風呂洗うのいややから、十一時過ぎそうだったらよそに泊まる、というのもかなりいる。

泊めてもらう所がなくて寮に帰って来るP子。「ごめんなさい」と何回も謝って、赤ペンでサインしているのを見ると、一回くらい罰を減らしてやろうという気にさえるのだ。「早く帰れ」と怒っていたのなんか柵にあげて。

○日

I子とU子が、東京デイズニールランドへと、寮内のいいなああの声の渦巻く中を抜けて行つた。私の、例によつて「私も行きたーい」とわめくのは同じ。

二人はちゃっかりと、前に来た研修生の所に泊めてもらう手筈を整え、迎えにも来てもらうのだとのこと。I子がそつと言いに来た。「おばさん、U子と行く私の苦勞、察してちょうだい。あの子のおもりは大変なんだから」U子は体の調子の良否の差があり過ぎるのだ。「元氣？」と聞いたら「元氣、元氣」と指でVサインなど送つて来るかと思えば、急に「歩けない」と顔色なんか全くない時がある。「ほんとに。あんまりムリをしないでね」

そのU子の方が大きくて、「あなた、自分の体力を考えた？」と言ってみたが、これ以上小さくはならないという返事。I子は最悪の場合を考えて、自分のバッグは小さくしたとのことであつた。ご苦勞様。

しかし三日後、二人は元氣に歸つて來た。おみやげにミッキーマウスの壁掛けをもらい、写真など見せてもらつて、ほんとに「私もデイズニーランドに行きたーい」。

○日

もうみんな、お正月のプランを楽しそうに話している。歸るために、一か月前に切符を買わないといけないからだ。

私のお正月はどうなるのか、寮生次第。事務関係は休みに決まっているけれど、年中無休の店もあるので、店に勤めている子は、お正月も残る可能性があるのだ。「あなたのお休みはいつ」と聞いてまわつた。

結局、お正月には仕事をする子はいなかったのだけれど、O子が暮の切符が取れなくて、元日の朝に歸るとのこと。「おばさん、二人で年越しそば食べましょ」それはいいけどね。O子が歸つてしまつたら、私は一人。

まあ行く所もないから同じことか。普段は何とも思わず暮らしているけれど、盆と

正月、
というのが
困る。

十二月

○日

P子が足音高く帰って来て、「おばさん、私に電話がかかってきても、いない、と言ってちょうだい」と、すごい勢いだった。たまたまロビーにいたI子と私はただ、呆然。しかし、私は夜の電話番号はしないので、帰寮のサインがしてあれば、他の寮生はP子がいると言うし、取り次ぐだろう。「黒板に書いておきなさい」と言っただけで、P子は書きかけて消し、怒ったまま行ってしまった。仕方がないから私が「P子石橋へ」と書いておいた。こうすれば、一度帰ったけれど石橋まで出て、いないことになる。しばらくしてY子がお風呂から上がってきて、「Pさんがありがとう、もいい、って」と言いに来た。P子はどうやらボーイフレンドに待ちぼうけをくわされたらしかった。でもお風呂に入っている間に神経が静まって、怒りもおさまったのだろう。やがてP子は、かかって来た電話に出て、長い間話していた。

○日

E子が来年早く退寮するとのこと。鹿児島に帰って、花嫁修業をするらしい。E子は寮内きつてのトラブル・メーカーであった。

それに喜怒哀楽の表わし方が激しく、喜樂の方はいいとして、怒哀の時はすさまじい。受話器をつかんで泣き叫んでいるのはしゅっちゅうだし、機嫌が悪けりや誰にでもニコリとせず、見向きもしない。ややこしい事件もあった。

「そう、それは残念ね」内心ほつとしながら、私は届けにハンコを押した。しかし、E子は自分をよく知っていた。「残念なことではないでしょう」私はちよつとうるたえた。が、がんばった。「どうしてよ、残念ですよ。あなたがいなくなったら淋しすぎるわ」

○日

食堂へ入って行った時、N子が「おばさん、Iさんが変なんですよう」と訴えた。I子が飛び跳ねている。「どうしたの?」と聞いてみたが、返事はなくて、紙をひらさせながらニコニコするばかり。悪いことではなさそうなのでそのまま引きあげた。

後で「東京の研修で知り合った、九州の実家近くの男性から、お正月休みに阿蘇を案内する、という手紙が来たからラッキーなのだ」と言いに来て「うれしいな、うれしいな」と歌うように出て行った。無邪気そのもの。

○日

本社のK氏がボーナスを持って来て下さった。あの人も、沢山持つて来るのなら大威張りで来られるだろうに、お気の毒、などと変な所で同情する。でもいくらであろうと、有難く頂戴しなくては。給料もらって、ボーナスまでもらえるなんて。こんな恵まれたことはないのだから。

しかし、その代わり、のおまけがついていた。一寮を改築のため、その間十四人の寮生を預かることになったのだ。まあ、寮生の多いのはそう大したことはないが、寮母さんも引越して来るのはやばい。それで恐る恐る聞いてみたら、「いや、工事の人が出入りするからいてもらいますが、料理しにだけこちらへ来られます。二人でやってください」と言われた。

正直言って、これは厄介なことになったもんだ。

○日

ここしばらく、お風呂の空くのが十一時をかなり過ぎてから、というのが続いている。十時半からは入れない規則を守らないのがいるらしい。

思いついて「みなさん、お風呂へお入りになりましたか。ただ今十時半でございます」と放送してみたら、その日は十一時前には全員済んで、私の仕事が済まないのもまだ私は入れないという皮肉な結果となった。

しかし、忘年会でみんな帰るのが遅くなる日が多い。どうやら今日も団体で遅くなりそうなので、お湯を入れながら一番に入る。寮生は一緒に入ったらいい、と言うけれど、私は「一人がいいのです」と、まだがんばっている。

○日

A子が発熱して欠勤。風邪薬をのんで寝ていたら熱は下がった、と言っていたのに、夜になってから再び四十度近くに上がって苦しんでいた。昼間、無理にでも病院へ連れて行けばよかった。

救急車で、川西市の病院に入院したが、肋膜にカゲがあるとのことで、しばらくかかりそう。

もう歩けないと言うから救急車を頼んだが、救急車が来た時に寮生に支えられながらも自分で下りて来たので、救急隊員に「歩けるのだったら、自分でタクシーで行ってください」と繰り返し叱られた。昼間病院へ連れて行つとけばよかった、の後悔と共に、そう言われたのがいつまでも心に残る。

○日

枚方市樟葉公民館で催された、クリスマス・キャロルを歌う集い、というのにRさんと出かけた。他のコーラスOB達も一緒。

コーラスをやっていた時は、クリスマス・イヴになると、にわかクリスマスチャンとなり、賛美歌を歌いまくっていたもんだ。今はとにかく何でもいいから歌いたい。

会場はツリーにあかりが灯り、窓ガラスに雪の結晶がはりついていた。少し風邪気味だけれど、どうせ声は出ないから同じことで、それでも楽しんで歌ってきた。

帰り、十数人でお茶を飲み、そろって京阪電車に乗ったのに、電車が止まる度に少しずつ下りて、地下鉄、阪急を乗り換えて行くのは私とRさんの二人となる。

宝塚行きの最終電車は、ほろ酔い機嫌の人達で一杯。私達も久しぶりに思い切り歌い、旧友に会った満足感に酔って、よかったね、と何べんも言い合った。

外は粉雪が舞っていた。

一月

一日

お正月。一人残っていたO子が、早朝の便で帰ってしまったら、三日間私一人。

Rさんが来て「泊まってあげる」「えっ、お正月早々そんなことして、追い出されても知らんよ」彼女は「いいのよ」とけろっとしてる。

友の身を案じて来てくれた厚意は、涙の出るほど有難いけれど、どうか家庭争議が起こりませんように。

結局、Rさんは可愛い顔してさっさと眠り、独り寝に慣れた私は寝つかれず、Rさんの寝息を数える羽目となった。今年はどうやら波乱含み。

○日

雪。大阪の積雪量は明治以来とか。ここは二十センチ。夜明けの、十センチくらい

の時に、D子と小さい雪ダルマを作る。まだどんどん降っていたから、止んでから大きいのを作ろうと思っていたのに、途中から雨が混じりべとべとになってしまった。玄関から門まで、少しでも歩きやすいようにと、スコップを持ち出して雪かきをした。初体験であった。

出かける子の靴の裏を点検、それはよし、それは滑る、ギザギザの入ったのを履きなさい、とお節介をやいていたが、帰って来て、「スノトレ（スキーに行く時に履く靴）履いて行つてよかった、ハイヒールの人は滑つてころんでいたもんね」と言う子がいた。おぼさんの言うことも聞くもんでしょ。

○日

N子がスキーに挑戦する。何事もワンテンポ遅れ、超スローの彼女。「大雪やもんね」「あれえ、雪が降るからスキーをするのですよ」「そうでしたね、失礼致しました」

I子達が「はじめは買わなくていいのよ」と道具を貸して、いろいろとアドバイス。行つてからも「どうしてるかなあ」さつさとやりこなせないのが分かつていてもやはり気になるのだ。私も早く、どうだった？と聞きたいのに、N子の乗ったバスは、雪のために動かず、帰れない。

○日

今年初めての休日。またコーラスOBの懇親会にRさんと出かけた。コーラスをやめて三十年。よくもまあ長いこと引きずっているものよと思うけれど、心身の成長期を過ごしたところは捨てがたい。しゃべって、食べて、歌って、二次会へ。

二次会場は、OBでただ一人故人となったM氏宅で、未亡人も仲間だから、以前と同じように毎年押しかけるのだ。M氏のテノールはまだ耳に残っている。写真が笑っていた。ここでは私は台所の係。O氏が、休みの日くらい台所から離れたらいいのに、と言うけれど、どこへ行っても何となくこういうことになる。そういう運命らしい。

ところでこの帰り道、痴漢に遭った。正しくは痴漢らしい人に遭っただけ。この人、何かするか言うつもりを、私の顔を見て断念し、さっと行く手を開いたのだった。ヤメンカテエヤンカと一瞬気が悪かった。しかし、この若者の心情を察し、気の毒でおかしくなり、あと半分の道のりを笑いながら帰る。残念ヤツタネエ。

○日

一、二寮共に改装工事をする事になり、ここは外に足場を組んでの工事に住人の

移動はなし。しかし、ものすごい音。体中音だらけ。何も考えることができない。休みの子達は「耐えられん」と梅田あたりへ遊びに行ってしまった。

「出て行ける人はいいなあ」と見送ったら、S子が戻って来て、「お大事に」と言ってくれた。

○日

一寮生受け入れ打ち合わせのため、一寮へ行った。寮母のHさんがドアを開けるなり「マジョー」と言う。私はフードつきロングコートを着ていたから魔女か。「やあひどいなあ」と言ったら「私がよ」

見ればキルティングのロングスカートに綿入れ半纏を着ていて、マジョと言うよりはもっと別の感じ。

しかし、Hさんを笑うことはできない。私の炊事場での服装は、スカートの下にジャージ（トレパン）をはいている。F子に「それ、何とかありませんか」と言われたが「なりませんねえ」と言っている。

○日

一寮生が十人引越して来た。やはり仕事は多くなり、早起き、遅寝が加わる。早起きは、始業時間の早い子がいるからで、遅寝は、お風呂の終る時間がどうしてもずれこむから。ただ今二十八人。

○日

Hさんと共同の炊事始まる。彼女は変った人で、おいしいものを作る必要はない、という主義。そのためか、私のすることを一々牽制する。

厚揚げ、飛龍頭を、うす味で炊くと言い張り、私は諦めて譲った。まあ、うちの子達に食べさせるのもいいことかも知れぬ。少々かわいそうな気もするけれど。私はお醤油をかけて食べた。

“ひろうすひろうすひろうすにしょうゆをかけてくらうはわがふるさとのならない” 慰めにふざけてみたが、食事の楽しみがなくなった。ここで気がついた。私は寮生のために、おいしいものを作ろうと思つてやっている、と思つていたが、自分も食べるからであつた。彼女は食べない。



寮の食堂にて仕事着姿の著者（中央、1983年）



ピンクハウス柄の生地をワンピースに仕立てた（1984年。→p.110参照）

二年目

二月

○日

一寮の工事が二週間の予定のところ、追加工事があり、二週間の延期となる。気苦
労（！）と睡眠不足がたまり、疲労困ぱい。

はじめから四週間と言ってくれませんか。覚悟が違うし、二週間用のスタミナ配分
だったから困るのデス。もうあとのことは考えられず、一日ずつぎりぎりのところで
持ちこたえている状態。工事、早く終れ。

○日

C子が結婚する。勤めは辞めないとのことだけれど、もちろん寮は出ることになる。
正直言って私はその日を待っていた。C子は規則違反の常習者で、いくら注意しても
平気で破り、もう頭にきていたからだ。

こんなに図太い神経の持ち主も珍しい。ハンコ押して、と来たから「結婚するそうだけど大丈夫かな。規則破ってばかりで。世間はここのように甘くはないよ」と言つてやった。そうしたら涼しい声で「大丈夫ですよ」

ということは、これからちゃんとやりますよということか、破つても暮らせるわということか。多分あとの方だろう。C子がそんなに急に変わるはずがないもの。こういうのが、お行儀の悪い子供を叱りもしない母親になるのだ。それを阻止できない悔いは残るが、これでお荷物は一つ減つた。

○日

夜、H子が電話で「外泊するつもりだったけどやめて十一時発の電車で帰ります、入れてもらえるでしょうか」と言つてきた。「何を言つてるの、入れるに決まつてるじゃないの。気をつけて帰りなさいよ」と返事をする。

しかし、予定の時間を過ぎてても帰らない。十一時に乗つたのに途中でトラブルにあつたか、また気が変つたのか。寮生達も心配して下りて来た。T子が見て来る、と自転車にとび乗つた。十二時を過ぎて、見に行く方も危ないからやめなさいと言つたのに、聞かないで行つてしまった。その直後H子から電話がかかり、石橋の駅に在るとのこ

と。

やがてT子と二人で帰って来て、やれやれであった。私が「乗る、と言った電車に乗りなさい。乗らなかつたら連絡しなさいよ」と言ったら、H子はすみませんと言いながら泣いている。どうやら道々、T子にこっぴどくおそれたらしい。そのあと、同僚のT子、A子、同室のO子が揃って「監督が行き届かずご迷惑をかけました。これから気をつけますから」と丁寧なごあいさつ。こんな言葉を聞くとは思わなかった。真夜中のお風呂に入り、寝る。

○日

寮内はバレンタインデー一色に明け暮れる。恋人のいる子はセーターを編み、恋人のいない子も、お目当ての男性にチョコレートあげるらしい。大っぴらに「どんなん買たん？」と見せ合つて、当節の若いモンは、からつとしている。

私はオイラニハカンケイナイ、と思つていたが、ひよんなことから関係ができた。U子が「おばさん、チョコレートあげる、好きな取つて」とどつさり持つて来た。聞けば、U子の彼氏が八人の女の子からチョコレートをもらつたそうで、U子が、そんなに沢山もらったのなら私のはいらんね、とむくれたら、彼氏は交換してくれ、

と言ったので、自分のを渡して八人分全部取ってきてやったの、ということであった。そして「これとこれはギリ（義理）チョコ、これはあやしい、心がこもってる」などと言いながら選り分けている。「あーあ、その心がこんな所でさまよっているなんて、かわいそうねえ」私はほんとに同情して、それでも色とりどりのかわいいチョコレートをいくつかもらった。

しかしこのいわくのあるチョコレート、どんな味がすることやら。

○日

A子の、彼にプレゼントするチョコキができ上がった。これははじめ、去年のクリスマス・プレゼントのセーターになるはずであった。それが急病で入院したため、バレンタインデーに、と目標が変わった。そして一月中頃、半身を編んだところで、大き過ぎるかなあ、と私の所へ相談にやって来た。大き過ぎるかなあどころではない。

「お相撲さんが着られそうねえ、ほどいて編み直した方がいいわ」「えーっ、こんな沢山編んだのに」「何でもっと早く気がつかなかったのよ。ほどくのは勇気がいって、ずるずると編んでしまいがちだけど」（これはいつも私が経験していることだ）それでゲージを取り直して編み直し。

しかし、バレンタインデーが近づいても、身頃が編めていない。その上、毛糸が少し足りないようだ。「もうあきらめてチョッキにしたら？」それでもA子は、セーターにする、と言っていたのだが、同じ毛糸が売り切れで、やむなく袖なしにせざるを得なくなった。が、それもバレンタインデーには間に合わず。

編み直しのところで、マフラーにするように言ったらよかった。それなら完成しただろうから。

それにつけても、私がチョッキと言う度に、A子におこられる。「おばさん、ベストと言って」

三月

○日

今夜は、新入生を迎える前に先輩教育をやるう、と新旧寮長が言い出して、新規則を加え、規則再確認の寮会。

連絡しないで門限を破ったら、罰として掃除、十時半を過ぎて帰るのが三回たまったらトイレ掃除、外泊は月四回まで、というのが加わる。十時半を過ぎて、というのは、十一時を過ぎたらお風呂洗いの罰があるけれど、十時五十九分に何回帰っても何もなし、というのは不公平ではないか、と私が提案した。

寮生達は「ひえー」と不満声を発したが、罰の前に、女の子が帰る時間としては十時が限度、というのがあるからですよ。掃除がいやなら早く帰りなさい。

その他、物の使い方、後始末の仕方、ゴミの出し方に至るまでこまごまと説明。（ここまでせんらんか）

何か言いたいことないか、の新寮長I子の問いかけに、O子が「寮母さんはもっと怒っていいと思う」と言った。怒れば後味が悪いし、ついのみこむせがついていたが、最近、あまりの不愉快さに堪忍袋の緒が切れて、一人の寮生を叱ったところだった。でもその子は改まり、あとはからつとしていいるから、やはり言うべきであると思っていたので「これから怒ります」と答える。

散会のあとI子が、夜騒いだら電源を切る手があるのを教えてくれた。彼女は寮に三年住んでいる。前の寮母さんによく電源を切られたとのこと。

○日

薔薇の花束をもらった。思いを花に託した男性からではなく、荷物を運んで来た新入生に。「えっ下さるの、わあうれしいなあ、やあきれいやねえ」しばしうつとりとする。二十本余りの薔薇は、カスミ草に囲まれて、やさしい朱色をしていた。適当な花瓶がないので、ゴミ籠の底に水の入ったどんぶりを置き、ばさつと投げ入れる。ベリーグッド。

夜は寮会。みんなが集まったところを見計らって、薔薇を持ちこむ。「わあすごい」「きれいでしょ」「どうしたの?」「もらった」「え?」「もらったのよ、私でもお花を

くれる人もいるんです」「きゃあ」

きゃあ、ということは、私の言い方で誤解したのでしょ、しめしめ、させておきましよう。五十を過ぎたって、男から花はもらいたいんだもの。

○日

Y子が帰って、また痴漢がいる、と言いに来た。もう、この寒いのにご苦労さん。懷中電灯を持って見に行くと、自転車に乗った三人の少年がいた。ついむかつとして「何か用！」と怒鳴ったら、一人が「犬が中にいるのですけど」と言う。でも疑わしかった。そんなこと言うて中をのぞこうという魂胆か。「犬なんか入れるようになつていませんよ」それでも「庭の方から入りました」と。私は「そうお？」と半信半疑となる。

そこへ彼の言うことを証明する犬がやって来た。人間ほどの大きな犬。ア、ごめん、疑って。

「中へ入って捕まえてもいいですか」少年は断つて入り、犬を抱いて出て行つた。ほんとに悪かった。この頃、男を見れば痴漢と思う癖がついて。その上、今までの本痴漢には「何かご用ですか」と丁寧な声をかけていたのに今夜に限って怒鳴つたのだ。

Y子に言う。「ぬれぎぬやったよ、あの人達」Y子も「悪いことしたなあ、私も門を入る時、痴漢、と聞こえるように言うてしもうた」

少年達の気持ちは傷ついたに違いない。ごめんなさい。

○日

新入生入寮。今年は岐阜、宮津、江津（島根）、指宿、津名（兵庫）と小豆島の出身、大卒二、高卒四、の六人。

夕食はお赤飯とブリの照り焼き、炊き合わせなど二十七人なので、Rさんに応援をたのんだ。「口は動かさず、手を動かそう」をモットーに、でもやはり少しは口も動かして楽しくこしらえた。Rさんは娘のAちゃんと買い物に行く予定を変更してくださったのだ。Aちゃんごめんね。

総務のK氏が来られて新入生に訓話。私と、寮則を説明するためにI子が同席する。それぞれ自己紹介をした時、私が「ドジな寮母ですが……」と言ったところ、K氏が「ドジで分かりますか？」と口を挟んだ。私が謙遜して言っているのを、これでは念押しになるではないか。ほんとはそんなにドジばかりやってるわけではないのですけどねえ。

○日

朝氣持ちよくピアノ・ソナタを聴いていたら電話のベルが鳴った。しもた、給食センターからだ。二日後の食数を知らさなければならぬのに、勘定をしていない。鳴っている電話機を横目に食堂へ走りこみ、欠食のサイン数を数える。七人。二十三人から七人引いたらなんぼや。ベルの音を数えながら、走りながらとはいえ、すぐ出てこない。どうなってるの？ こんなことってあるの？ 自分の頭がおそろしくなった。モウロクしたとしてもミヤサン、一年生のサンスウではありませんか。

○日

夜遅く、新入生の母親から「娘が痴漢にあった、大阪は怖いと泣いて帰りがっている。お父さんも心配のあまり寝こんだ」との電話。鹿児島弁の上、興奮しておられるから、はつきりと聞き分けられなかったけれど、どうやら右の趣旨の繰り返しで、私の「明日から先輩をボディガードとしてついて行かせます」と言うのも聞こえないようであった。

本人に聞いてみると、地下鉄の梅田、淀屋橋間で男に触られたとのこと。そして「も

う明日から行きたくない、鹿児島で就職する、就職するなら早い方がいいし、お父さんも帰って来いと言うからすぐ帰る」と言う。

同室のJ子は「痴漢がいやなのは分かるけど、みんなそれぞれの方法でたたかっている、そんなことで辞めるのはもったいないから思い直すように」と説得を続けた。しかし、もう行かないと言うばかりなので、私はK氏と相談をした。

翌朝J子が「あの子が帰りたいのは痴漢のためではない、お父さんが恋しいからということが判った」と言う。K氏が近郊にいる兄、叔母に連絡を取り、来てもらって改めて事情を聞き、言い分を聞いたところでも、やはりホームシックの重症ということに落ち着いた。

お兄さんは「あの子は末っ子で、十歳まで母親と寝ていたが、親も帰って来いというのはけしからん」と怒っておられた。しかし、誰がどう言おうと彼女の帰りたい気持ちは変らず、二日間研修に通っただけで、退職と決まった。

折角大阪へ働きに来たのに、すぐ帰りたくなるのは意志が弱過ぎる、とも言えるけれど、彼女の様子を見ていたら弱いどころか、出身校、会社、先輩への迷惑などみんな押し退けて、ただ「帰る」のを押し通したのは強い、としか言いようがない。

親離れができなかった、ということでもあるけれど、あとで判ったことは、父親が、

彼女と別れた日から寝こんだとのことで、それを電話で知らせて来たりして、子離れのできていない父親が原因とも言える。しかし、それなら初めから遠くへ手放さなければいいではないか。手放したのなら、子のことを思つて淋しいのは辛抱するべきだし、私は初めはかわいそうと思つていたのだけれど、だんだん腹が立つてきた。

それじゃ荷物をまとめましようと言うと、もうしてある、とのこと。一同無言で、荷物をお兄さんの車に押しこんだ。

彼女の帰つたあと、部屋、郵便受け、靴箱の名札がみんな抜いてあり、彼女がいた、という痕跡は何もなかった。

○日

門限破りに罰がついたら、みんなの帰りが早くなったこと、あきれるほどである。罰がなけりや守れない、のは悲しくもあるけれど、門限を守れ、と言い続けたり、まだか、とイライラしなくてもよくなつて、気は楽になった。

靴箱の上に靴を置かないようにといくら言つてもきかないので「これから靴箱の上にあるものは捨てますよ」と言い渡した。でもみんなは「そう言つてもおばさん、捨てへんよきつと」となめているだろう。

しかし、もう甘くないよ。誰か置いたら即、捨てることにする。

○日

給食センターには四、五人の栄養士がいて、週毎に二人ずつ交替でメニューを作っている。好みが出るのか、仕入れの関係か、揚げ物が続いたり、煮物が続いたりする。キャベツを刻みだしたら毎日刻む。キャベツは葉をはがさずに数個のブロックに分けて、刻んでから洗い、その時に芯の部分をより出すという方法。

自分の刻んだキャベツの山を眺め、時々買って食べるお弁当の中のキャベツと比べ、私の方が細かい、などと他愛のないことであつたが、その弁当屋さんが店を閉じた。私に負けたからかも知れない。

○日

新入生のC子は、水泳の平泳ぎでモントリオールでのオリンピックに出たそうである。

新人紹介の寮会で「水泳をやったから、膝から下がO脚です」と笑わせていたが、そんなすごいものとは知らなかった。「どうして言わなかったのよ」と言えば「行っ

ただけですから」と笑っている。

肩幅は少し広いけれど、小柄な細い体で、とてもそんなふうには見えない。大卒なのに高卒よりも幼い感じの可愛らしい子である。

そのC子とI子が揃って真夜中に帰り、二日続けての罰のお風呂掃除をやった。C子はそれを会社に行ってしゃべったらしく、I子が怒っている「そんなことをうれしそうに言うもんじゃないよ」C子は「それでも、面白かったもん」

C子は寮生活は初めてで、何でも面白いらしい。電話で延々と、こうやってああやって、と誰かに報告している。もちろんここでも、門限破って罰の掃除をした、とうれしそうに言っているのに違いない。

○日

鏡のついたソーイングボックスというのを買って、化粧品入れにした。この私がその気になるなんて、自分でもおかしいけれど、これを亡父に見せてやりたいような気がする。父はいつも「お化粧をしなさい」とうるさく言っていた。私はその度に「素颜の勝負よ」などとほざいていたのだった。

もう素颜は通用しなくなつて、遅まきながら、クリームを塗りこんでいるが、この

鏡がうぬぼれ鏡でないのが残念である。

○日

K子は大型不用品収集家。まず、お向かいさんが応接セットを出された時に、交渉して椅子二脚をもらい、空き部屋へ入れさせてと言つて来た。実はこれは私ももらおうか、と思つた代物であつたけれど、部屋のことを考えて断念したのだった。次に、会社から卓球台をもらつて来た。まだ充分使える、試合のできる本格的なもので、大きなトラックで運びこんだ。食堂を片付けて、卓球大会をしようとのこと。さびの出た植木棚のようなものも、どこからか持つて来て、ピンクのペンキを塗っている。次は何を持ちこむのかな。ピアノがほしいから、私も一緒に探し歩こうかしら。

○日

ボイラー故障。一時間焚いて、お湯を出したつもりが、水が出てきて初めて気がついたので、寮生に知らせるのが遅れてしまった。寮生は、一寮へもらいに行くのと、銭湯へ行くのと、もういい、のに別れる。

銭湯組が一時間経つても帰らない。夜道でもしや、と心配していたら、ようやくM

子達が帰り「駅前のお風呂屋さん、スチームバスや泡のやらがあつて面白かった、また行きたい、病みついた」とのこと。

四月

○日

B子とY子が夜、縄跳びをしている。私は出て行って冷やかす。「この前のジョギングは、三日坊主どころか一日坊主やったねエ」B子は「絶対に、三日坊主にしないから、おばさん見ていてね」と言った。

翌日も跳んでいて、私を見て二本、指を立てた。Vサインかと思っていたら、次の日は三本の指。三日続いたよ、ということである。しかし、その次の夜は雨が降っていたので四本の指は見られず、その次は晴れていたが姿は見えなかった。

そのうち、私も参加しようと思っていたんだから、早く再開してちょうだいよ。

○日

急に春めいた日曜日。K子とM子の部屋をのぞいたら二人ともマンガを読んでい

た。私は「いい若いモンが二人して、寮の狭い部屋で寝転んで、マンガを読んでいるなんて、どんなもんなあ」と言っちゃった。

M子は「私は出かけました。ローソンまで」と。ローソンだなんて、ついそこではないか。「五月山は桜が咲いているかも知れないよ。ハイキングして、陽に当たっていらつしやいよ」

しばらくして二人で下りて来たが「お風呂へ行つて来ます」「お風呂もいいだろうけどねえ……」

考えてみれば、外へ出たがつているのは私だけで、毎日通勤している彼女達は、いくら外が気持ちのいい日であっても、休みの日はごろっと寝転んでいたのかも知れない。それにしても、ボーイフレンドぐらい、いないのですかねえ。

○日

今年に入つて四回目の休み。お昼まで寝ていようと思つたのに、寮生のかけるレコードで目が覚めてしまった。大音響で聴きたかつたらイヤホンを使え、と言つてあるのに。

お昼前から出かけ、布地屋、本屋をのぞき外の空気を吸つた。

体の疲れはとれていないが、気持ちの疲れはとれて、不思議なことに、さあ働こう、という気になつてくる。いつもは、働かねばならない、というのだけれど。やはり働きづめ、というのは精神に悪いのだ。もう少し休みがあるといいのにと、喉元過ぎれば欲が出てくるが、今年は去年より三日増えて十七回休める。二十日に一回の勘定。大切にしなくては。

五月

○日

最近の朝の調理場はにぎやかだ。何も食べずに行く子もいるけれど、夕食よりもたつぷりと食べて行く子が、かなりいる。パンも厚切りを二枚というのもあって、やはり若いのか。

レタスを敷いて、シーチキンやコーンを山とのせ、ミルクやヨーグルト、ジュースなど、驚くほどの食欲で平らげる。

お昼用のお弁当を作るのがはやっていて、これがまた品数の多いデラックス版で、私はただただ感心して見ているばかり。下ごしらえをするのも遠慮することにした。じゃまになるというより、たじたじしてしまう感じがして、である。

梅田店に勤めているS子とY子は、お弁当を阪急か阪神百貨店の屋上で食べるのだそう。地下で仕事をしている彼女達には、空が見えることが、もう一つのごちそう

として加わる。

○日

池田駅前の商店街でいい布を見つけた。店の中に他にもありそうなので入ったら、店の主人がいろいろ出してきて、これはどうですかとすすめる。黒地にプリントのものがよかったので買ったので買った。「これはいいですよ。ピンクハウスの柄です」とつけ加えた。

寮に帰り、通りかかったS子をつかまえて「ピンクハウスで何？」と聞いたら「ブティックの名前で、ブランド名です」という返事であった。女の子好みのものであるらしい。

ワンピースに仕立ててからS子に見せたら「ピンクハウスそのもの」と言う。N子は「デイスコで踊る時に着るのにぴったり」などと言って、やはり五十過ぎのおばはんの柄ではなさそうである。

でもあの店の人がすすめたのだから。変だと思えばすすめないだろう、とあの人を味方にして、休みの日に着て出かけた。着てみたらそう抵抗はなかった。それにピンクハウスであろうと、派手なものでであろうと、私は気に入ったものは着る主義。

しかしN子に、貸してほしい、と言われてしまった。

○日

寮会で、一人ずつ何か言うことになった。H子が、みなさんからの質問にお答えします、と言ったが、誰も発言せず白けたので、私が、モットウにしていることは何ですか、と聞いた。そうしたらすかさず「寮則を守ることです」という答が返って来た。全員が大爆笑。

H子は先日深夜帰りをやったところだし、いつも長電話、そのため風呂に入るのも遅れる。最近二回続けて自転車でご出勤遊ばした。寝過ごして、駅までの時間を自転車で短縮するというわけ。自転車は休みの子の買い物で、その日は乗りたい子が沢山いて迷惑したのだ。欠食のサインをしておきながら忘れて、遅番の子が帰った時になくて、H子が食べたことが判る。

H子はまた、電車の中に忘れ物をする名人。「慣れてますから」とケロッとして、忘れ物案内所に電話している。「何回やったの？ 私が知ってるだけでも三回だけ」と言う。「三回です」この前はバッグを忘れた。「バッグをどうしたら忘れられるの」とあきれたら「網棚に置いたから」とこれまたケロリ。

噂ではメガネも電車の中でなくしたとか。かけているメガネをどうして……。不思議な人。

タイル貼りをした。床用のPタイル、三十×三十センチのを二十枚。古くなったせいか、廊下のあちこちが浮き上がっていた。会社からの修繕を待つよりは、と物置に入りこんで、予備のタイルと糊を探し出した。

大きいパレットナイフみたいなもので、糊をのばし、タイルを置くだけだけれど、サイズがほんの少し違って継ぎ目が浮き上がる。それを無理やり押しこんで、体重にものをいわせて押さえ、あとは消火器を重石にした。

点々と、または線に、新しいタイルの部分が目立っていて、これは私がした、と満足する。

十三日

夜十時半頃、寮長が「寮母さん、ちよつと食堂まで来てください」と言ってきた。時々、料理の味見に呼び出されることがあるので、それかと思つて行つてみたら、全員集まっていた、せーのと声を合わせて「大阪のお母さん、母の日おめでとう……」と言ひ出した。私はもう驚いてうろたえて、あとの言葉はよく聞こえなかった。カー

ネーシヨンの大きな花束をもらい、ありがとうを言うのがやつとであった。

寮生達、いつもは言うことを聞かないでおきながら、しゃれたことをするではないか。普段の食堂の出入りはバタバタと派手に音を立てて、誰が通ったか判るほどのに、今夜は静かであった。私に気づかれないよう、足音を忍ばせて集まったらしい。

部屋に帰り、ポリバケツに生けて眺める。赤い、二十本のカーネーションは、一人の顔のように見えた。

○日

R子が友人の結婚式に出かけた。ピンクのパーティードレスの上に白のジャケットをおって、華やかで美しい。

この頃の若者は、暗い色のものばかり身に着けて、目を楽しませることが少ないけれど、だからこういう時は、さながら蛹が蝶にかえたような感じとなる。

女の子はいいなあ、と私はしばらく見惚れていた。

○日

R子にもらった引き出物の鯛で、鯛めしを炊く。

鯛を取り出して、身をほぐしてご飯の上へ戻していたらN子が「犬のご飯作ってるみたい」と言う。「いやなこと言うな。食べさしたらへんよ」

「鯛めしほしい人にはあげます」と言ったら、みんな取りに来て、N子も来て「おいしそう」とお愛想を言った。

○日

伝言板が届く。全員へのお知らせや個人への電話の取り次ぎなどは黒板に書くようになっていたが、めいめいのその日の勤務時間、在・不在が判るようなものがほしいと、三月の中頃、I子がK氏に言ったのだった。

しかし以後音沙汰なしで、ついこの間I子と二人で「あれはきいてもらわれへんらしいね、寮費が余ってるから買おうか」と言っていたら、それが聞こえたかして、K氏が持つて来て下さった。

白いボードに磁石のついたボタンを、在寮、外出のところにひつつける。遅番、クラブで遅くなります、とか書けば、一々出がけや電話で言わなくてもいいわけだ。I子が門限破りと外泊の数も書き入れようと言いついて、その欄も作り、正の字を入れる。これはかなりのブレイキになりそうな気がする。

しかし、ボタンを移し替えるのを忘れるのが多い。誰も忘れなかったのは初日だけ。あとは見事に交替で忘れる。でも私は楽になった。電話がかかった時、三階まで見に行かなくてもすむし、夜、誰が帰ってないか、サイン帳を確かめなくても一目で判る。

○日

衣替えの季節。急に暑くなったこともあって、みんな軽い服装となりすつきりとする。寮内で履くスリッパも新調が多くなった。電話の取り次ぎで、入浴中の寮生はスリッパを見るのだけれど、変った当座は誰か判らない。しかし、スリッパにも性格や好みが出て、色柄を見ればなるほど、と思えて、覚えるのにそう苦労しなくてもよい。

六月

○日

一月くらい前に総務のMさんから「みんなで琵琶湖へ行くのですが参加されますか」と電話がかかった。

ミシガン号に乗るのだと聞いて、私は即、行きますと答えた。二年程前、ショーボート・ミシガンが就航した時から乗りたかったのだ。

しかし、「あとで詳しいことは知らせます」とのことだったのに、何も言つて来ない。寮生には、その日休むと言つてあるし、しびれを切らして尋ねた。

返事は「あれを武田さんに知らせたのは間違いでした」であつた。旅行用の積立金がないからという理由である。お金はちゃんと払いますから連れてちようだい、と言いたかつたけれど、言えない雰囲気では電話は切れた。

休みを戻し、黒板に「お風呂、食事あります 欠食のサインをしてください」と書

いた。

○日

雑草の季節。ちゃんと言うと、草取りをしなくては、と気になる季節。

昨年は業者に頼んだから、らくちんだったけれど、今年はまだ来ない。K氏に言っているが、なんか来ないような気がする。草を取ったあと、薬剤をまいたけれど、今年には別の草が生えている。一時は一面カラスの豌豆であった。それが終わればまた別のやつ。これも昨年はなかった。雑草学の権威に聞けば「そういうもん」で、手で取るのが一番とのこと。

しかし多過ぎて手に負えない。道に面した所を取ってまわるのが精一杯で、最後の所へ行き着いたと思ったら、はじめの所はもう生えている。

よく生えるなあ、イヤミを含んで思っているのだけれど、その昔、鳥の餌と、宿題の干し草作りのために草を探し回ったことを懐かしく思い出した。今ならそんなノルマもイチコロだ。

○日

寮長のI子が来月退社と決まった。I子は明るくて、よく気がつくし、頼もしい私の片腕だったのに。

「ここにいても結婚相手は見つかりそうにないので九州に帰ります」と言う。結婚なんか、と言いたいけれど、若い娘に言えることではない。

昨年私がここに引越して来た日に、I子は一人寮にいた。熱を出して、パジャマにガウンの姿で氷枕をぶら下げて歩いてた。そのあと彼女はすぐスキーに出かけ、午後早く帰って来たが、私がチャイムのスイッチを戻すのを忘れたために、しばらく締め出していたことがあった。それで一番に名前を覚えたのだった。

もつというよ、とも言えないし、ようやく私は「手紙書くわ」と言った。

ボイラー室で例のやかましい金属音が鳴り出した。一回十分程だけれど夜中でも鳴る。近所からの文句の出ないのが不思議な程である。密接はしていないけれど届かぬはずはない。もちろん私も胃にくる。

今日は鳴り出した時、ボイラー室の戸を開け、玄関の戸も開けて、ロビーから電気部に電話をかけた。

「二寮です」

「なんやえらい音がしてますなあ」

「あれを止めてください」

「すぐ手配します」

大成功。今まで電気部の人 came 時に、やかましい音がするとと言っても、その時鳴っていないければ調べてもらえなかった。早くこの手に気がつくべきであった。説明を百回するより音一つである。

すぐに近くの修理屋が来て、音は消えた。

○日

最近、ボタンキュウといかなくなつた。疲れ過ぎと年のせいとその他もろもろ。

ふと、昔母が入院して眠れないと言つた時に、玉葱を持つて行つたことを思い出した。枕許に置いておくと眠れるとのことで、実際それはよく効いて、同室のおばあさんにもあげて喜ばれた。

それで私もやってみることにした。玉葱がどう作用するのだろうと疑いながら、母を懐かしがっているうちに眠つてしまった。玉葱が効いたのかどうか判らない。

○日

F子は雨女。彼女が休みの日はほんとによく雨が降る。たまに晴れようもんなら「おばさん、今日はよいお天気ですウ」とニコニコ言いに来て、可哀相なほどである。

という私も最近雨につかれていて、休みというと、昨日までカンカン照りだったのに今日は朝から降っている、という具合。雨も降らなくちゃならないだろうけれど、何も私のひと月ぶりの休みだというのに降らんでもいいでしょと恨めしい。

未練たらしく、十円はりこんで電話で気象ニュースを聞いた。

「どういうわけか、突然、空から雨雲が消えました」なんてことはない。

七月

○日

オリンピックが近づいて、元オリンピック水泳選手のC子は特に忙しい。企画の水着の部に属しているから、寒い頃から今度のオリンピック用の水着のことで、何度も東京まで往復していた。私も早くに数着の水着を見せてもらった。それらを彼女が着て泳いで試し、デザインの良否も加味されて、競技術、飛込用が決まるとのことであった。

先日C子がやって来て「おばさんがいいねと言わはったのに決まりました」と言った。私も見る目はあるらしい。

日本選手が日の丸を揚げたら、M社はその水着を、大々的に売り出す予定、だそうである。

○日

このところ寮内、テレビのナイター観戦でかまびすしい。巨人と阪神が好んで(?) Bクラス入りを争っているものだから両ファンも力が入る。

鹿児島、島根出身は全員巨人ファン。兵庫、和歌山あたりは阪神ファン。食堂のテレビで両方一緒に見ていれば、同じ場面で「チャンスー」「ピンチ!」の声が入り交いややこしい。

大負けしている方のファンが「チャンネル回していい?」と言えば、勝っている方は「なんでえ、回したらあかん」しかし、こっちの戦いは単なる力関係で片が付く。新ちゃんが譲る。でも見えにくいけれど各室にテレビがあるから、見に帰ればよいので恨みは残らない。

○日

裏の家が、古い日本家屋を壊し、ビルを建ててらしい。晴雨にかかわらず朝早くからシヨベルカーが動き出す。勤務の関係で十時まで寝る子も、寝てられへん、と起きしてしまう。しかし、出かける寮生達はまだいい。私は一日中その音を聞いているわけで、頭の中までえぐられそうになる。ラジオの音を大きくしても役に立たない。

気分転換にと自転車に乗って出かけたなら、見事にひっくり返ってしまった。平坦な道だったのに、理由は判らない。変になった頭でいくら考えても判るはずはないけれど。

○日

今年入ったP子が、同室のT子のいびきが大きくて眠れない、と訴えて来た。よく聞けば入寮以来ずっとだったとのこと。T子は鼻が悪いと言っていて、いびきをかきそうだけれど、去年は同室予定の子が入寮せず、ずっと一人暮らしをしていたから、この種の悩みを聞く機会がなかったのだ。

私は、何で早く言わなかったのよ、と言ったものの、どうすればよいか困ってしまった。T子に言ったところですぐいびきが止まるわけでなし、その後の二人の仲がまズくなっても困るし。考えた挙句、P子を別の部屋に寝かせることにした。

全員に、暑くなってきたから、夜寝る時だけ空き部屋を使ってよろしい、と言って回り、P子にはT子の前で私に、行ってもいいんですか、と言わせた。

一時しのぎではあるがひとまず解決。寒くなるまでにT子に治療を勧めるか何とかしなくてはと頭が痛い。

○日

I子が退寮した。彼女は会社を辞めてから三日間、昼間は荷作りをし、夜は送別会に出かける。そして十一時を過ぎて帰ってはお風呂場を洗う。

「もう免除してあげる」と言っても「いいえ、規則ですから」ときかなかつた。「罰掃除の記録保持者と違うかなあ」と言えば「そうかも知れません」と笑っていた。罰掃除をためたままゆうゆうと退寮した子もあるし、いろいろだ。

二日間お昼とお茶の時間を共に過ごし、ついでに、「結婚相手は外面にとらわれず人間性を見よ」と偉そうに説教をしたが、果たして彼女の将来はどうなるか。私と気があっているくらいだから心配なのだ。

別れが近づいてきたら「もう、うろうろしてー、目ざわりでいかんから、はよ消えてしまつてよ」と冗談でごまかし、さよならの時は「後ろ姿を見送るのはいややからここで終りにするわ」と門のドアをボタンと音をたてて閉めた。

○日

大阪梅雨明けの日、Rさんとフェスティバルホールへ行つた。コーラス仲間が出演

する大フィル演奏会。例の如く天井桟敷で聴いた。

はねた後、友人がカラオケバーに連れてやると言う。「えー、折角いい音楽聴いたのに」「雰囲気こわれるわ」

しかしRさんも私もカラオケなるものは初めてだから好奇心につられてついて行った。元コーラス団員といいながら、歌えない、歌謡曲を知らない私には、"騒音のるつぼ"でしかなかったが、人々のカラオケに熱中するわけはよく判った。ストレス解消にはうってつけのもののだろう。お酒が飲めて、歌えたらどんなにいいか、ここだけでもはや二つの楽しみを持つていない私は残念で仕方がない。

途中で抜け出して十二時前に帰り、マニキュアを落とし、寮母に戻る。

八月

○日

蟬捕りの子供達が行く。それぞれ長い柄の網を持ち、カゴをぶら下げて。

今日は酒屋のおじさんも仲間入り。昔とった杵柄か、返す刀ならぬ網で二匹捕って、集団の中の一番小さい子の一番収穫の少ないカゴの中に入れてやり、お酒を積んだオートバイで走り去った。その後ろ姿に向かつて、子供達の「ありがとう」の大合唱。カゴの蟬も鳴いた。（ありがとうとは言っていない、か）

私が通りかかると、飛んだ蟬を追った網が回るのが一緒になり、私は自転車ごとひっくり返りそうになった。「すみません、ごめんなさい」謝った男の子が可愛かったので、私はニツコリして「がんばりね」と言っちゃった。

（いいのよ、私を蟬と間違えたのでなければ。捕えられて、この上またカゴの中に入れられるのであれば、よ）

○日

健康診断を受けに、大阪市東区横堀の結核予防会へ行く。人事部から、近くの病院で受けてください、と言つて来たが、午前中の外出はできにくいし、行つたとしても各科を回れば時間がかかりそうなので、寮生達の間に割りこんだ。

所要時間は二時間。検査料はタダ。『お達し』に逆らつたけれどカマウモンカ。診断書が人事部に届けばいいのだし、私一人紛れこんだところでどうということはないだろう。

電車に乗れて、御堂筋を少し歩いて、精神的治療にもなつた。贅沢を言えば、身長が二ミリ減つていてガツクリし、視力は両方とも一・五でまだその先も見えそうであつたこと。看護婦さんがコンタクトレンズ入れてませんね、と確かめた。遠くがよく見える分、近くがさっぱり見えないのだ。

○日

寮生達のお行儀の悪さに堪忍袋の緒が切れそう。寮会で「言いたくないのだけど」と立ち上がったら、K子が「わあ、お婆さんの久しぶりの文句!」と言つた。うれし

そんな顔をして言うものだから氣勢がそがれるではないか。

それでも私は「もうちょつと何事もきちんとやれませんか。ここは養護施設じゃないのだから」と言つた。しかし、もつと、目はあるの、神経はどうなってるの、頭は？体が不自由なのか、と言つてやろうと思つていたが言わずに終る。この前は「あなたはお嬢様育ちやからねえ」と皮肉作戦に出たが効き目がないので、今度は侮辱作戦でいこうと思つたのに。

体が不自由どころか、敵はさるもの、自分達のやつていることは分かつていて、私が文句を言うのも分かつていて、かく乱戦法を考えたか。私の負け戦であつた。

○日

C子の深夜帰りが続く。昨日は十二時半、この前は二時に近かつた。会議の後、飲み食いしていたからと。

昨夜は送つて来る人に、一言文句を言おう、と待ち構えていたのだけれど、門の所までは来なかつた。この前は送つて来たものの「時間を間違えまして」という言い訳であつた。間違つたとはどういうことか。「あんまり楽しかつたので時を忘れました」というのならまだ許せる。第一、寮や寮母を何だと思つているのか。C子も自宅なら

二時には帰らないだろう。寮母はチャイムを鳴らせば門を開けるロボットじゃないのよ。私はC子が急病にでもなったのか、そこまで帰ったものの、痴漢に遭ったのではないか、消息を知ってだてはないかと落ち着かないのだ。それに翌朝は他の寮生のために早く起きなければならず、C子にだけつきあっているわけにはいかないのだから。ゆうべC子には「お嬢さんの帰る時刻ではありませんよ」とだけ言い、今日会社へ電話をした。直接C子の部へ、寮生を早く帰して、と言いたかったけれど、K氏を通すことにした。K氏は「そういうことはすぐ言ってください、嚴重注意します」と言われたが、私は何か後味が悪い。規則を大破りしないでちょうだい。こんな気分はもう沢山よ。

○日

今年も勤労青少年指導者大学講座生が一人入寮した。企業研修としてM社で約一月働いたためである。

歓迎の寮会をした時、H子が「あなたの名前が池田早月（さつき）さんと聞いて、ここは池田市で、近くに五月山（さつきやま）があるから、てつきりシャレだと思った」と笑わせた。

国立大の在籍中にアメリカ留学をしたという彼女は、好奇心のかたまりという感じで、M社の研修の合間に京阪神を探訪する、と張り切っている。そして大阪弁をものにしたいから教えてほしいとのこと。しかし、ここは九州、四国、山陰、瀬戸内出身者ばかりで、大阪人はいない。彼女が帰る時、どんな大阪弁が仕込まれているだろう。

九月

○日

今までに見たこともない黒雲が出て、にわかになつたような空から、どしや降りの雨が落ち、間もなくあつさり止んだとたんに、冷たい風が吹き出した。三十三度あつた室内の温度が二十八度に下がる。まさに天からの贈り物という気がする。

けれども、気温が連日三十五度を超えても、あのやかましいほどの蟬の声はなくなり、わずかにツクツクボウシの声が残るだけ、夜は秋の虫が鳴いている。人間の体感より、昆虫の方が季節を先取りするらしい。入って来たしじみ蝶が出てやる間もなく横たわり、息絶えた。さしもの雑草も勢いがなくなつた。

縫い物をしていて、急に木綿の軽さが空しくなり、ウールの感触が懐かしくなる。秋の風に似合う服を作りたい。

○日

大失敗の巻。ロールキャベツを炊きながら、換気扇の掃除をしていたら煙の匂い。もう走るまでもない、だめに決まっている。

時間があまりない。とにかくダイエーへ行く。いつか、冷凍のロールキャベツを見たことがあるから。でもそれらしきものは見当たらない。メニューを変えて、寮生に謝ろう。けれど何にしようかすぐにできるもの。

それも思いつかず、通りかかった店員に聞いてみた。

「こんなのしかありませんが」と指さしたのが、まさしくお目当ての冷凍ロールキャベツ。こんなのしかって、これがほしかったんですよ。ウロがきてて、目の前にあったのに見えなかったのだ。

とんで帰り、炊き直して、危うくセーフ。

この失敗は二回目である。(ナンテえらそうに言えることではないが)この前は豆を焦がした。その時は朝から始めたので、慌てることなく豆を買い、ゆっくりつけて、ゆっくり炊いてすましていられた。

煮物をしている時は、他のことをしない、そばを離れない、が鉄則。

○日

A子の食べる分が無い。二回連続である。A子がふくれて部屋へ入ってしまった、と一緒に帰ったE子が言いに来た。

この前はT子が、外泊するから食事は処分して、と電話を受けたC子に言ったので、C子が処分した。でもT子の分は、はじめから無かったのだ。その時はA子が、ラーメンがあるからいい、と言い、A子とT子の欠食を入れ替えて解決した。しかし、A子の気持ちはすんでいなかったのだろう。それも無理はない。遅番で疲れて帰り、さあ食べよう、と思ったら無いのだから。

今日はN子が間違つて食べたのが判る。あれほど自分の分はあるのか確かめて食べなさいと言つてあるのに。

幸い、ご飯は余っていたので、卵を焼きサラダを作つてA子を呼んだ。他にいろいろ有り合わせを出したので、E子達は「いいなあ、おばさんの特別食が食べられて」と言い、A子はようやくニツコリとした。

○日

このところ、町の不良どもとの戦いに明け暮れている。彼らはこの空き家になつ

ている旧館に入りこんで、生活(?)をしようとやって来るのだ。

はじめは庭に入りこむだけだと思っていたから、入らないでね、とやさしく追い出した。彼らも、すみません、とおとなしかったのに、次の日堀をよじ登っているところを見つけて怒鳴ったら、とたんに反抗的になり、悪態をついた。明らかに未成年の男女四人。

しかし、帰ったと思ったのが、また有刺鉄線を乗り越えて旧館の中に入ったらしい。私はもうあの恐ろしいな若者達に立ち向かう元氣はなくて警察を呼んだ。れっきとした不法侵入だもの。

でも警察がやって来る前に、彼らは気配を察して立ち去った。警官もなんですぐ来てくれないのだろう。それにようやくやって来た警官は、出て行つたのならもういいだろう、という態度であつた。

閉鎖してあるはずの旧館を見に行くと、二階の雨戸をはずし、ガラスを割って入つたことが判つた。ちょうど来ていた電気部の技師に、雨戸を全部釘で打ち付けてもらう。しかしこれでも破ろうと思えば簡単だろう。

彼らはその次の日も夜中にやって来た。しかし打ち付けてあるのは知らなかったらしい。あきらめて帰つたが、どうもまた壊しにやって来るような気がする。それがで

きなければ、腹いせに火をつけるかも知れない。やりかねない、と思える者達だ。気になって眠れなくなつた。

追つても追つてもたかる蠅のような感じがある。叩きたい。強力な蠅叩きがほしい。

○日

蠅叩きを求めるより、たかるものをなくした方が早いのではないか。廃屋になりかけの旧館を取り除けばいいのだけれど、会社は経費の問題でしぶっている。

けれども、この度は、不良少年達の通路となつている朽ちかけた非常階段だけでも壊してほしい、と私はK氏に頼んだ。社内の工事が済み次第、という返事にも、今日明日のうちに是非、とがんばつた。別の用事で電話をかけて来た電気部の人にも頼んだ。強引過ぎる、と思われても、私も寮生を預かつているのだし、何かが起こつたら、あの時に……と後悔するよりはましだろう。

今日は朝から雨の中を大きなハンマーを持った人が、壊しに来てくれた。ハンマーの破壊音が一つ鳴る度に、私の神経も一つ伸びて、私はようやく安心する。

K氏に、現在進行中、の電話をかけた。

十月

○日

鳥取と淡路島からの受験生が一泊した。同じ出身校のE子達が、受験の要領を教えたり、雑談をして、気をほぐしてやっていた。私は久しぶりに朝ご飯の支度をする。二人とも、かなりの食欲をみせて、ゆうべもぐっすり眠った、と言っていた。こちらの思うほど緊張の固まりではないらしい。

彼女達を「がんばってね。合格して、来年またこの寮へ帰っていらっしやいね」と送り出した。

○日

F子がはたちになった。同期生で祝杯をあげているから遅くなる、と連絡があつた。二年目の子のグループは、人数が一番多くて元気がある。さぞかしにぎやかにやって

いるのだろう。しかし、祝杯などと言っているが、中には未成年もいるはず。そしてジュースで乾杯をしているはずもない。いいのかなあ。

この中のF子が一番激しく殻を脱いだ。島根から出て来た時は、方言はそのまま、何事にも慣れなくてうろろろしていたが、難波の直営店に勤めて一年半経った今、すっかり都会っ子になった。特に、着る物のコーディネートがすばらしい。色彩感覚も抜群で、私はただ感心して見ているだけ。

同じ経過をたどりながら、一向に変らないという子もいるから、これは持つて生まれたものだと思われる。隠れていたものが芽を出し、めきめき成長するのを見るのは、興味深く楽しいものだ。

でも、親にすれば、帰郷する度に美しく変って行く娘を見て、果たしてうれしいだけだろうか。心配もあるだろうなあ、と私は老婆心を出してしまう。

○日

各部屋のドアの把手に、いろんな当番の札がぶら下がっている。当番が済めば次の部屋に回す。

「寮当番」これだけ一枚で、私が休んだ日に鍵を持ち、その他寮母の代わりをする。

他の札は各階一枚ずつ。

「冷蔵庫掃除」十日毎に中の物を全部出して拭き、霜取りをする。食品には持ち主の名前と買った日を書いてあるから、日付を見て、古くなったものは、当番の判断で捨ててもよいことになっている。

「屋上掃除」「トイレ掃除」は日曜日。

「掃除当番」は毎日。廊下を掃いて拭いて、窓などの点検、各部屋をのぞいて「戸締まりお願いします。おやすみなさい」と言って回り、私の所に「○階掃除点検終了しました」と言いに来る。

これらの札には楽しいイラストが描いてあり、リボンも色々だ。当番の間隔が異なるから、一部屋に四枚も重なってぶら下がることもあるが、どうやらどの当番も二人が交替でしているらしいので、重なってもうまくこなしているようだ。

その他各人の好みでドアにぎやかに何かが引っ付いてある。「○子と○子の部屋」「就寝中」「ノックしてね」中には「勉強中」というのもあり、ほんまかいな、と思うけれど、だから入るなということだろうから、確かめたことはない。

○日

石橋はお菓子屋さんの多い町。地元の和菓子屋さんもいくつもあり、洋菓子の有名店はほとんど揃っているらしい。寮生は、お菓子の種類によって何はどこのがよい、とか言っているが、私には関係がないので氣を入れて聞いたことがない。「不二家の隣の花屋さん」と言われても、雲をつかむよう。

手紙を出して、と頼んだらO子が「おばさんはここから一番近いポストはどこか知ってますか」と聞いた。私は「手紙だけでようやく世間とつながってるこの私に、今になって何を言ってくれるのよ。私は石橋、池田の郵便局とポストとは、お友達のようなものよ」と言ったけれど、ほんとに自転車で走っていても、ポストはすぐに氣がつく。寮生は郵便をあんまり出さないらしくて、O子もポストの場所をようやく知ったらしい。

私のお菓子屋と同じように、通っていても目に入らないのかも知れない。各科の病院をよく知っているのはU子。それぞれで面白い。

私は、ポストと布地屋と手芸材料店とたばこ屋の位置がわかる。

○日

電気部のM氏が修理に来て下手なことをして、私が見ていたものだから「これじゃ

寮母さんを笑えませんなあ」と苦笑している。へえ、私を笑い者にしているの、けしからんわ。あ、しかし無理もない。私が大工仕事や自動車の整備をするなんて、この人には決して信じてもらえないだろう。私の手に負えないと思い「早く修理に来て」と電話をかけて、ようやく来てもらったら、いつもあつと言う間に直るんだから。

マイクが使えなかったのは、差しこみがゆるかっただけ。時計が動かなかったのは、入れ替えた電池がちゃんと入っていなかった。よくこわれる洗濯機だから、寮生の、動かない、と言うのを聞いて、見に行かずに、また、と思いこんだ。実はコードがソケットからはずれていたからであつた。

お風呂の明かりが消えた時、電球のカバーが動かなかったので来てもらったら、彼の手がかかるなり、易々と動いた。「私がしてみた時は固かったのに」「反対に回しておられたのと違いますか」「まさか」

でも彼は、私ならやりかねないと思っているに違いない。仕方ない。どういうわけかこうなるのだ。

「いいのですよ。電球一個であろうと、とんで来ますから」「ほんとにすみませんでした。なるべくご足労をおかけしないようにがんばります」彼は疑わしい目で笑っている。私はそれ以上は言えない。オホホと笑っておいた。

○日

カラヤン指揮、ベルリン・フィルの演奏会の日。

切符は四月の終りに、早朝から四時間余り並んで手に入れたが、大きな期待と共に、私の足とふところの痛さはカラヤン氏に判るかしら、と少々恨めしかった。あれから百七十三日。

私は熱烈なカラヤンのファンではなかったけれど、ふだんラジオを聞き流していても惹きつけられ、一生懸命聴いてしまうのは、決まってカラヤンとベルリン・フィルの演奏であった。世界で指折りの、というのは私にも判るらしい。その彼らが来て、聴きに行けるのなら、やはりこれは少々無理をしても行かざるまい。殊に多分これが最後になるだろうカラヤン氏は、一目見ておきたかった。しかし、春が過ぎ夏を越して十月というのは遠かった。しかもその間、両者の不仲説はなかなか覆らず、ようやく十月に入ってから、予定は実施される見込みというニュースを外電が伝えたが、カラヤン氏の病気で中止になるかも知れないという不安は残っていた。

それでも何事もなく、喜んでホールに入ったら、演奏曲目が変更されます、とのことで、私が特に聴きたかった曲が抜けていてがっくり。なんで、と喉元過ぎれば欲が

出て来る。

カラヤン氏は、思ったより以上に体の具合は良くないようであった。しかし彼の振るタクトから、ベルリン・フィルの変りない、美しく力強い音が引き出され、私達を夢心地にさせた。今ここにカラヤンがいて、ベルリン・フィルが勢揃いしている。私にはもひとつ夢のよう、としか言いようがなかった。

音楽が流れ、時が流れて、あっけないくらいの感じで終章となった。静かに胸の中にためていた聴衆の興奮が爆発する。体の悪いカラヤン氏を何度も呼び返すのは気の毒な気もするが、拍手は鳴り止まず。彼もドアまでの距離をはしより、途中から戻ったりして私達の拍手を受けた。

ベルリン・フィルの人達が引きあげて、ホール内が明るくなっても帰る気になれなくてぐずぐずしていた聴衆がようやく帰りかけた時、突然ドアが開いてカラヤン氏が現れた。譜面を片付ける人がいるだけの空っぽのステージに彼が出て来ようとは、一つも考えなかったのに。聴衆は総立ち。帰りかけた人も戻り、歓声と拍手が渦巻いた。彼もそれに応え、キスを投げる。二度とここへやって来ることがないのを、彼は知っているのだろう。彼の方が私達との別れを惜しんでいるように見えた。私は涙が出そうになった。かつての帝王ではない、好々爺のカラヤンがそこにいたからだ。体を大

事にしてまた来てね、と言いたくなるほどであった。

三度目の最後のドアは、彼自身がノブを掴んで閉め、去り難い聴衆の微笑を誘う。体は衰えても、最後まで彼は、ヘルベルト・フォン・カラヤンであった。

十一月

○日

今日は栗ご飯である。去年みんなで栗の皮をむき大騒ぎをした、あれからもう一年も経つのかと感無量である。今年もまたみんなに手伝ってもらうことにしたが、もう一緒にするのは止めにした。危なっかしい手つきを見ているのは神経に悪いからだ。その代わり、これでむいたと言えるのかというのが一杯ある。結局大半は手を加える。一つずつ見てみると、一刀彫りかと思わせる芸術的なや、何やら字や形を刻みこんだようなのや、渋皮をこうも良い按配に点々と残したものよと感心せざるを得ないものや、でもどれも苦心のあとがありありで、ほほえましかった。

去年、私が「たのむからもうやめて」と言ったM子はどうしたのだろうと思っていたら「おばさん、私ちゃんと六個むきました」と言いに来た。私は思わず「怪我してない？」と聞いた。M子は手を広げてひらひらさせて笑っている。「ごくろうさま、

お手並み拝見に行きたかったなあ、残念なことをしたわ」と言っただが、どんな手つきだったか、まだ見ない方がいいだろう。

○日

かつて長電話の横綱と大関だった二人が、それぞれ長電話の相手と結婚して出て行ったので、しばらく電話機の前は空いていたが、よくしたもので（よくないけど）すぐ昇格するのが現れる。他の人もかけたいのだし、外からもかかって来るのだから、一人占めにしてはいけなと言つてあるのに、一度とりついたらなかなか離れない。連夜三台の電話がふさがりっぱなしである。

黒板に「長電話はやめましょう」と書いた。変りがないのでその下に「ね」と書き加える。変化なし。またその下に「！」と書いた。だめ。次は「ましようね！」を消して「て下さい」と書いた。しかしなんのことはない。毎日私一人が黒板で遊んでいるようなものだ。

他の寮生がはつきりと文句を言わないのは、どうやら、明日は我が身かも知れない、からのようである。ボーイフレンドができたらとたんに長電話となる。

○日

会社を信じ、庭の手入れをしに来るのを待つて半年。もう来るわけではない。蚊も蜂も姿を消したので草取りにかかる。よくもまあ名もない（といったらテンノウヘイカにおこられるけれど）雑草がはびこるものよ。セイダカアワダチソウ（名前があった！）は三メートル近い。セイダカとは言うたと感心する。気をつけたのに、イノコヅチ（！）に引っ付かれた。頭のとっぺんから足まで。もう私自身がイノコヅチになったような気分である。

一回やつて全体の十分の一か。しばらく雑草のジャングルの中での戦いが続く。

○日

会社から節電、節水、節ガスをとのお達しがあつた。それぞれムダをしているのは確かである。特に洗濯の時、ゆすぎの水の出しっ放しが多い。ひどいのは洗った水を流さないで、もちろん中身をしぼりもせずにもそのまま水を出してゆすぎにかえる。水がきれいになるまで何十分もかかる。切り替えて部屋に帰り、テレビを見たり、レコードを聴いたりしているから、きれいになってもすぐ止めるわけでもない。水はモーターで屋上へ上げているのだからムダな電気も使うのだ。どことも同じらしくて、一寮の

寮母さんも怒っていた。一寮は別にブザーが鳴るようにしたそうだ。K氏が二寮もいるのだったら、と言われたが、寮生が部屋に帰っても時計はあるのだし、何分経ったかは大体判るのだから、横着をしなければよいので、気をつけるよう言いますから、と断った。

機械に時を刻んでもらい、音で知らせてもらわなければ動けない、というのは情けないではないか。お尻を叩いて追わなければ動かない田んぼの牛と同じでは困るわ、と思つてから笑つてしまった。古い。今は牛の代わりに機械が耕していたのだつた。しかし笑つている場合ではなく、言つたものの、一々見張つているのではないから、きちんとやつているのかどうか判らない。信用しては裏切られているからやつぱり音で規制しなければならぬのだらうか、とすつきりしない気持ちである。

○日

H子が「今日はみんな遅くなるから、明日のお風呂の休みを今日と代えていただけませんか」と言いに来た。詳しく聞いてみると、C子を除いたあとの人が宴会に出席するとのこと。そう言えば欠食が多く、二人分はできないから全員欠食にした日であつた。

食事なし、お風呂なしでは、おばさん稼業も廃業同然、いつそ職場放棄してやろうかしらん。誰か遊んでくれる人いないかなあ。

チャンスとばかりに、普段会いたくても会えない人に電話をかけたが、どの人も留守。謀反を起こさずそこにじっとしていなさいということか。いやですよ、こんなチャンスはめったにないのだから。結局、叔母の家に行った。叔母も会っておきたい人の一人である。

叔母の顔を見ていたら欲が出て、C子に電話をかける。「あなたがゆつくりだと私もゆつくりしていけるんだけど」しかし甘かった。C子は「寄る所ないから早く帰ります」とにべもない。C子さん、あなたが夜中の一時二時に帰っても待つてあげてるじゃないの、と言いたかったけれど、いつもは早く帰れと言っているのだし、私はもともと出てはいけなのだから言えはしない。欲は引っこめて早く帰る。

しかしC子の帰寮は門限ぎりぎりであった。他の連中は全員ほろ酔いで十時半を過ぎた。けれども私も規則を破ったから相殺にして罰はなしにする。

十二月

○日

十二月になったとたん、H子がクリスマス・パーティー、O子が忘年会で遅くなりま
す、と言う。「えっもうクリスマス？」とのけぞったら、「クリスマス・パーティーの相
談のための集まりです」とのこと。O子は正真正銘の忘年会だそうだ。

これから一か月の間に、勤め先の、部内の、同期会の、仲良しグループのと何回も
忘年会やクリスマス・パーティーがあるのだから、十二月の声を聞いてすぐ始めなけれ
ば日が足りないのかも知れない。当分入れ替わり立ち替わり深夜帰りが続くのだろう。
私にはそのチャンスはないが、クリスマスには寮内がケーキであふれ、寮母室にも
いくつか持ちこまれる。甘いものは苦手、と言っても無理やり置いて行く。捨てられ
ないからまたRさんに「助けてよ」と言うことになる。

お酒を飲んで忘れられるはずはないけれど、人間たまには頭の神経をマヒさせた方

がいいのではないだろうか。私のように絶えず正気で物を見て考えているのはしんどいなあと思う。それで正気か、と言われたら、いや、ちょっとは狂の部分もあります。がと言わざるを得ないけれど、それはともかくおいといて、一度気持ちよく酔ってみたい。

しかし私はアルコール分を分解する酵素を持っていない体質とかで、飲めば頭痛がし動悸が激しくなつてひっくり返る、いわば一種の欠陥人間なのであった。甘いものもそうほしくないし、どうなっているのだろう。かなり損をしていることに間違いない。

おまけに宴会に出れば（飲めないくせに宴会は好き）飲めそうな顔をしているのに、と必ず言われる。私も必ず、お酒は顔で飲むのですかとからむのだけれど、できることなら、本当に酔っ払ってからんでみたいものである。

○日

叔母一家が引つ越すので、いらなくなつた衣類を捨てないでねと頼んでおき、引越した翌朝早く取りに行つた。多人数の何十年か分で、山程あつた。

親類の家とはいえ、空き家になつた家の、門の門をはずして入るのは変な氣のする

ものである。おまけに段ボール箱やふくらんだポリ袋を持ち出すのだから尚のこと。車にさつと積んでさつと引きあげた。

これは、東南アジア救援運動のお手伝いで、前にも寮生の古着をもらって送ったことがある。ここ二、三日はRさんと一緒に点検と仕分け作業をした。通りかかった寮生は必ず言う「何をしておられるのですか」私は「古着屋さんを始めたの」でもいなくなっても捨てないでねとまじめに頼んでおく。

○日

ボーナスをもらった。封筒にはクラシックに「賞与」と書いてある。もともとは賞与を与えるということなのね。とにかくうれしくいただいた。

明細書に出勤率百パーセントと書いてあった。それを見て私にも百パーセントでできることがあったのだと感動する。何事も甘く見て七十パーセントどまり、という自分を知っているから思いがけなかったのだ。最近、体は故障しがちで、百パーセント健康とは言えないけれど、だましながらでも勤められるということは、文字通り有難いことである。

しかし考えてみれば、私は小学校以来学校はほとんど休まなかった。熱があっても、

教室でさぼりはしても、ともかく学校へは行く。親も、怠けるのが好きな子にしては不思議がつていた。気がつかなかったけれど、何十年経っても変らないものだなと「出勤率百パーセント」を見直した。今年、今までに休んだのは、規休の十四日である。

○日

最近誰かいたずらを楽しんでいるのがいる。スピーカーのスイッチをひそかに押しておきよるのだ。

誰かが私に用があつて来てしゃべっていると、それが寮全体に聞こえるというしかけ。しゃべっている私達には聞こえないから、他の誰かが「入ってますよ」と言いに来て初めて判る。それで「え？ 今何話してた？ みんなに聞かれてまずいこと言うてへんかった？」と大恐慌をきたさなければならぬ。

電話の呼び出しに使ったあと戻さないのかと、忘れないように言っていたのだけれど、私が戻したのを確認したのにもかかわらず入っていた時もあるのだから、これはもう、誰かが面白がつてやっているのだと思えない。誰かね。ちよつと悪ふざけが過ぎるのじゃない？

○日

庭仕事五回目。今日は外へ出て、石垣のサツキを丸坊主にする。今頃切つて、来年は咲かないかも知れないけれど、再来年は咲くでしよ。

これで溝に落ちた枯れ葉の掃除もし易くなった。こちらのご都合次第で寒そうにしてごめんねサツキさん。

この庭にはクスノキの太木がある。池田市の保存指定樹木となっていて、勝手に切ることはできない。関西電力も電線にかかる枝を切るのに、会社と市役所の許可証を見せに来てからかかり、ものものしい。

庭の草取りがすんだら（あと何回かかるやら、程遠しだけれど）私専用の運動場にしようと思っている。踏んでいれば草も生えにくいだろうし体にも良くて一挙兩得となるかどうか。

○日

夏に九州に帰ったI子が遊びに来て、お土産を置いて帰った。あでな舞い姿の博多人形である。殺風景な部屋が急になまめいた。

はじめ、置く所もないのにどうするのよと言っていたが、ユニット家具をばらし、

場所を作ったら、かえって便利が良くなり（要するに座ったまま物の出し入れができるようになった）一石二鳥であった。

そこへRさんが鉢植えの花を持ちこんだ。前から持つて来ると言うのを、生き物の世話はいや、と断っていたのに、花が终れば持つて帰るから、と強引に置いて行つたのだ。

しかし、人形があり、花が咲いていると、仲間がいるように感じて、一人でいても淋しくないのである。こんなものとは知らなかった。ぎりぎりのところで生きていればこそ、生活必需品以外の物が絶対に必要なのだと痛感した。ちよつぱり「女の部屋」らしくもなつて、私も不思議に優しい気持ちになる。

○日

久しぶりの休日。カラヤン以来だから五十日ぶりである。奈良へ行つた。雲一つなくて、自由と、自然の美しさと、懐かしさと、おいしい空気を満喫する。

改築なつた東大寺は初めてで、大仏様とも久しぶりのご対面。私は年をとつたのに、大仏様は少しも年をおとりにならない。柱にあいた鼻の穴、昔はすいと通つたけれど今はあやしい。のぞくだけにした。

二月堂、春日大社と、神社仏閣を巡るおのぼりさんコース。スリッパばかり履いている足は柔らかくなっていてマメができた。お土産に売っている杖を本気で買いたかった。春日さんでひいたおみくじは凶。まあこれは足だけのことで、あとは大吉に終始する。

一月

○日

二回目のお正月。寮生は全員いなかへ帰ってしまった。わずかながらきちんと挨拶して帰る子あり、いつの間にかいなくなるのあり、うれしさの余りか、連絡票にもノートにも日程を書くのを忘れて行ってしまうのあり、いろいろであつた。

私は昼間出かけてもよいお許しを得たけれど、夜はいなければならぬ。暗くなつてから誰もいない所に帰るのは怖いから、はじめから出ないか、近い所ということになる。

宝塚方面へ初詣という手もあるけれどその気はないし、行きたい所は遠い。それで半日は音楽聴きながら読書、半日は年を越してしまつた寮内の汚れ落としをすることにする。暮に手を切つたため掃除はしていなかったのだ。まあ画一的でないこんなお正月を過ごす人があつてもいいんでないの。掃除はラジオの音楽をあちこち拾い聴き

しながら半日ずつやって三日間を消化。

四日は東京からやって来る友達を大阪で迎える約束のところ、京都まで行って、友達に乗っている電車に乗りこみ車内でわつと驚かす。

なんと子供じみたことをうれしそうにやっていることか。おまけに十七分新幹線に乗って、旅行気分だと喜んでいるのだから可愛らしいものである。

寮生は一人、二人と帰り、九日によく全員が揃った。お風呂は四日から、食事は六日からで、その間私はシャワーを使い、食べ物は何を食べたのかしら、Rさん差し入れの、心尽くしのお節の他は何もこしらえなかった。

みんなが晴れ着を着てお正月を過ごしている時に私も、と無理やり仲間入りするよりは、じつとして時の過ぎるのを待っていた方が、かえって取り残された気分がしなくていいことが判った。異分子ははじめから別の器に入っていればよろしい。

○日

大晦日に怪我をした。朝早く一寮の寮母さんが、庭の南天をちようだいと来て、あらんた力持ちやから、と鋏を押し付けられたのをむつとしなけりゃよかった。ふくれながらやったから、南天と一緒に手も切ってしまったのだ。

もう寮生は帰ってしまつて、炊事はなくなっていいけれど、掃除はまだ残っているが、やめにした。さぼつてもいいですよという神様（私の神様、イエス様ではない）の思し召しと勝手に思うことにする。

しかし左手とはいいいながら普段かなり働いていたのだろう、不自由極まりない。自転車に乗つてもブレーキがかけにくい。かばつていたら腕全体がだるくなる。

けれど良いこともあった。炊事、掃除をしなくなつたらとたんに手がきれいになつた、驚く程である。これが神様のプレゼントか。

でも切つた中指を仲間はずれにしているつもりが、切つてない人差し指が間違つて一人立っていたりするくらいだから、もう全快に近い。

○日

いつもきちんと髪をセットしているY子が、去年の秋からすっきりしない髪型をしている。「いつものようなのがいいのに。それともそんな型がはやっているの」と聞いたら「成人式に着物を着るから伸ばしているんです」という答であつた。

そう言われてみれば、Y子達二年目のグループは、同じような中途半端の髪をしている。D子は「アップに結えるかどうかぎりぎりのところ。もうちょっと早くから伸

ばしたらよかった、私は伸びるのが遅いから」と毛を引っ張っている。

振袖を自分で買って、毎月お金を払っている子もいるけれど、ほとんどは実家で母親が見立てて用意しているのだろう。娘のいない私は羨ましいような、ほっとするような妙な気分である。

写真を撮ったら私に見せてね、とみんなに頼んだ。女らしく変身した彼女達の姿を見るのが楽しみである。

○日

恩師の宮越先生が亡くなられた。朝早くラジオで聴いた「死者のためのミサ曲」がいつもより悲しく心に残っていたのはなぜかと思っていたら知らせが届いた。

全く西洋音楽に縁のない家庭に育った私を、いまだにどっぷりつかりこむほどのクラシック好きにしたのは、女学校の音楽の先生、宮越先生であったと言える。

甘いバリトンで、くせのある髪の毛をオールバックにした先生はみんなの憧れの的であり、戦時色濃くなつて国民服と丸坊主になられた時は泣きたいほどの思いであった。

ある日の歌のテストの時間、二人ずつ歌って最後に一人残ったら、先生は私に一緒

に歌ってあげなさいと言われた。先生としては、はずれては困るけれどもあまり上手でもない方がいいと思われたのだけれど、級友達は先生に指名されるくらい上手、と誤解したらしく、その後クラスから何人かのコーラス部員を選出する時に私を選んだ。また私も厚かましくそれに従ったのだ。しかしその我が校のコーラスは優秀で、BKからラジオ放送をしたこともある。宮越先生の指導は独特で、私達は楽しく歌っていた。

ピアノ弾きは各学年上手な人が何人かずついたのに、私の学年にはなぜかいなくて、音楽会にまたも私が出たりして、今になればよくも恥ずかしげもなくやっていたなどと思う。とにかく授業の他は音楽室と楽器室に入り浸り、歌ったり弾いたりの数年間であった。

一方、住んでいた所で戦後すぐ市民合唱団ができて、私は年齢制限外だったけれども無理やり入れてもらっていた。初代の先生が辞められた後、来て下さったのが宮越先生である。女専では教授であつたし、最近まで市民コーラスのOB会にも出席されて、私と音楽のつながりは、先生とのつながりでもあったのである。

宮越先生の密葬式にRさんで行った。

小さな教会の中、黒い布に覆われ白い十字架のついた棺の中に先生は小さくなつて

横たわっておられた。先生愛唱の賛美歌を私達は泣きながら歌った。その歌も先生に教わったのだった。

牧師さんのお話によれば、先生はいつも厳しく自分を見つめられ、死の床で、自分でも神のもとへ行くことができるのだろうかと思ねられたそうである。

最後にOB会でお会いした時、先生は私達に「昔私がみんなに教えた発声法は間違っていた、すまないことをした、悔やんでいる」と言われた。私達は何と比べて違っているのかもさっぱり判らぬ素人である。楽しく歌っていたのだしどうして今頃そんなことを言われるのだろう、そんなこと後悔されなくてもいいのに、と不可解な気持ちでいたのだけれど、それはその牧師さんの話で氷解した。

私は今まで、神を信じることでさえできれば、犯した罪は許されるのだし、楽なものだ、クリスチャンには申しわけないが、逃げこめる安息の場所があつていくくらいに思っていた。しかし救われる代わり、それに価するか、という重いものがあつたのだ。他の人は知らない、少なくとも先生は完璧を求められ、そういう生き方をしておられたのだ。これはかなりしんどかつたに違いない。これなら、周りに何も存在しなくて、自分自身を中途半端でもなんでも納得ずくで背負っている私の方が、楽な生き方をしている、と言えるのではないだろうか。信仰の道に私が近づかないのではなくて、近

づけないのであった。

宮越先生は最後の機会に、信仰とは何かを私に解らせて下さったのかも知れない。仕事を放り出し先生にお別れしに行つてよかった。また教えられて歸つて来た。

先生は今、苦痛を取り除かれ安らかにいられるだろう。長い間ありがとうございました。

○日

恒例のコーラスOB会に出席した。宮越先生を偲んでアベマリア、アベベルムコルプスを歌う。これは二年前に先生がOB会でタクトを振りたいから楽譜を用意するよう指定された曲である。しかしお体の具合が悪くてそれは実現しなかった。私達は先生の無念さと私達の心残りを吹き飛ばす勢いで歌った。先生に聞こえたのならいいけれど。

歌っている人達もほとんど白髪混じり、あの元気だったRさんも急病で欠席、手術をした人もいてだんだん淋しくなる。

三年目

二月

○日

常務氏とK氏に寝込みを襲われた。二、三日前にK氏から行く予告があつたけれど、明日のはずであつた。今日になつたのなら、なんで言うてくれはらへんの！ K氏は、突然ですみませんと言われたが、ほんとにすまないわ。私は寝起きは悪いのデス。しかしまあ、朝起きて鍵をあけてからまた寝床にもぐりこんだ私が悪かつたのかも知れない。

ところで、用件は一、二寮を合併することである。突然で突然に、であつた。目が覚めた。

会社が地方出身者を減らす方針で、三寮がなくなるのは決まっていた。やがて一寮もここも必要なくなるだろうとは思っていたが、早かつた。

一寮を閉めて、一寮生は二寮に引っ越し。「人数が多くなりますがよろしく」との

ことである。以前、工事の時に預かったことがあるから、人数の多いのは一向に構わないけれど、寮母のHさんはどうするのか。また一緒にやってくれたいと言われるのだったら、私は辞めさせてもらおう。彼女のいびりに耐え切れる自信はない。

先日来、Hさんから「三寮の寮母さんが辞めさせられてかわいそうや」と暗に、三人のうち一番新しい私が辞めるべきやないか、という電話が度々かかっていた。私はそういうこともあるだろうと、三寮のことが決まる前に一応、はみ出すのは私でしようと言っただけだったが、三寮のIさんは十年勤めたから辞めると自分から言われたとのことであった。どうやらHさんは、一寮がなくなるのを予知して、Iさんにかかつて私に揺さぶりをかけてきたらしい。

確かに私は新米なんだし、Hさんと一緒にいやだから「辞めてもいい」とK氏に電話をかけた。K氏は「それは会社が決めること、勤務状態も考慮してHさんには辞めてもらう。何を言われようと気にすることはない」と言われた。

ヤッホー。やったね！（たねにアクセント、寮生の口調を借りるところなる）あの百パーセントが効いたかしら。

石の上に三年、いや二年しか経っていないけれど、会社の上司がそばにいない代わりに、先輩のHさんがいた。彼女は「寮生にいい寮母さんと慕われるのは、実はしつ

もようせん悪い寮母や」と私を責めるのだ。私は寮生を力ずくで押しこめるより自覚を待つ方針である（最近はぐらついてはいるが）。それにHさんに雇われているのではないから、どんなにHさんの機嫌が悪かろうと、自分の考えでやって来た。

その代わり、のいびりはかなりのもので、私はノイローゼにもなった。時には寮生がとばっちりを食い、かわいそうなこともあったが、これでもうそんなことはなくなる。やったね！（と再び）

○日

先日、常務さんが寮内を見て回られた。タイルのはがれを見て「女の子の寮だから、はんなりした色のに替えましょう」と言っておられたが、すぐに業者が見積りに来て、今日は食堂の床が半日で貼り替わった。

旧館の物干しと、枯れ木も取り払われた。これも常務さんの指図らしい。木を倒す時、二人の技師が汗をかいていたので「私は力はありませんが、体重なら貸します」と申し出たが、私の代わりに石をテコにして根はひっくり返された。

その二人が「ついでですから何か他にすることがあったら言ってください」と言ったので「旧館をつぶしてほしいのですが」と言っただけで「それはまた後ほど」とつ

ぶさずに帰ってしまった。

今度、常務さんが来られたら試しに言ってみよう。

○日

夜遅く、ある銀行の寮監さんから電話がかかってきた。私が着任した直後に寮を替わったX子はいるかというのである。私がいらないと言うとそこですかと尋ねられ、なんか変な具合なので詳しく聞いてみると、銀行の寮生がX子の所に行くと言って出て帰って来ないので電話をした、ということであった。外泊先はいつもそちらになっているのですが、と言われるが、ここは原則として友人は泊められないことになっている。何より当のX子とはつくにいないのであるから、でたらめを書いて、他所に泊まっているのだろう。

どことも同じで、この寮生も半分はでたらめの外泊先を書く。男友達の所に入り浸り、そこから会社に通っていることが周知の事実であっても、寮の連絡票には親戚や女友達の名前が書いてある。

いつか、ある寮生の両親から何度も「お婆あちゃんが死にそう」と電話があつて、所在が判らず困ったことがあつた。親に私が責められている雰囲気もあつたが、といっ

て私生活に深くは入りこめないし、頭の痛い問題である。

○日

最近ゴム手袋を愛用している。ゴム手袋はもどかしくてきらいだったけれど、怪我をした時、どうしても使わなければならなかったので使った。でもやはりすぐ脱ぎたくなる。

従妹が手術用の手袋がいいと言うので試してみたら、これはよかった。中に薄い木綿の手袋をして上にゴム手袋をはめるのである。だぶつかないし、感触は素手に近い。料理をする時には使わないが、掃除洗濯には重宝している。手の荒れがうんと違う。買う所は薬局さん。

○日

だらけた寮生にカツを入れるために寮会を開く。こここのところ規則を無視しがち、後始末も悪い。これ以上の辛抱は私の体に良くないのだ。

予め言いたいことをメモしておいたが、約三十項目もあった。こんなつまらんことまで言わんならんのかと、いやいや言っていると声のトーンが落ちてくる。我ながら

“いやなおばさん”の感じだ。言いたくないのよ、ほんとうに。

いろんなことを言ったあとで「私のやっているように、というのは程度が低過ぎるけど、せめて私ほどに、それ以上にやってもらえば文句の言いがいもあるのよ」と、したたかなテキの「えらそうに言っ、おばさんも怠けてる」と反撃に出るかも知れないのを予防したあたり、年の功か。

しかし、あとで寮生の反省の言葉があつて「おばさんの注意された（あの）ことをしていたのは私です。これからはしませんから」とか「たしかに甘えてルーズになっていました。叱られてからキチンとするのでは情けないから、自分で気をつけます」とかいろいろ言ってくれた。いずれそう言ったことも忘れ果てるかも知れないが、しばらくはもつだろう。（甘いかな？　しもた、録音したらよかった）

まあ今夜のところは信用することにして「私はもう残り時間が少ないのだから、怒った顔で過ごしたくないの。ニコニコしていたいから協力してね」と結んでお開きにした。一時間半もかかっていた。

今日から私の寮母生活は三年目に入る。

三月

○日

新入社員へのお祝いと歓迎を兼ねて、今日は全員特別食。去年はRさんに手伝ってもらった。今年は数が少ないし、甘えるのはやめておこう。私から電話はしない、と決めた。向こうからかかってくる分には、この限りにあらず。心の中でRさんに連絡してよと念じる。

私の念力は素晴らしくて、Rさんから電話がかかった。待つてました！私「飛んで火にいるなんてかて知ってる？」Rさんは気の毒に、そんな日と知らず声をかけたばかりに、かり出される羽目となった。

彼女の顔が見えたらキャツキャツと言つて抱きつきたい感じ。憎たらしいこと言わないで、素直に手伝つてと言えばよかった。楽しくやつて三時間で完了。感謝多謝。

Rさんは優しいけれど怖い人でもある。私がくよくよしていると叱る。考え方を変

えるように厳しい顔で言う。私は彼女にあいそをつかさねるのはいやだから、素直に言うことを聞いて立ち直るのである。

しかし彼女が洋服を縫いに来ていたら、私が「こんな縫い方あかん、やり直し」なんて言うもんだから、Rさんは娘のAちゃんに「手を抜いたら武田さんに怒られるんだよ」と言っているらしい。

二人は三十年以上も前のコーラスの仲間で、特別にいろいろと縁が深く、私が池田に来たら、一足先に住んでいて、これはもうべったりとつき合うように、初めから決まっていた気がする。彼女は私を、お嬢さん育ちやから何も知らん、ほっとかれへん、と思い、私はあの人は私のように苦労していなく、世間の垢のついていないマシユマ口のような人、会っていて気持ちがいいのはそのせい、と思っている。

すなわち私達は「美しき誤解」を合っているのかも知れないけれど、不都合はなく、助けたり、助けられたり（の方が多いいけれど）している。このあとまたお世話になるから、会ったことのあるU子の言葉を借りてゴマをすっておこう。「あの優しそうな上品な奥さん、私もあんな奥さんになりたい」。

今年の新生児は一人であった。短大卒だが、母親が寮を下見に荷物と一緒に来て、かなり過保護のように見える。「朝起きられるか、それが一番心配です」と母親。私は「大丈夫ですよ、頼る人がいなくなれば必ず目が覚めます」と言ったが「そうでしょうか」とまだ心配そう。「だめなら私が行ってけりますから」と言ったら目をむいた。「私の可愛い娘をけらんといて」というところか。私はほんとにけりはしないし、寝過ぎて遅刻してもいいではないか。何でも一人で経験すればよいのだから。

毎年、新生児が研修の間は朝食を作っていたが、今年はやめることにした。一人だけだし、大卒だし、どうやら食事の用意もしたことがなさそうだから本人のためにもならない。来た日に「朝食は作らないから、自分の好きなものを調理して食べてください」と言い渡した。「それじゃパンやミルクを買ってこなくちゃ」と母子二人で買い出しに出かけたが、去年の父恋しの娘のように、旬日を待たずに逃げ出さねばよいが。

○日

電話のベルが何回も鳴る。私は夜の電話番号はしないことになっているのに誰も出ない。最近私ばかりだ。我慢くらべだと私が負ける。ブツブツ言いながらも仕方なく出

たらもう一つの方も鳴り出した。それもとって、二人一度に呼び出しをかける。二人がすぐ駆け下りてきたが、私は意地悪をしてやった。二人が「どっちが私？」と聞いたけれど「さあ、どっちでしょうね」と言ってやったのだ。ボーイフレンド達、すみませんねえ、もうちょつと待つてやつてね。

Y子が「かなんなあ」とO子と顔を見合わせている。私はニヤニヤ笑っている。いやその前はプンプンだったのだ。あんなに早く下りて来られるのなら出なさいよ。そのうちおばさんが出てくれるやろというのはなめ過ぎです。

O子が「私こっち聞いてみる」と言って受話器をとったのが当たっていた。逆だったら面白かったのに。知らん顔して反対を示してやったらよかった。意地悪の仕方が足らんかったわ。

○日

最近、食い気色気返上して、専ら縫い氣に浸りこんでいる。人のや自分の、新調更生など数々。

縫い物をしてイカレるところは目や肩と相場が決まっているが、私は膝がイカレる。原因はきちんと座つてするからだ。普段はお行儀よくないくせに、縫い物となる

とどういふわけか、くずしてもまたいつの間にか正座をしている。

痛くなりだしても座り直せる間はまだよいわけで、でもそれができなくなってもまだ縫いたい時は、ヨガのポーズに似た格好（あぐらともいう）でやったり。何もそんなにしてまで、と思わぬでもないけれど、そこがその氣づいている所以である。

しかし、ようやく飽きがきて、今度は読み氣に移りそうな氣配。

運動不足解消に五月山に登ったら、膝は何ともなくて、足の甲が痛くなった。私の体もかなりの天の邪鬼のようだ。

○日

消防署の立ち入り検査があつた。二人の消防士の、誘導灯が点灯しているか、停電しても予備灯がつくか、防火扉がちゃんと閉まるか、その他避難はしご、消火器、火災報知器、出火の場所を示す通電試験など、かなりの数の検査であつた。

進むにしたがつて×印が増える。報知器の位置を示す赤ランプが一つ消えていたのを、私は「それならあります」と、今まで何に使う豆球かと思っていたのを取りに戻り、つけ替えて×印を一つ減らした。

あとから結果表が届くので、それに基づいて不備を改善し、報告書を消防署に出す

ことになった。

防火扉にはアジャスターというものがついていて、これはかしこい。各階の部屋部分を遮断する扉は手でも閉められるが、火事になればその熱でヒューズがとんで、ひとりでに動くようになっていて、扉の形は観音開きで左の上に右がかぶさって隙間ができない構造だけれど、たとえ右が先に動いても、左が閉まるまで途中で待っている装置がついている。左がおさまればすぐ上にかぶさる。ほんとうに、待つてたよ、という感じである。

実は、それがうまく作動しなくて叱られた。いくら、かしこい装置であっても、付け方が悪けりや宝の持ちぐされである。今までの検査はどうなっていたのだろう。

電気部のM氏が来て、彼も知らなくて「ほう、こういうことになってましたんか」と言いながら調整をし、ようやく動くようになった。私はこれが実際に作動することのないのを願いながら、何回もやって遊んだ。そんなに複雑なものではないけれど、よくできている。その都度感心する。

○日

消防署立ち入り検査のあと偶然に、避難はしこの点検に来たので、早速、指摘され

たはしこの取り付け場所の表示板をつけてもらった。そしていつものように、実際に三階から庭へ垂らして降りてみたが、袋の中を降りながら気がついた。

半年毎に、私とその日休みの寮生が訓練をするのだけれど、私ではなく、三階に住む寮生に、取り付けができれば何にもならない。階段を使えない時に、はしごを下ろすことになるのだから、一階にいる私が取り付けに行けるくらいなら、上からも降りて来られるわけである。はしごはいらない。こんなことを今頃になって気がつくなんて。四月から人数が増えることだし、三階の全員に特訓をしなければならぬ。

もう一つ気になることがある。外部から痴漢などが侵入しないように、窓ガラスには金網が入っているし、塀は高く、あちこちに有刺鉄線が張つてある。入れないということは出られないのもあった。防犯をしつかりすればほどに諸刃の剣である。これの解決法は見つからない。

四月

○日

最近の雨は「春雨」「菜種梅雨」と、いい名前をもらって、遠慮なしによく降る。

B子とM子が「明日降るのはわかっているのだけど、一応用意しておくの」、と夜遅くお弁当を作っていた。高校野球を見に行くらしい。色とりどりの、豪華なお弁当であった。

しかし野球はやはり雨のため順延となる。朝一度起きてまた寝たらしい二人は、お昼頃につまらなさそうな顔でお弁当を食べていた。彼女達の休みは順延とはならない。大雨が降っていても、寮生達はいつもの靴を履いて行く。大阪市内に入れば、雨の道を歩くことは少ないが、寮から石橋までは一キロほど吹きつさらしの道を歩かねばならない。瞬く間に濡れるのに、みんなお構いなしだ。気が知れない。

夕方から私はバスタオルで作ったマットを上がり口に敷いておく。そうしないと、

濡れた足跡だらけになるのだから。みんなは帰って来ると「わあ、足ぼとぼと」と大騒ぎをするが、ぼとぼとなるのを承知で、短い靴を履いて出るんじゃないの。

その後がまた大変。靴を乾かすために、靴箱の上にずらりと並べてある。乾いてもそのまま置いてあるのが必ずあって、私は「放ったらかしにしてある靴は捨ててもいいのね」とわめいている。雨が降れば、このパターンが間違いないく繰り返されることになる。

U子が一人だけ長靴を履いて行く。その長靴は赤くて、雨の空によく似合って、私が出歩ける身であれば、きつと真似をして買っているに違いない。

○日

例の過保護の新生児が、まさかと思っていたのに、ほんとうに家に帰ってしまった。一週間経った頃に、彼女は大学の卒業式があるからと二、三日研修を休んだ。再び寮に帰った時、私は「里心がついて、もう寮に帰りたくなかったんじゃない？」と冗談のつもりで言ったら「はい、配属が営業センターに決まれば、家から通えますから帰ります」と言った。私の言葉は渡りに舟、みたいなことになった。

家は兵庫県三木市のあたりである。営業センターは、本社より西寄りではあるが、

直営店にしても、そう変りはない。まあどちらにしろ通えないことはないけれど、寮に入るのは時間のロスをなくすという理由であった。

人事部のA氏から「お騒がせしまして」と電話がかかったので「初めからお母さんがべつたりでしたから」と言うとお父さんが淋しがって呼び戻されたいですよ」と言われた。私は「えへっ、またお父さんですか」と言ってしまった。お父さん、ちよつと女々しくはないですか、娘が結婚した時はどうなさるおつもりですか、また、出戻りの娘になさるのか、まさか、ずっと側に置いときたいというのじゃないでしょうね、と言いたくなる。

同室になったO子は、先輩のルームメイトとしてと思ったのだろう、テレビを買った。しかしそれを二人で観たのはほんの数日である。気もお金も使つて、その相手にさつといなくなられては、たたらを踏むようなものだ。私も何か忌避されたような感じもあつて、気分はよくない。

母親が迎えに来る予定の時間に、私は他の寮生に留守番を頼んで外出した。笑顔を作つてどうぞどうぞとは言えない。それどころか、一言言いそうである。言つたところでばからしいし、顔を見せないことが、せめてもの意思表示だと、失礼でも何でもよい、職場放棄を敢行した。彼女の帰つたのを、ほとんどの寮生はあとで知った。彼

女が寮にいたのは正味九日であった。

○日

先日來何度も、それまできちんと電話をかけて食数を聞いてくれていた給食センターの人が、言ったのにまたかけてきたりして、おかしいなと思っていたら別の人に代わってしまった。二年余りの間にただ一度別の声を聞いただけであった。いつも愛想のよい丁寧な口調のその人を、私は声だけで顔や背格好を想像して、あの人も元氣によく働くなあ、と親しみを感じるようになっていた。

病氣なら早くよくなつて復歸してほしい。いつの間にかその電話が、私の仕事の始まりを告げるベルになつていたようで、もちろん人が代わつてベルは鳴るけれども、何か調子がよくないのである。それと間違いが多い。伝票と品物の数が合っていないかったり、一寮のとこつちやにしたり。これはその人が休んだからではなく、偶然が重なつたのかも知れないが、私は毎日落ち着かない。

数の足りない日が続いて、先方は申しわけありません、氣をつけます、と謝つてはいるが、その後のこちらのやりくりを知っているのかしら。二人分足りない時、一人は私が欠食するとして、あと一人探さなければならぬ。遅番で帰る子はかわいそう

だから、早く帰りそうな子に謝って欠食にしてもらう。五目煮の日も二人分足りなかったけれど、予備の野菜を足して増やし、私以外の欠食はもう探さなかった。しかし、寮費の計算上では、誰かを欠食にしなければ合わなくなる。

給食センターから来る納品伝票も、マイナスの伝票が入り混じってややこしい。あの人が帰ってくれば正常に戻るような気がする。朝、ベルが鳴れば、あの懐かしい声でありますように、と思つて受話器をとる。しかし、今日もまた別の声であつた。

○日

運動不足解消と思つて、お布団の上で柔軟体操をして首をいためた。全くアホな話。外出できないところ、治療のため、という名目で毎日出かける。これも皮肉な話。毎日出歩けるのなら、体操をしないで首をいためることもなかった、ということになるのだから。

病院のリハビリ室に通つて、牽引をしてもらっているが、前に鏡があれば面白いだろう。引つ張る時に、ベルトが顔に食いこんで「ひよつとこ」の顔。戻れば自前の顔で、二十秒毎に「おかめ」と「ひよつとこ」の二面相の繰り返しをやっているのだつた。

斜め向かいでやっているおばあさんと目が合った。おばあさんが笑つた。同じこと

を思っているのだろう。いやそれとも自分のは見えないから、私の顔が面白くて笑ったのかしら。いえいえあなたもかなりのもんですよ。私も笑った。そして一人で思い出し笑いならぬ、想像笑いを続ける。

しかし、病院で楽しんでいてはいけない。来るべきでもない。私に病院は似合わないわ。でも年は、いわゆるトシなんだし、現に、重い物をどうかしてなった、というのならともかく、体操をして故障するのだから、似合わないなどと言うのは思いうがりだろうか。

○日

私鉄スト前夜はてんやわんやである。中止になる可能性があっても、一応きちんと出社できる対策を立てておかねばならない。

会社から迎えの車が来て、石橋、千里中央間をピストン輸送となるが、二便以後は道の状態によるから時間が決められず、みんな一便に乗りたい。しかし、定員八人のため一寮とも相談して、どうしても早く行かなければという八人にしぼる。そこへ寮以外の石橋、池田に住む人から、乗せて、と言って来る。電話機片手に黒板の名前を書いたり消したりかなりややこしい。

ようやく三便までの割り振りを終えて寝るけれど、スト中止になれば、全くの空騒ぎとなり果てる。私鉄がストをかまえるのが年中行事なら、こちらもこれは年中行事である。

○日

寮族大移動。今日は一寮生の引越しの日である。大移動とは言えないほどの七人がやって来るのに、その荷物たるやすさまじい。引越しは不要品処分のチャンスよ、と言つてあつたから、少しは減らしたかと思うけれど、トラックが二台で十往復もした。

新入時は布団袋一つであつた。人が暮らすのに、何もなしでいけるし、品物の種類と数がどれだけ増えてもみんな必要なものという、この不思議さを思いながら私は荷物の山を眺めた。

表札は好きに書く、と言うから紙を渡したが、なるほど好きに書いてある。「早苗ちゃん」はいいとして「ちりりん」「いね・まん」「かずお君」なんのこっちゃ。「いね・まん」はW子。姓名に関連はないので、どうしてと尋ねたら、先輩はいねさんと呼び、同輩はまんちゃんと呼ぶからだ。どうしてそう呼ばれるのかと聞けば、知らんけど、

という答である。

同室の「みなりん」によれば「まん」はウルトラマンのマンであろうとのことであった。了解。古典的に言つて「金太郎」そのもの、強そうである。

そのまんちゃんはじめ、全員動きが大きくて、騒々しいと言えなくもないが、これまでの陰湿気味の二寮生には活が入っていいだろう。私もシーンと静まり返っているよりは、むしろドタバタと音がしている方が好きである。今日から二寮は二十二人の世帯主の住み家となった。

○日

顔合わせ寮会。自己紹介から始まったが、みんな年のことが気になるようである。「もう△歳です」と、やけくそ半分のや「まだ×歳です」と、うれしそうに言うのがある。まあ巷の結婚適齢期というのが△と×の間にあるらしいのだが、どちらも私の子供よりは下、可愛らしいものである。

寮長、副寮長を決めてから、規則の確認をしたり、その他いろいろ言っているうちに、元一寮生が、前はこうだった、と寮母さんを非難する口調で言いだしたので、私は「前のおばさんがよかったとか悪かったというのは一切聞きたくない。私は私のや

り方でやるから。こうした方がいいのでは、というのは聞く」とさえぎった。

それから「寮生みんなが仲良く暮らすのにこしたことはないけれど、考え方が違って当たり前なんだから、辛抱してストレスをためるよりは、けんかをした方がいい」と言っておいた。

はじめは年長者が入ってやりにくいかと思っただけで、二寮生が先輩を迎えて少し気を引き締めたところがあり、かえってよくなった。また私にかなりの重圧をかけた寮母さんがいなくなったのも幸いである。改めて自分の路線を引き直し、初心に戻って、私も再出発だと思っている。

五月をパスして六月

○日

怠けぐせがついた。炊事の他は大幅に手を抜いて、クッションにもたれて本を読むのがお決まりのポーズとなつてしまっている。動くのは、時々整骨に行くのと、図書館に本を交換に走るだけ、寮内見廻りもせず、寮生と積極的に話をしない。

一つだけ目立つことをしたのは草取り。これはどくだみの採集が主目的で、雑草はついでにとれてしまった。どくだみは干して煎じて飲むという魂胆。ところが、雑草を選び分け、洗って少しずつ束にしてみたら、ざっと数えても五百本は確実にあった。

適当な干し場がなくて、今は物置の中にぶら下げてある。頭痛を誘ういやな匂いは抜けて、いい香りがしてきたが、なお頭は悩ませられる。この後の処置やいかに。

○日

最近二回も独り言を人に聞かれてしまった。

回覧板が夕方に回って来たので、お風呂の用意が済んだ夜になってから返しに行つたが、うろ覚えの上、暗くてよく判らない。「理事さんの家はここだと思うけど」と独り言を言ったら「そうですよ」と人の声。ぎよつとして振り向いたら、そこのご主人が立つておられた。

前の晩、寮に入りたそうに鳴いていた子猫を、ママの所にお帰りと旧館の庭に戻した。人間の匂いがついたら親猫の気が悪かろうと、手袋をはめて運んでやったのに、朝、門を開けに行ったらまた鳴いて寄って来た。「あんたまだいるの、ママが見つからへんかったん」と言っていたら、向かいの奥さんが塀の横から現れて「親猫が一匹ずつくわえて何回も運んでいたんですけどねえ」と言われたのでびくりした。家の外から花の手入れをしておられたらしい。改めて朝の挨拶を交わし、猫は子供の数が判るのかどうかという話をした。

結局子猫は私について歩くので旧館の庭まで誘導し、まいて帰った。親猫の計算能力を信じることにする。

夜は窓ガラスの向こう側にへばりついているヤモリをけしかけている。すぐそばに

蛾がとまっているのに、首を反対側にねじったまま動かない。「ほら、こっちでしょ、とろくさいねえもう」カーテンを引いてしまうと、ヤモリの狩獵に差し支えるからずつとあけてある。寝る時に「私は寝るからあんたももう寝なさい」と言つてカーテンを引く。この独り言は誰にも聞かれていないはずである。

○日

夜中、部屋の戸を叩く音で目が覚めた。M子が「Aさんの具合が悪そうだから見てください」と言う。A子は青い顔をして海老のような形で寝ていた。とぎれとぎれに言うのを聞けば「お腹が痛くなったのでトイレに行こうとしたのは覚えていられるけれど、気がついたら廊下で寝ていた」とのこと。そしてお腹はましになって、今は頭が痛いと言う。

倒れた時に頭を打ったのかも知れない。調べたら側頭部にこぶができていた。とりあえず冷水で冷やした。吐き気がしたら救急車を呼ぼうと、すぐ出られる準備をする。しかし、痛みは和らぎ、顔色もよくなってきたのでほっとした。念のためもう少し見守り、眠れるというので私も眠ることにする。空が白くなりかけていた。

翌日は日曜日なので安静に過ごし、月曜日にレントゲン写真と脳波をとったが異常

なしとのことで、ようやく安心することができた。しかしどんな倒れ方をしたのだろう、足にもひどい内出血があった。

○日

徳永さんの、ご自称「ヒッピー旅行」に同行させていただいた。はじめは、三田市永沢寺のあやめを賞でる予定だったが、私が夜中まで外出していたと言ったからか、急に湯村温泉行きとなった。

しかし私は湯村温泉がどのへんにあるのか、テレビも映画も観ないから夢千代の温泉町ということも知らなかった。三田のちよつと奥の方かと思いつながら地図を見たが、天眼鏡の枠の中に湯村の字はなかなか入って来ない。ようやく見つけた時には、鳥取と日本海も一緒におさまっていた。

「エーッ ウッソー ホントー」という思いである。大まかに計っても百五十キロあるではないか。徳永さんに、酔う人かと聞かれた時、酔わないと答えたけれど、全く自信がなくなつた。でもそんなこと言つて連れてもらわれないと困るから黙つていることにする。酔わない、と暗示をかけよう。

徳永氏に「あんなに遠い所だとは知りませんでした、もう鳥取に近いですね」と言つ

たら「鳥取に出て砂丘に寄りましょか」といともあつさり言つてのけられた。お二人は普段「悠揚迫らざる」という感じだけれど、車に乗れば急変し、どこまでも突つ走ろうという、もはや上体が前に傾いているふうに見える。足腰のしっかりしたランドクルーザーがびつたりで、そこらへんのやわなドライバーとはえらい違い。

助手席の特等席に座り、お二人のいつもの横一フオーメーションを崩して申しわけないけれど、ご好意に甘えさせてもらった。

全行程のいろんなことは簡単には書けない。人の心の優しさと温泉につかり、海山の景色、花や鳥、螢の飛び交うのを見るおまけもついて、私の感想は、宝の山にもぐりこんでいた、というのに尽きる。そしてあれがたった一日の出来事だったのかと不思議な気がする。車に酔っている暇もあらばこそ、疲れはなくて体調はかえつてよくなった。私が運ばれた距離は四百三十キロであつた。明日から怠けずに働く。

七月

○日

雨が降り続くにつれて調理場は無惨な有様となった。湿気に加えて温度差による結露でタイル部分は濡れている。床にも水が溜まり、木のつかかけが滑る。配膳棚は毎日拭くのに、一日経てばまたカビが生えている。棚板に古い汚れが染みこんでいるのだろう。溝も匂っている。もし保健所の抜き打ち検査でもあれば、叱られること請け合い。もっとも「秀」の認証のあるレストランでゴキブリが走っていることがあるけれど。

しかし、よそのことを持ち出してもここがきれいになるわけではない。初めの頃は、週に一回は大掃除をやっていたが、最近は体調のよい時にしかない。ということとは長いことやっていないわけで、今日はどうしてもやらなければならない。目に付くカビが生えてくれたおかげで決心はつきやすいともいえる。

どうせ濡れているのだから、と壁や床をブラシでこすり、ホースで水をかけ、流す。調理台を囲んでコの字にある溝の上の蓋は鉄製で、腰を入れて気合いを入れないと持ち上げられない。これが六枚ある。重い蓋を開けるから、腰さんしっかりしてちょうだい。

はね返りの水に濡れながら、でもたいそうな決心の割には短時間の内に、カビもサビもホコリもヘドロもみんな水に流れた。私も汗と汚れをシャワーで流した。外もまだ雨が降っている。

○日

旧館をつぶして社宅を建てる。二軒作る、とK氏が言われた。これはよい知らせ。とにかくあのお化け屋敷がなくなるのなら言うことはない。入りこむ恐ろしい不良どもの戦いに疲れ果てたことがあった。消防署も防災上ない方がいいと言っていた。しかし待てよ。これまでのいろんなことから、たしかにつぶれたのを見るまでは喜んではいけないのだ。今までにこの旧館は何度取り壊されたはずか。でもまだ建っている。

疑っているうちに何回も業者がやって来て、計測や見積りをすると言うから、私は

どうぞどうぞと迎えた。お菓子でも出したい気分であった。

ある朝、一人の男が、黙って門の扉を開けて入り、玄関を入り、靴を脱いで上がり、私の部屋を開けて入って来た。私が出ると「ペンキ屋です」と言う。旧館の外側を見たいからウロウロさせてもらいたいとのこと。私は男がここまで入って来たことに腹が立ち「チャイムを鳴らしてください」と言った。男は「用がある時ですか、ウロウロするだけだから用はありません」とけろつとしている。私は「そうではなくて、来られた時に門の外でチャイムを鳴らしてくださいと言ってるんです」と言ったが、わかったのかどうか「すみません」と旧館の方へ行ってしまった。

私はK氏に電話をして状況を説明し、あんな調子で仕事に来られたのでは困る、と文句を言った。K氏がどこの誰かと聞かれたので、〇〇工務店のペンキ屋と答えて切ったが、何で今頃ペンキ屋が来るのか、旧館を見なければならぬのか、おかしい話である。もしかして、ときよつとした。

どうやら旧館は、私には朽ち果てていると見えるが、取り壊さずにペンキでぼろを隠し、そのまま何かに使おうというつもりらしい。社宅が二軒建つのは、やはり幻であった。そうしたらあのペンキ屋にますます腹が立つてきた。よその家に黙って入りこんで座敷の襖を開けるようなものではないか。ウロウロする？ 言葉の使い方を知

らんのか。とにかく私はブルドーザーの来るのを待っているのだから、ペンキ屋なんかウロウロせんといってもらいたい。

○日

T子とは外泊が多い上に、いるはずの当番の日にもまた急に帰らなかつたりするので、三階の連中は怒っている。文句を言いたいんだけど大先輩なので言いにくいというものもあるようだ。帰って来たら私から注意すると言ったら、寮長のO子が思いつめたような顔をして「私が言います。もしそれでだめだったら、おばさんにお願います」と言う。私にはそんなにむづかしいことではないと思われるけれど、O子達にとつては大決心がいることらしい。まあ、共同生活の中で無関心に過ごすより、何か事があれば自分達で考えるのもよいだろう。ついでに門限に関して罰則を厳しくすると言っていた。どういうことになるか、私は楽しみにしている。

○日

コロツケの日は人数が多いから食数を給食センターに言う時、冷凍にしてとつけ加える。言わなければ原材料が届くことになる。以前一寮の寮母さんが「必ず言いなさ

いよ、平等でないと寮生から文句が出るからね」と言い、言うたかと念押しまでしたけれど、私は時々逆らって四十個でも作っていた。いつからこうなってしまったのだろう。彼女がいなくなったというのに、自分から冷凍にしようと言っているのだ。いつか寮生にどちらがいいかと聞いた時に「どう違うのか判らへん」という答が返ってがっかりして以来か。とにかく手間は省けるから半製品を歓迎している。落ちぶれたものだ。

今日はRさんとクリームカニコロツケを作った。普段の手抜きは挽回にはならないが、久しぶりの感触に嬉々としてやっていた。しかし次のコロツケの日はどうしようかとやっぱり考えている。

八月

○日

〇子が帰郷予定の三日前の夜遅く、おばあちゃん危篤の知らせが届いた。しかし〇子は「明日どうしてもしなければならぬ仕事があるからそれを済ませてから。飛行機がなければ電車で帰る」と言う。実家は愛媛県大洲市。

彼女の仕事熱心なのはいいけれど、おばあちゃんに会っておかないと悔いが残るのではないだろうか。みんなで明日帰るべきだと説得する。〇子もようやくその気になり上司に連絡をとろうとするが、これまた奥さんが帰郷中とてご帰館には至らず。「夜遊びならいいけど外泊やつたらどうする？」などとさざめいているうちお帰りになつて電話がつながった。〇子はやらなければならなかった仕事について「わかります？」と上司に向かって失礼なことを言っている。上司は「君より古いのだ」と言ったらしい。

それからいかにして早く帰るかの相談をする。とにかくまず空港に行つてキャンセ

ル待ちに一番乗りをする、二日後の切符があるのだから優先的に替えてもらう、カウ
ンターで「おばあちゃんに会いたい」と言つて泣く、それらがだめな時はすぐ新大
阪へ向かう、そのためには荷物は送り身軽で行く、などなど。O子はみんなの手助け
や励ましを受けて、夜明け前に出発した。

空港は二キロ南にあるが、普段は騒音は気にならない。しかしその日ははつきりと
爆音が聞こえて、その度にどうしたか、と気になる。飛行機がだめなら、新幹線、船、
在来線と乗り継いで行かねばならない。みんなも「乗れたでしょうかねえ」と言つて
いたが、九時頃O子から、松山に着いた、と連絡があつた。一番機に乗れたらしい。
しかし九十二歳のおばあちゃんはもう既に旅立たれたとのことであつた。

○日

みんな黒ン坊になりたがり、泳ぎに行けない子は屋上で焼いている。W子は泳ぎは
苦手で何年かぶりだと言いながらプールに出かけたが、すぐに真っ赤になつて帰つて
来た。私は見るなり言つた「そんな焼き方をしてエ、泣かんならんよ」。あくる日、
W子は目が小さくなるほどに顔が腫れ、口も動かせず、頭も痛いと言う。私は「もう
れっきとした火傷だからお医者さんに行きなさい」とすすめた。お医者「今日は何

人目だ、無茶をするのが多くて困るな」と言われたそうだ。

W子は塗り薬と飲み薬をもらい一日寝ていたが、二日後に、お風呂に入ったらつるんとむけた、ときれいな顔を見せて私を驚かせた。若いからか、焼き加減がよかったのか全く奇跡に近い。三日前のあの無惨な顔はどこにもなくて、今泣いたカラスがもう笑ったように、W子は各部屋をのぞき「見て見て」と言つてまわった。

今は色素が定着していい色をしている。会社では「日焼けで欠勤したWさん」と評判だそうである。

○日

門限に関する寮会が開かれた。これは寮長達の発案である。すぐ、いつも遅くなるK子が「門限を十時半にしてください」と言う。門限は一応十時だけれど、電話をすれば十時半までは罰もないのだから同じことという理由である。私は「はじめにお嬢さんの帰る時間として十時までが適当というのがあるのだから、門限の時間を変えることはできない、変えるのなら罰の方でしょ」とK子の提案を退けた。

罰則を決めるのは寮生達だが、H子の「罰があれば、罰を受けさえすればいいのだ、という気がおきるから、罰はなしにして、必ず十時に帰ることにすればいい」という、

原点に帰る理想的な意見が出たりして、行きつ戻りつかなり紛糾する。

結局、十時を過ぎて十時半まではペナルティ1、その後十一時までは2とし、4コたまればトイレ掃除一回、十一時を過ぎたら即トイレ掃除二回と決まった。

門限破りの罰則のうち、十一時を過ぎた罰は、以前はお風呂洗いであつた。しかし遅く帰った子にやらせたら、決まって手抜きである。注意すれば「しました」とうそをつく。私は二年以上もやっているのだから、どうなっておれば手抜きかよくわかっている。ごまかしは通らない。

C子はその一人で、手抜きでは罰にならないし、私はその度に文句を言うのは不愉快だからトイレ掃除へ追いやった。そうしたら他の寮生から文句が出た。「Cさんはトイレを洗わない、ゴミの袋を替えるだけ」と言うのだ。そこまで怠けるとは。また「真面目にやりなさいよ」と言わなければならぬ。T子、D子も同じく手抜きは得意だ。その前に門限破りの常連である。

つまりは、門限を破るのは一つの現象であつて、他の事にもルーズで、根本的に人間の出来が悪い、ということだ。年齢には関係がない。

手を抜いて生きてどうなるのだろう。しかし、真面目な人が幸せかというと、そう

とも限らないみたいだし、そのところ、私にはよく判らない。

○日

ペルセウス座流星群が肉眼で見えるというので、昼寝をして夜に備える。この夜に限ってあいにくの空ではあったけれど、私は座椅子とクツシヨンを持つて屋上に上がった。天頂は晴れてカシオペア座が見えた。街の灯を視野からはずせば私もおのびたらしい数の星の中の一つになったような気がする。久しくこんなに星を眺めたことはなかった。目的は達せられなくても、この美しい時があれば満足しようと思つていたら、大きな星が続けて三つ流れた。誰が流れ星の消えないうちに願い事をすれば叶えられると言つたのだろう。そんな暇はなかった。私が、アと言つているうちに星は流れて消えた。

九月

○日

連休のため寮生が半減したので気分は随分楽になる。食数が減ることもあるけれど、それよりも寮生一人一人の帰る時間、食事の有無などが、完全に把握できる安心感である。時間に流されて一日が終るのではなくて、こちらが時間を支配する余裕が生まれた。

やはり二十二入全部の行動を知ることがむづかしい。毎日部屋をのぞかない限り全員に会うことはなくて、時々「久しぶりに会うような気がするけど元気？」などと言っている。

寮生達は、帰った時に門が開いていて、食事ができて、お風呂に入ることができた。それでいいのかも知れない。そして干渉もされたくないだろう。私はそんな彼女達の気持ちは諒解しているけれど、それは別にしてそうドライにはなり切れない。いつ

も頭の片隅に引つかかっていたことが、人数が減ったら解決することが判った。やはりここでも許容量というものは存在する。その前に、私の能力の問題か。

○日

連休の一日、千里中央まで出かけた。以前十年余り住んでいた所だけれど、ビルが増え、様子もかなり変っていた。電車とバスを乗り継いだせいもあって、エトランゼ！という気分である。こんな近くでこんな気になれるのは、普段閉じこめられているおかげともいえる。それに今日は、結婚のため退寮する子への、寮からの贈り物を買うという、いわば公用であるから気も大きい。

お目当ての店で物色したが決めかねて、幸い、寮長のO子の勤務する店が近くにあるので呼び出した。O子は制服姿でやって来た。寮にいたのは違う感じで頼りがいありそう。

公用を済ませてあとしばらく私用に時間をいただく。陶磁器を見て秋物の布地を買い、本も買ってコーヒーを飲んで帰る。三時間ほどであつたけれど、余韻と、布を触っている時間を加えたら、長い間楽しめる外出となつた。

○日

今日は庭師。涼しい風が吹くので、庭木の刈りこみ、草取りをする。雑草の方は、以前に除草剤をまいたので大したことはない。しかし、やぶからしには効かなくて、枯れ木が生き返ったかに見えるのはそれが覆っているからであった。

やぶからしの伸び方は気味が悪い。急速に触手を伸ばし迫って来て、捕まって食われそうな気がする。そう思いながらここまでではびこらせてしまったのは、体が言うことをきかなかったからだ。健康診断の結果も悪く再検査となった。しかし「いよいよ私もあかんのか」と思いながら受けに行ったら異常はなくて、とたんに庭の手入れなどしようという気になるのだから現金なものである。

それで、いざにつくきやぶからしを一網打尽に、と取りついたら、蝶の餌場になっている所があつて氣勢をそがれる。蝶は好きだから幼虫も殺せない。幼虫が蝶になるまで、やぶからしの一部は延命となった。

高い塀に囲まれた庭の中にいたら、昔読んだ『秘密の花園』（バーネット作）を思い出した。母親が亡くなつたために閉ざされた花園を老庭師が密かに育てていて、それを見つけた少年が寝たきりの子を案内し、自然に触れて回復するが、すっかり元気になるまで病人のふりをして、突然に父親を驚かせるというお話である。私が花園を

こしらえたところで、単なる秘密のというだけでドラマチックにはなり得ないのだけれど、それを読んで感動した時を思い出し、和やかな気分になった。

○日

どうやら各部屋にダニ、南京虫がいるらしい。南京虫はまさかと思っていた。かみ口が二つ並んでいるから、寮生達と「夫婦でかむのやろか」「お友達じゃない」と言っていたのだけれど、調べたらやはり南京虫の特徴であった。

毎年、ゴキブリとその他の虫に対して二回薬剤をまきに來て、その度に「片付けて、布団を出して」とめんどくさかったが、今年はゴキブリしか來なかった。ゴキブリはいないのだし、他の虫用のもの、形式的なもののような気がしていた。しかし、こうなると來なかったからてきめんといえるわけである。遅まきながら來てもらうように頼んだ。私はそうと判れば待てなくて、畳を上げて干し、殺虫剤をまいた。押し入れの中も乾かした。

それにしても、ダニばかりでなく蚊にしても律儀過ぎるではないか。私には彼らの子孫を養うほどの血液なら、無条件で提供してやってもよい気はあるのに、彼（彼女？）らは忘れずに日もちのするおみやげを置いて行く。あの律儀さはいただけない。

十月

○日

ようやく涼しくなり扇風機を片付けたところなのに、もうこたつがほしくなる。日も短くなってあわただしい。思えば去年の夏は日の長いのを幸い、時々夕方、ボイラーに火を入れるまでの間に自転車で一走り、Rさんの家を急襲、驚かしてはトンボ帰りをしていた。ジョギング代わりと息抜きに絶好であった。今年も日が長くなったらしようと楽しみにしていたはずなのに、その気の起こらぬうちに過ぎてしまった。

寮母日記を書くのはひと月のけじめとなるし、生活の記録が残り、怠け者の私にとってはよいことである。しかしここ数日、夕食の下ごしらえをしておいて、さあ書きましょう、と文章を考えていたら眠くなり、目が覚めたら仕事が続いて書く時間がない、というのが続いた。

頭よ、変な条件反射を起こさないでよ。でも昼寝をしたら夜もよく眠れて、夏バテの残りが解消、体の調子がよくなってきた。これも寮母日記のおかげといえる。書く場所を与えられる、報酬付きの仕事がある、のはかつて「ものを言わずにただ働いていたらええんや」と便利道具扱いされていたから、よけい身にしみて有難く感じられるのだ。

私に与えられた仕事があるということを、なぜかボーラーに火を入れる時に強く思い、機械室の壁でヤモリが蛾を追ってるのを見て「あなたの仕事はそれ、私の仕事はこれ」と感動したことがある。なんでそこで感動か、なんでヤモリなのか、と今考えるところだけれど、今日も夕焼けの残る広い空の下で、仕事に感謝し、また小っちゃな幸せでも満足している自分をいーいと思ひながら、ボーラーに火を入れた。

○日

玄関の二枚の開き戸とその両横の部分に、以前は素通しのガラスが入っていた。中庭を隔ててある門は鉄柵であるから、道から中が丸見え、玄関ホールにある三台の電話を使う寮生が床に座りこんでいるのも、夜はよけいにはつきりと見えた。そのせいか男達が外であやしげなる行為に及んだりして、私の頭痛の種であった。

K氏に、ステンドグラス様のステッカーを貼るか、紙を貼りたいと言ったら、ガラスを替えましようと言われ、模様入りのすりガラスに替えてもらえた。

仕切りがはつきりしたら、不思議にホールが広く感じられ、もちろん、外から見えないから落ち着き、寮生も安心して？お行儀悪くしてられる。

もう一つ不思議なのは、ガラスが替わってから、外の音が聞こえにくくなったことである。ゴミ収集も、郵便屋も知らぬままに行ってしまう。

これは心理的なものか、ガラスの模様で音波が屈折して弱まり、私の耳に届かなくなったのか（耳はまだよく聞こえる）音響学の専門家に聞きたいと思っている。

○日

三回目の栗ご飯。例によって寮生に、栗むきを手伝って、と書いて食堂に置いた。終る頃に見に行ったら、Y子とO子が「残ってるの全部むきます」と私の分までやってくれた。

むきながら二人の話。Y子「公立大学が二校受けられたなら、私は絶対、大学に行っていたわ」O子「大学に行くより、こんな栗むきが上手になる方がええよ。大学に行ったら人と話しても、私らとちつとも変らへん」。

私は〇子の意見に、全面的に賛成とは言えないが、この寮に來た大学卒業生に限ってでは、四年間も大学で何をしてきたのか、と思わざるを得ない。人間的成長が認められなくて、年とった分、横着である。

今年の受験生も、朝食は自分で用意するように言ったのにしてなくて、私がトーストとコーヒーをサービスしたが、お皿、カップをそのまま返して來た。水洗いくらいしたらどうやるか。私が試験官なら落とす。一事が万事という気がするから。しかし強力なコネがあるのか、入社し、入寮する口ぶりであった。でももう、しつけをし直そうというファイトもわいてこない。

M子が「私、今年は上手にむけました。段々上手になります」と笑っていた。最初の年は、あまりの危なっかしさに「やめて」と言ったのだった。

むかれた栗は、渋皮の残っているのもあったけれど、私はむき直しはやめて、みんなのやり方を尊重してそのまま炊いた。

○日

私の部屋が、にわかには華やかになった。何もなかった部屋に、去年退寮したI子が博多人形を置いてくれたけれど、それ以上自分からは積極的に飾る気はなかった。

しかし最近、ヨーロッパの有名窯のコーヒーカップを手に入れたら、台所の戸棚にしまふ気にはなれなくて、コーヒーをいれてそれで飲んだ後、置物代わりに部屋に置き、他のものと一緒に並べた。花もいるなあと鉢植えも置いたら、たちまち様子が変わってしまった。

気に入ったものを、使わない時にも見ているのはいいものである。心の中も華やかになる。

母が食器に贅沢をする人で、昔からいつも食卓の上だけが、暮らしにそぐわない豪華なものであった。後で聞けば祖母の実家が瀬戸の窯元であったとのことで、母は小さい時に植え付けられたものが抜けなかったのだろう。私も知らないうちに陶磁器が好きになり、中でも高温で焼かれた、ピンとした磁器の肌にひかれる。描かれた絵は、見知らぬ国の絵付師の、息をつめながらの筆運びが感じられて、会って苦勞をねぎらいたいような気にもなる。私はそれを布に写し、刺繍でなぞって、お揃いのナプキンを作ることをもくろんでいる。

十一月

この前、寮母日記が書いて有難い、と言ったばかりなのに、書けない。寮生のことを書こうと思ったら、出てくるのは文句ばかり。それを書けばよいのだろうけれど、何とも気分が悪くて、つい視線をはずした所で物を言うことになる。一度、文句特集をして、えげつなくののしってやるのもええなあ、とは思っているけれど。

宮沢賢治にもっと近寄りたくなり、花巻まで行くことにした。二日続きの休みをとるために、四十日間休みなしである。働きづめだった賢治のことを思えば楽なものであるが、神経は疲れる。ひたすら、後にやって来る快樂(?)を思い浮かべることで慰めごまかしている。

思えば賢治とのつき合いは四十年以上になる。戦時中の夏休み、兄と二人で石川県の父の実家へ行った時に、兄の持っていた沢山の本の中に「雨ニモマケズ」の本があった。田舎での、祖母について行って手伝った畑仕事や、従兄に教えてもらった魚とり

や、稲こき見学などの体験は面白かった上に、賢治の生活も実感として理解できたのだろう。「雨ニモマケズ」はいつの間にか私の物になった。

その後、賢治の死後二十年に、私は新聞社にいたので、命日に賢治のことを書いて中学生新聞に載せてもらった。あれが原稿料をもらった最初であった。それからしばらくして、花巻を旅した友人から賢治の歌の軸をもらったが、銘もないし、どういふものかよく判らないままに持っていた。ところが最近、賢治が死ぬ前の日に詠んだ辞世の短歌二首のうちの一首、つまり絶筆となったものの複製と判った。賢治にも、下さった人にも、知らなくてごめんなさい、という思いである。これで私は賢治が好きで、よく読んでいるとは言えない。軸を吊り、その前に花を置いた。

花巻は大阪から一〇五六・四キロ東北の地。寒いだろうし、賢治に敬意を表してコートを新調することにした。といっても、持ち合わせの布を使い、自分で縫うのである。

しかし、やりかけた矢先に歯の具合が悪くなって頓挫。ちゃんとかぶさっている歯が気持ち悪く、舌に触るものがあるので診てもらったら、奇形歯で、普通の内側に引っ付いている小さな歯があつて、歯茎が痩せたために出てきたのだろう、ということであつた。

邪魔になるし、動いているので取ることになったが、普段、風邪薬でも何でも半分

で効く私が、麻酔が効かず二回も打って、取るのにも時間がかかり、薬が切れたら痛くて弱ってしまった。

歯医者とも四十年のつき合いで、小さい頃から、歯が折れたり欠けたり。先天的に弱いらしく、近い将来、総入れ歯になるのは必至。四つ違いの姉は今でもきれいに揃っている。姪が小学生の時、親子で歯のコンクールに入賞したという、姉妹でこの両極端はどういうことか。

とにかく、宮沢賢治と、歯と、縫いかけのコートのごちゃまぜの中で日が経っている。

十二月

花巻から帰って、もう三週間が経つというのに、私はまだ浸りこんでいる。一週間は酔ったまま「おばさん業」も上の空、旅行支度を解きもせず。ようやく、もらってきたパンフレット類を出して鞆と頭の中を整理、フィルムの現像、焼き付け、引き伸ばしをしてアルバムを作り、メモを文章に直してワープロで打っていたら三週間が経っていた。それでもまだ思い出すこともあり、全部終っていない。花巻から送ってもらった林檎をかじりながら、宮沢賢治の童話を読み返したり、高村光太郎のも改めて読んだ。

「おばさん」の合間々々に、心は花巻に戻って私は忙しい。多分、この余韻はまだ続く。

一月

○日

よそでも、寮生の中にも年末年始九連休の人があったけれど、私は無休である。寮生は一斉に休みになるのではなく、勤務地によって違い、三十一日まで働いて一日の朝に帰郷する子もいる。そして早くに帰った子は、もう二日には戻って来るので寮を空けることはできない。

でもその中で三十日は食事もお風呂もなしで、残っている四、五人の寮生はみんな遅く帰るので私は夕方から抜け出して「第九」を聴きに行った。

これが私のお正月。でも外へ出つけない私は、十二月の末は寒いもの、とコートを着て行ったら、大阪は汗をかくほどの暖かさで、みんなジャケット姿。山猿がたまに都会に出るとこんなもんだ。

暦通りのお正月は掃除に費やし、誰もいない夜もなんとはなしに過ぎてしまった。

去年、おとしは、まるでやまあらしのように体を硬くし、体中の神経を立てて時の過ぎるのを待っていたのだが、今年は慣れもあるけれど、どうやら感情が沈滞しているらしい。年末の「第九」もそんなに感激せず、終った後友人達とお茶を飲んでしゃべってもつまらなくて早めに帰ったし、人の体は時として、嬉しさも淋しさも体の中まで浸透しない状態があるのかも知れない。

でもやっぱり、プラスもマイナスもある、振幅の大きい方が、生きている実感があってよいような気がする。

○日

最近欠食者が少ない。食べる人数は普段の五割増しで、その分調理の時間は長引く。寮生はお正月にお金を使い果たしたか、毎月の給料日前の状態と似ている。もっとも給料が入った直後でも、メニューによつてはほぼ全員食えることがあるけれど。

若い娘達の好きなものは、第一に卵を使ったものなら何でも。それから、炊きこみご飯、お寿司、鰻丼などのご飯もの。次は、コロツケ、ハンバーグ、カツレツ類。魚もフライ、ムニエルであれば食数は多い。煮物となると半減する。煮物そのものが手間がかからないし、少なくなるのだから私は楽だ。

だから、私の方から言う「手間のかかるものが好きなんやね」ということになる。だし巻きの時など、卵を四十個も割れば、もうボウルの中をのぞいただけで「！」ものである。それを巻き焼くのに、私は雑念を払い、ただひたすら「油をひいて、といった卵を入れ、巻く」を繰り返す。これはもう行のようなもので、しかしその後には満足感や壮快感があるから、ひよつとしてお料理も宗教の世界に入るのではないか、などと思ったりする。

ただし一つだけ例外があつて、オムレッツを焼く時は鼻歌まじりでやっている。フレンチオムレッツだけれど、これは百個でも焼けそう。多分、どうやっても出来損ないにはならないからだろう。

失業したら、オムレッツ屋を開こう。

○日

寮生の朝寝坊続出。

C子がダダッと走り下りて来て「遅刻、遅刻、タクシーあるかなあ」と騒がしく出て行ったあと、M子から「Yさんが来ませんが出ましたか」と電話がかかった。M子とY子は同じ店で、早番と遅番になっていた。メモ板を見たらY子は外出になっていた。

ない。部屋に行くとY子は熟睡中。揺り起こして「今日は休みじゃないのでしょ」と言うと「出勤します。遅番です」とゆうゆうとしている。「遅番でももう着いている時間よ」と言ったらガバとはね起きて「うわーどないしょ、ごめん」ごめんと私に言われてもどうしようもない。「はよ行きなさい」Y子は支度もそこそにとんで行った。

次はW子。この時は私が会社へことづける伝票が残っていたのですぐわかった。部屋に行つて「Wさん、ご出勤のお時間が過ぎているようですがご病気ですか」と言つてやったら、目覚まし時計をつかみ目に近づけて「おばさん、これほんと？ この時間ほんと？ 病氣と違います。行きます。え、なんで？」とろろろしている。しかし出かける時はお化粧はしっかりしてあり、落ち着いたものであつた。あんまり急いで信号無視などしなけりゃよいがと心配だし、お化粧なんか放つといふ急いだらどうやろか、と思う。

お正月、ゴールデンウィーク、お盆などの長い休みの後は、体調を崩す子が多かった。今度は珍しくないなあと思つていたら、こんな形で表われた。普段でも夜遅くまで騒いでいて朝よく起きられる、と七時間は眠りたい私は感心していたが、時には若さも睡魔には勝てないらしい。

○日

かねてより私の念願であつた、お化け屋敷のような旧館を取り壊すことは果たされず、そのまま中を改造して何軒かの社宅にすることになった。人が住むのだから、無断侵入や火災の心配はなくなつて、私の気は楽になるし、草取りや落葉掃きから解放されるけれど、私の運動場の夢も一緒に消えた。

しかし、築後五十五年経つていて、壊すしかないと思えた旧館が、日に日に新築のように変形するのにはびっくりする。当たり前のことだろうけれど、やり方はあるものだ、と毎日眺めている。一寮は既に三軒の社宅となり、引越しの挨拶に來られた。今年が最後だから、旧館の庭に水仙が咲いたら、全部切つて来ようと思つている。来年からは、その水仙も、社宅の人の目を楽しませることだろう。

四年目

二月

○日

ここ二、三か月、門限を守る寮生には、トイレ掃除が回って来ない。

寮則の中の、仕事以外で十一時を過ぎるとトイレ掃除二回という罰則に引っかかるのが、十二月初めからの忘年会、クリスマス・パーティで続出したからだ。一人で何回も、という猛者がいる。そしてその罰を終えるのさえ順番待ちのところへ、スキーに出かけ、大抵帰る時間がずれるから、また志願者(?)が増えるのだ。

飲んだ組は、酒の勢いで気が大きくなって「トイレ掃除くらい、やればいいのでしょ」とゆうゆうと遅れ、さめたら後悔しているらしい。でもこれは文句は言えない。スキー組は、車が渋滞や雪のために動かないのが原因であると甘受できないらしい。「まけていただけませんか」とやって来る。帰りたくても不可抗力なのだからと強調してねばる。

私もかわいそうな気はするが、情にほだされてまけていたら切りがないから「みんなで決めた規則なのだから、寮会を開いてみんなと相談すれば？」と逃げたり「どうせ順番が回って来るのだから、罰だと思わずに当番と思えばいいでしょ」となだめたりしている。

A子が「終りました」と言いに来て、ぼやいた。「当番でやっている時は、みんな何も言わないで通り過ぎるのに、罰でやっている」とウヒヒご苦労さまでーす」と大声で言うんですよ」私は「悔しかったら早く帰りなさいよ。でも笑った人もいずれやることになるだろうから、お返しのチャンスはあるわ」と言ったが、これはよいことを聞いた、これからは私も行って、わざとらしく「ご苦労さまでーす」と言うてやろう。

しかし、それで門限破りが減るかどうか。

○日

寮生にボーイフレンドができると、聞かなくてもすぐに判る。なぜなら、物忘れがひどくて（それとも聞こえないのか）何か頼んでも一向に行動せず、後片付けも放ったらかし、表情も虚ろとなるからである。

恋をすれば、生き生きとして頭のめぐりもよくなるかと思うのに、反対で、その症状はみんなに共通する。

N子なんか食事中に電話がかかり、長電話の後、そのまま部屋に帰ってしまった。テーブルに食べ主の現れないお皿がいつまでも残っていた。H子は部屋の電気をつけたまま、スリッパも脱いだまま外出したので、ちよつとそこまで買い物にでも行つたのだろうと思つていたら、ちゃんと会社に出ていた。Y子にも私は言った。「心ここにあらずね、どこにあるの」

頭に許容量があつて、男のことで一杯になると、他のことは押し出されてしまうのだろうか。私の経験(??)では、余裕ができて物がよく見えた、と思うのだけれど。でもみんなは違つているのだから、車にはねられたりしなければよいが、と心配になる。

○日

いつか総務部から、何でもいいから改善したいことがあれば提案してくださいという印刷物が来ていたが、私から言うこともないしと放つておいたらM氏から電話がかつて、私が出せば総務部は百パーセントの出案率になるから必ず出してください、

とのこと。そこで私は

『寮の門の開閉装置について

寮の通用門、玄関は、午前七時四十分から十一時三十分（店売遅番の出る時刻）までと、午後六時四十分から十時五分（同じく帰る時刻）まで開いています。その開いている間の、特に夜、私達がチカンと称している男が入って来て、お風呂の窓の下にいたり、食堂の外側を通ったりして、ギョツとさせられることが度々あります。

「何かご用ですか」と声をかけることによって、またはもちろん何も見えはしないのだから、諦めて出て行きますが、やはり怖いし、正体不明の男に出入りされるのは困るのです。そこで、前もって寮生の声か、声紋を登録して、「行つてきます」「ただいま」の声をかけたら開く装置があれば、痴漢の侵入防止と、寮生に挨拶の習慣がついて一石二鳥なのですが……』

と書いて出した。

はじめは、どうせ率を満たすだけのものという軽い気持ちだったけれど、いやひよつとして真面目に考えてくれはるかも知れん、という期待に変わって待っていた。

しばらくして評価がついて返って来た。

「次の理由で不採用とします

費用対効果の面から実施できない」

点数は五段階評価で、効果2、応用度2、独創性1、努力度2。百点満点で三十六点。選外。であつた。

○日

現在寮生は十九人いるが、噂によると、七月までに六人が結婚や独立で寮を出るらしい。新人は今年入るとしても一人の予定である。会社が地方出身者を採用しない方針で、去年から減っているのだ。

残っている寮生も次々と結婚適齢期なるものを迎えるし、一人でアパートで暮らしたくなるかも知れない。何だか私のクジのあたり、すうすうしてきた。みんなに「いつまでも居てよ」と言っているのだけれど、何人までなら寮はあるのだろう。一度K氏に聞かなくては。

○日

駅前の魚屋さんで、いい舌平目を見つけたので買ってきた。ブロッコリーとじゃがいもを付け合わせにしてムニエルにして食べよう、という魂胆。

大したお料理ではないけれど、寮のメニューと比べると、材料費は五倍くらい、料理する時の気の入れ方は二倍くらいで、これだけでも豪華版、それに都ホテルのコンソメスープの缶をあけて……、とたまに私がいい気持ちになったら、空から雨どころか雪が落ちて来た。

三月

○日

シクラメンが咲き誇っている。最後の五輪になって広い場所があるからか、大きく花びらを広げ、なかなか衰えを見せない。そのうちの二輪はもう一か月以上咲いている。さすがに色は少しあせてはいるが、他の三輪に負けないようにちゃんと立っている。花屋が咲かせた、はじめの時よりも華やかである。

切花もよく長もちさせるね、と人に言われるけれど、花の方が勝手に長生きしてくれるのだ。去年の薔薇は最後の一本が首を垂れたのは一か月後であった。この時は新記録かもしれない、と二十六日目から写真に撮った。息子が誕生祝いにくれたのだけれど「まだあるの、こうなるとあげがいがあるね」と言っていた。

私の手入れは知れたもので、丹精をこめているとは絶対に言えない。だとすると、ひよつとして、花たちはタバコが好きなのではないだろうか。タバコを吸わせるわけ

はないが、私のタバコの煙を吸って長生きしているのではないだろうか。

などと言って最近、嫌煙権に押しまくられて、いじけているもんだから、花を相手に無理やり仲間意識を植え付けようというわけである。

○日

大学卒の新入社員が五人入寮した。このうちの三人は研修期間が終れば東京に行くことになっているが、歓迎と顔つなぎの寮会を開く。

W子に「今日はだらけの活入れではないからお菓子付きにしようか。好きなものを買っていらっしゃい」とお金を渡した。W子はB子を誘い、近くのローソンまで走って行ったが、やがて大きな袋を四つも抱えて帰って来た。一人の予算は二百円なのにどうなっているのか、とお菓子のことには詳しくない私には何が出て来るのか興味があった。私なら単純にケーキ一個ぐらいしか思いつかない。

袋から出て来たものは、オバQポテトチップス二十八グラム入り、ビックリマンシール付きチョコレート、ミルキーバー、源氏パイ、梅の香巻きおかき、であった。私にしたら、オーバーに言えば、こういう世界もあるのか、という感じである。

それを分けるのに大騒ぎで、オバQの絵の、こっちが可愛いとか、ミルキーが懐か

しいとか、W子の、いかにしてお金を有効に使うか（残りは八円）の苦心談もあり、みんな普段の顔つきと違っている。二十を過ぎたといっても、まだまだ無邪気なものであった。

私も一人前もらった。今まで、細かく包んであるのは過剰包装だと思っていたが、こういう場合はそのまま分けられて便利である。お菓子屋さんもいろいろ考えてはるんやね、と私はオバQに言った。

四月

○日

新入生の、東京から出した荷物が、本人が到着したのに着いていない。寮の客用の布団を貸したが風邪をひいてしまった。私は池田の配送所に何度も電話をかけ、彼女の母親も東京の運送屋をせっついたが、行方不明とのことであつた。私の所に東京から電話がかかったのでどうしてこんなことになるのかと責めたら、期日指定の荷物があつて、コンテナに入っているから開けていない、ひよつとして間違つてその中に入っているのかも知れない、との言いわけであつた。でもその中也調べてほしいと言つたら、全国に手配したがもうちよつと待つて、と言う。その時既に、荷物を出してから十日が経つていた。

しかし新入生が会社でそのことを言つたら、その夜に荷物が届いた。そして私はその日総務部から注意を受けた。

「荷物心配などは寮母のすることではない、初めから我々に任せてもらえれば……」一発だとは言わなかったけれど、どうやら逆差別を受けられるらしい。今度のこと、会社からの申し入れがきめんに効いたのか、あのままのやり方で見つかったのかは判らないが、東京の母親や私、つまり一般の人間があれだけうるさく文句を言ってもらちのあかなかつたものが、M社、と一言言えばすつと道が開けるといふのはどういふことだろう。大口の取引きがあるとしても、小口だつてお客である。その腹立ちと、私がやらなくてもいいのだと言われたのが心に残った。何も手を打たず怠けていた、と叱られるのなら納得できるのに。いやしかし、新人生が来た日に荷物が届いていない、とその日に会社に言わなかったのは怠けていたことになるのかしら。

○日

梅が咲いて、桃が咲いて、桜が咲いた。他の草も木も春になれば目を覚まして華やかになる。私は春になったとたん、内にこもってしまった。どうにもならない事を延々と考えていて、その自分がまたいやになる。

Rさんにぐちぐち言っていたら「去年も同じ服を着て同じようなことを言うてたよ」と言われた。そう言えば去年、寮母日記を休んで、頭がおかしいと書いた覚えが

ある。それまでは移り変わる季節を楽しみ、良くないことがあっても私流のやり方うまくかわし、ウツの状態になることはなかった。知り合いの精神科の先生にも「あなたは考え方に柔軟性があるから、私とは縁がありませんね」と言われたことがある。そして逆に人のウツを治す名人であつたのだ。考えこんで苦しんでいる人に「こう思えば?」「どうしようもないことを考えても時間の無駄でしょ」とか割と根気よくつき合つて「おかげさんで」と複数の人から言つてもらつた。今や当時のその人達の気分はよく解るけれど、そして人に言つた通り自分にも言つてゐるけれど、すつきりしていない。

○日

今日は謀反を強行する。寮生が珍しく早く全員出払つたから、大急ぎで夕食の下ごしらえをし、食材は外のボイラー室に入れてくれるよう、門に札を下げて梅田に出た。目的は映画観賞『愛と哀しみの果て』。

「二人ぼっちの時にはわざと昔のにぎやかに過ごした時を思い出して、とことん孤独になれば耐えられる」とヒロインは言つていた。私は孤独には耐えられても、この二十四時間拘束され、休みは二十日に一回というのに段々耐え難くなつてきている。

外に出ることはあるけれど、禁を犯しているのだから落ち着かない。

今日はもう頭がいかれているから、どうなってもシラン、と暴挙に出た。幸い留守中に何事もなかったようである。

二十四日

月食のためハレー彗星が見える最後のチャンスとて、五月山の日の丸展望台まで行く。「私は夜遊びに行きますから、連絡事があれば寮長にしてください」と放送して行った。寮長のW子にはハレーを見に行くと言った。

展望台には望遠カメラを備え付けている人あり、小学生達は月食の記録を取るという理由で外出を許されたのだから、観測はそちのけで騒ぎ回っていた。

私は八倍の双眼鏡だから、はじめから彗星が見えるのは期待していなかったが、あれだ！と言う人がいて、それらしき星を見て（実は違っていたのだが）他の星や街の灯のきらめきを眺めて帰って来た。

五月山公園は山桜の季節であった。思えば今日は父の命日。父の植えた山桜も、今は兄の住む家で咲いているだろう。

寮に帰れば、私が彗星を見に行ったことは知れ渡っていて、会えば「見えました

か？」と聞かれる。ドライな若い娘達には不思議な行動らしい。

「次に巡って来る時には、あなた達は見られるかも知れないけど私は死んでいるしね」

「おばさん、それはないよ、美人薄命というでしょう。私なんかとつくに死んでいます」
「あら、そうでしたか、失礼致しました」

五月

○日

連休というこの厄介なもの。私の休みは二十日に一回の割にしかないから、みんなが休んだとと一緒に休んでいられない。もともと、店に勤務する寮生は忙しくて休めず、前後に代休を取るが、だから私の仕事もあるというわけだけれど、やっぱり人並みがいい。

しかし、おこぼれは頂戴できた。食事は希望者が三人以下になれば作らない、というのに寮母代々なっているので私も踏襲する。お風呂も六人くらいなら、お湯は沸かすけれど、湯船には張らずシャワーだけとなる。寮生が何か言ってくるのも人数が減れば減るし、電話のかかるのも減る。

と、こうは言っているけど、あんまり仕事がないのも落ち着かないもので、普段手を抜いている所の大掃除や、草取り、溝掃除をすることになる。そう言えばお正月も掃

除に専念した。お盆も同じ。かくてこの寮は大型連休の時にきれいになる。人並みがいいと文句を言いながら、私もよく働くではないか。

○日

寮生の退寮が続き、一人部屋が増え、近く退寮予定の寮生もいるので、部屋替えをすることにした。一人にならないよう退寮予定者を同室にし、一、三階同人数になるよう、今までと同じ顔合わせにならないよう、そしてもう一つ「あの人と一緒にいるのやつたら出て行く」というのも受け入れ、空いたあとあとへ引越す順番も考えて部屋割りをしなければならない。

以前は、新入生が多かったから、その人数だけ旧寮生が他の寮へ出て行き、各部屋新旧二人ずつとなる、この組み合わせは総務部が決めていた。しかし、相性もあつて替えた方がいいことがある。K氏は「勤務地が同じでかわりばえがしないからというのはともかく、感情で替えてはいけない」と言われるが、私は、仕事を離れてほつとしたいのに気が休まらないのはかわいそうに思うから、なるべくなら仲良し同士を一緒にしてやりたい。

幸いここしばらく新入生が少なかったり、いなかったりして、総務からの割り当て

は少ないので、こちらで適当にやれるようになった。

でもいくらそれぞれがいいように、といっても「あの人はいや」と敬遠される“あの”のことも考えなくてはならない。双方うまくおさまる方法はないものか。

寮長、副寮長の意見も聞いてみたが、これはあつさり解決した。十八人を二、三階に分ければ必然的に各階一つずつの一人部屋ができる。この部屋を割り当てられた“あの”人も、敬遠されたのではなく奇数のせいだと思えばいいわけだ。

こうして、退寮予定者が出れば、暑くて寒い各階端の部屋は空き部屋となり、抜けた所はなくて無駄は省け、けんかをしなくてよい部屋割りが決定した。内緒だけれど、私自身の感情も少しは入っている。それを隠す効果のほどは判らないが、部屋割りをワープロで打って張り出した。異議を唱える寮生は今のところ一人もない。

○日

オフ・シーズンながら、私はカルタ取り（百人一首）の練習をしている。今年のコーラスOBの新年会してから一念発起、来年を目指して覚えようというわけである。かつての現役の頃、みんなで歌うことと、遊ぶことが同じくらいの比率でよく集まった。カルタ取りは銀紙で作った優勝カップがかかっていた。しかしベテランは沢山い

て、私は中の下くらいだからカップは触ったことがない。

今年久しぶりにした時、そのベテラン達も年のせいであつたという間に持っていかななくなっていることと、五枚ほど残った時に、読み手が珍しく作者の名前を読み上げたから私の知っているのがあり、その札をつまみながら「はじめから作者名を言うてくれたらもつと取れたのに」とほざいた手前もあつて、帰るなり、三つ覚えて二つ忘れしても一年後にはかなり残っているのではないだろうか、とやり出したのだ。アンチヨコを何種類も作り、息子の高校の副読本で背景や解釈も読んだ。

前の×が○に変る代わり、○が×になったりしてやっぱり三進二退である。そしてしばらく全く見ない期間をおいておく。いうなれば、忘れる期間。これが不思議なことに楽しい気分なのだ。どれだけ覚えてるか、ではなくて「どれだけ忘れてるかな」と試す前はわくわくする。やり出せばひっきりなしに「あほ！」と自分をののしっているのだけれど。とにかく来年のカルタ取りでは何枚取れるだろうか。

六月 出雲旅行記

出雲へちよつと変つた旅をした。

私は生まれる直前に大阪へ来て、生まれてすぐに松江へ行き、三つの時にまた大阪へ帰つたらしい（記憶はない）。父母は大正九年から昭和六年ごろまで奥出雲にいて、姉や兄はそこで生まれた。父が亡くなつたあとで未完の自叙伝が出てきたこともあり、古いアルバムを見て一度は行つてみたいと思つていた。

奥出雲の中でも父の仕事の関係で住所は度々変つてゐる。アルバムには住んだ所だけでなく、祖父母や叔母と一緒に遊びに行つた日御碕や出雲大社、その他鉄道や乗合自動車の開通式、宴会の記念写真などたくさんある。父はよく働く人であつたけれど、またよく遊んでいたらしい。旅館で宴会をし、その旅館主も一緒に他の所へ出かけ、別の旅館主も仲良く写真におさまっている。とにかく旅館がやたら出てくる。そして何度も見て写真を照らし合わせると、いろんな人の名前が判つてき、父の大の仲良し

の人はこの人だったのだと判る。

父母も祖父母もなつかしい。私が一緒にいなかったのは致し方のないことだから、今から行つて、古い写真と同じ所に立つてみよう、と決めた。写真説明に足らない所もあり、叔母に当時の事を思い出してもらつて予備知識を仕入れた。叔母は六十年前の事を、写真を見て「この着物はこんな色だね」と言うようによく覚えていた。

それから、もしやと思つて現在の観光旅館名簿を調べたら一つだけ同じ名の旅館があつた。果たして昔から続いているものだろうか。とにかく出かけることにする。以前そのあたりにいたことのある仲良しと一緒にへ行つてもらえることになった。

出雲空港に着いてまず目指すは日御碕。灯台は明治三十六年に初点灯された時のまま。門柱は變つていた。門柱の標札は、昔は「日ノ岬燈臺」現在は「出雲日御碕燈台」である。ここでは母が左側の門柱の横に写っているから、私もそこに立たなければならぬ。祖父、祖母、叔母の、島根半島をバックにした展望台にいる写真がみんなやつれて見えるのはなぜか、今よくわかつた。百六十三のらせん階段を登らなくてはならなかつたからだ。七階建ての高さである。「ほんとにしんどかつたね、おばあちゃん」六十年たつて、人は死んでも景色はそのままであつた。地球の寿命からすれば變るはずはないだろうけれど。

出雲大社前の、ただ一つ名簿にあった「とらや」は、やはり昔からの旅館であった。若い奥さんに古い写真を見せると、中に写っている女の人が、亡くなったおばあさんに似ていると言う。そして一部屋だけ昔のままにおいてあるとのことであった。私は見せてもらいたかったけれど、それだけのことで迷惑だろうと、奥をすかし見るだけにした。

八重垣旅館は写真館になっていて、出雲大社参拝記念の写真をとらしく、それ用の日付入りのパネルが置いてあった。屋号は変わらず、八重垣である。私は参拝記念でなく、八重垣に出会った記念写真をとる。

大社教前の、ぎぼしのついたタイコ橋、これには赤ちゃんの姉も写っている。今、そのあたりのぎぼしのついた橋は石橋で丸みもゆるいが、これしかない。

姉が一年生の二学期間だけ通ったという松江の白潟小学校は宍道湖のほとりにあって、今年創立百十三年を迎える学校であった。校舎は建て替えられたであろうけれど、姉のために写真をとり、鉄棒でさかあがりをしてきた。嫁が島の向こうに夕日がゆっくり沈むのにつき合い、一日が終る。

奥出雲の訪問地は、国鉄木次線^{だいとう}上の大東^{きすき}、木次^{しもくの}、下久野^{やしろ}、八代^{みなり}、三成の予定であるが、へき地のことで、一日に数本しか電車は通らないから、下りて見てまわり、次の

に乗って見てということとは不可能である。それでタクシーでまわることにした。

運転手さんは、私の息子くらいの人だけれど、よく気がついて、また私の古写真をもとに尋ね歩くのをおもしろがって、町へ入れば郵便局などに聞きに入り、タクシー無線で聞いてくれる。しかし彼に言わせると、小さい町ばかりだから、このことはすぐ町中に知れ渡るだろうとのこと。

兄の生まれた八代の町で、まずとびこんだのが西村家具店。大社前の例もあり、西村旅館が家具店になっているかもしれないのだ。この私の推測ははずれた。がしかし、そこから糸がほぐれた。西村旅館は人が変って魚屋に、魚屋のおかみさんは年寄夫婦のいる家を教えてくれた。そこへ行ったら「宮川さんを知っている」と言う。でももとよく知ってる人に聞きなさいと。そうやってとうとう元いた家が判った。ここで父は貸自動車屋を営んでいたのだった。古い写真には父の字の「高級優美 親切丁寧 宮川自動車部」の看板が上がっている。今は、八代町公会堂となっていた。

次に下久野トンネルを探しに行く。このトンネルは、当時日本で二番目に長いもので、この鉄道工事に宮川自動車のトラックが従事していたのだ。

しかしなかなかトンネル口が見えない。人に聞いたら違う所へ出た。わりもない。タクシーに乗ってトンネルは？と聞けば、自動車道のトンネルを思うだろう。ほかに

誰が何のために鉄道のトンネル口を見たがるものか。けれどさつき、柿色の一両の電車の通るのが見えた。この近くであるに違いない。

運転手さんがようやく線路を見つけた。それはトンネルへ入る前に山かけに入り、下ってトンネル口に至るのであった。車はもう入らない。私はがけにかかっている工事用のハシゴを下りることにした。電車の来る心配はない。何しろさつき通ったばかり、少なくとも一時間は来やしない。線路に立つて、手前からトンネル口を写すだけ、と思ったのが、口まで行ってしまうて、中まで写してきた。

立ち止まれば、全く何の音もしない。緑にあふれ、草花が咲き、こんな所でしばらく暮らしたら、傷んだ神経がまっすぐになりはしないだろうか。

八代の駅前で、たまらず兄に電話をかけた。「今、八代にいるの」「ヤシロでどこや」「出雲八代やんか」「えーっ、おれも行きたかったのに……そこらへんの写真をとってきてくれよ」兄にはこの間のウツの時に泣いて驚かせ、今はけるつとして、八代にいる、とまた驚かせてしまった。でも私のウツは出かける前も治ってなくて、行つて、感激しない人になつて私を確認することになるのではないか、などとウツ特有のしょうもない思いにとらわれていた。しかしそんなのは吹きとんで、嬉々として、兄に言われるまでもなく写真をとりまくる。

三成の元谷田屋旅館では、当時若いお嫁さんであったであろうおばあさんが父を知っておられ、私の持つて行った写真にしゅうとさんを見つけ、自分の古い写真も出して見せて下さった。私の顔を見て「お父さんに似ておられる、昔に返って宮川さんに会ったような気がする、うれしい思いをさせていただいてありがとう」と言われた。私は「お元気で」としか言えなかった。背中がまがって小さく小さくなつてしまつたおばあさんであつた。

父も二十年ほど前に母と一緒に、昔の知人をたずねる、と行つてゐるはずだけれど、こういうたずね方はしなかつたようだ。二十年前ならもつと知つた人はいただらうに。阿井川の川原に母がよくいた。^{したふるい}しかし、ここだ、と思える所は見つからず、心を残して引き上げる。鬼の舌震という巨岩と溪流の地でも、岩は動いていないから、と探したが、時間がなくて半分で引き返したためもあつて見つからなかつた。しかしここで父の名誉(?)を回復するものを見つけた。父の写真説明には「鬼の舌振」と書いてあつたが地図や案内書などみんな「舌震」である。あまりのすごさに鬼も舌をふるわせたからこの名がついたといわれるのだから、震が正しくて父が間違つて書いたと思つていたが、かなり前に建てられた石碑には「名勝及天然紀念物鬼ノ舌振」と刻まれてあつたのだ。字を知らんね、と思つてごめんなさい、である。

鬼の舌震の近くに絲原家、広島の県境に近い山奥に櫻井家があり、昔はともに松江藩から鉄師頭取の名をもらった鉄山業者であった。父は櫻井家に入りししていたが、今でも櫻井といえど別格で、私など近寄れない、と写真はあつたが行くつもりはなかった。

しかし両家とも屋敷、庭が見られるようになっていた。そして別棟を建て、絲原は記念館、櫻井は屋号をとって可部屋集成館とし、それぞれ美術工芸品、民俗資料、古文書、書籍、製鉄法などが展示してあつた。みんな見事なものであつた。冬は雪に閉ざされるこの山奥に、今はともかく昔は、忽然として別世界があつた、という感じがあつただろう。

木次の駅前へさしかかった時、わがタクシーの運転手さんが「三葉タクシー！」と叫んだ。三つ葉のマークを屋根に乗せた車が停まっている。彼（一畑タクシー）が調べておいてくれて、その本社を訪ねる途中であつた。父は宮川自動車を開業するまで、三葉自動車の創業時から勤めていたのだ。車を下りて三つ葉マークを眺めていたら、向こうに三葉タクシーの大看板が見えた。社名が變つてはいるが、六十六年も続いていたのである。

駅前の本社へ行つて、無線でやりとりをしている忙しい人にわけを話したら、親切

に、ここは昔と場所が違う、と地図を書いたり、大東の元営業所は公民館になっていると言ひ、昔のことをよく知っている人は株主総会で今日はいない、と残念がつてくれた。しかしこれで充分である。父と母が出雲へ来て家庭を持った出発点へ、この旅の最後に立つて私はもう言うことはない。

出雲の人たちはみんな親切であつた。特に奥出雲では旅行者の私たちにも「こんにちは」と笑顔を見せる。父や母が生まれ故郷の言葉を捨てて、大阪へ来てからも出雲弁をしゃべっていたわけがわかるような気がする。ちよつと遅かつたけれど行つてよかった。

古い写真をたどるほかに観光客としてグラスボートに乗り、一畑薬師、松江城、明々庵、武家屋敷を見て塩見縄手を散策し、ハーンの旧居、記念館へも行つた。少しも疲れはなくて夢のような二日間であつた。いつもは出かけると雨に降られる私だったが、ずっとお天気はよくて、帰つた翌日大阪は梅雨入りとなつた。

七月

○日

七月に入つて、寮生が「お風呂を毎日焚いてほしい」と言つて来たが、私が「門限破りの罰の未決数を持つている人が焚くことにしたら？」と言つたことが発端となつて、揉めた。

初め、寮長が「検討します」と言つたのに、その後何も言つて来ない。どうやら、お風呂焚きはおばさんの仕事、という気があるらしい。そこで私は言つた。

「門限に限らず、いろいろ規則を破つて、私がどれだけ言つても改めないでしょ。自分達は言うことを聞かないで、私にだけ言うこと聞け、は厚かましいのじゃない。それと、あなた達は何か形にしないと解らないらしいから、私は敢えてこういう手段に出たのよ。私が無理を言っているかどうか、よく考えてちょうだい」

寮長にこう言っている時、ちょうどお風呂から二人が出て来た。十一時十五分過ぎ

である。いわば、お風呂の門限破り。この二人は長電話のあげく、お風呂もゆっくり入っていたのだった。寮長は、証拠が前を通ったから「明日寮会を開いてみんなに話します」と引き下がった。

お風呂に遅れて入る寮生に責任がない時もある。それは、早くに帰っている寮生が集団で遅い時間に入るから（多分テレビを見ているのだろう）満員となり、遅番で帰った寮生は待たなければならない。

とにかく彼女達は自分本位で、他の人や規則なんか頭がないようだ。夜中に屋上で洗濯をしたり、食堂でござそやっている。「野中の一軒家に一人で住んでいるのではないのだからよく考えて」と言っているのだけれど。見つかったら「すみません」ですます。すまなかつた、という顔ではなく、見つかつて運が悪かつた、という顔だからこつちが白けてしまう。

ところで、お風呂を焚く件は寮会を開いて、ペナルティ数2以上持っている人が、週一回順番に焚くことに決まった。しかし解散してから、一人が、今までは4にならなければ罰にならなかつたのに損や、と言い出し、同調するのがいて、またあくる晩寮会が開かれた。どうするかはみんなに任せるとして、私は「私の言いたいことを別のことにすり変えないように」と言っておいた。

結局、損得は論外で、お風呂はペナルティを持つている人が焚き、さかのぼって、門限破りを四回しなければ罰がないのがそもそもおかしいので、これから一回毎に、遅れ具合は罰の重さを変える、という規則改正にまで発展した。一人が、損や、と言ったばかりに、一回破れば即どこかの掃除をしなければならないことになったのである。門限を破ってにおいて文句は言えないはず、とはつきり言うまともな寮生がいて、それに逆らうのはさすがになくて、全員納得した。いつになく私が強硬にがんばっているのも解ったのだろう。

十日後現在、門限その他規則破りは皆無、私の言い出したことが、おまけつきで大成功であった。しかし、それと共に、私の初めからの「怒って言うことを聞かせるよりは自発的にやるのを待つ」方針は崩れてしまった。強く出なければ歯止めがきかなかったけれど、そっちが言うことを聞かないのならこっちも、という、いわば「眼には眼を」式は後味はよくない。

ごたごたの直後一転して、優雅にバロック音楽を聴いた。今日は寮長自ら罰でお風呂を焚く日。私は大きな顔して市民会館ホールへ行った。市民会館へは自転車で五分くらいで行ける。

テレマン・アンサンブルという、数人の小編成のもので、会場はホール内ではなく、

ロビーの天井から斜めにかかっている大きなステンドグラスの下での演奏であった。客席もロビーに折り畳み椅子を並べたもので少ししかなく、日が暮れないうちはステンドグラスが美しく、時には空港から飛び立つジェット機が見えて、普段の音楽会の雰囲気とはかけ離れて珍しい。暮れてからは遠雷の光と音がとって代わった。しかしそれらは演奏には影響せず、聴く方も何の不満もなく、華麗なバロックの世界に浸りこんだ。

前半が終ったところで二十分の休憩。二十分は長いなと思ったら、ドイツワインがサービスされるのであった。私はアルコール類は全くだめだけれど、この雰囲気は捨てがたい。グラスにちよつと注いでもらい、十五分かかってちびちびとやる。

故に、後半は、酒と音楽に酔いしれる結果となった。しかしこれもまた乙な味で、本来、音楽はこんな形で聴くべきものではなかったか、などと思ったりする。

ワインがあだか、終ってもみんなでアンコールを強要、最後は演奏される前に「これで終りです」の予告つきで、楽員は終るなり席を立ち、いなくなられては聴衆はもう諦めざるを得ない。

この、バロックプラスワインの音楽会は、ここで何回も開かれたらしく、終ってから馴れた感じで楽員も聴衆もワイン屋さんも、あちこちに歓談の輪を作っていた。私

は、知った人もいないし、抜け出して来ているから、大急ぎで自転車にとび乗って帰った。

出られないのだ、と無理やり諦めるよりは、時々“おばさん”の顔をやめて、ドレスアップして別の世界に潜りこんだ方が、抜け出しているという後ろめたさを差し引いても心身によいことが判った。くそ真面目にやっていて神経を傷めるのはもうやめよう。遊んだ後はよく働けるのだから尚のことである。ノイローゼにはならないと思っていたのが立派（？）になったので、方針を変えることにする。

八月

○日

蟬の生まれるのは年によって違いがあるようで、私がここに来てから、今年は五十八年に次いで多いようだ。五十八年度蟬作は良、六十一年度蟬作はやや良、というところ。そして暑い日中は鳴かず、朝と夕方がやかましい。「蟬時雨」なんて風流な表現は使いたくないほどのものである。

寮生は「都会の蟬はコンクリートの壁にとまって鳴くんですねぇ」と感心しているが、羽化も同じく、空蟬がいくつも壁に残っている。ある日は夕方から門柱にとまって羽化するのがいて、緑がかった色で出て来て、やがてこげ茶色の油蟬になるまでを見せてくれた。

夜がまた騒がしくボイラー室の照明灯の下に集まって来る。羽化するのにも条件があるのか、沢山いる日とない日が、はっきりしている。多い時は十匹もいて、人が

通れば驚くのか、習性か、人に向かつてぶつかるので「蟬に襲われたア」と一騒動。時には一緒に中まで入ってジイジイバタバタと飛び回り、寮生は逃げまどうのと、捕まえたのが入り乱れて大騒ぎとなる。

寮生が帰って来る度に飛びかかるので、壁にとまっているのを追っ払ったが、すぐ帰って来るので捕まえることにした。そろっと近寄れば難なくとれて、六匹を箱に入れた。これは明日、蟬取りの小学生にあげることにしよう。

○日

蟬取りの子に蟬をやったら喜ぶだろうと思ったのに、隣の児童公園にいた、網を持った子に「蟬をあげる」と言っても「いらない」とそっけない。「もらってよ」と無理やり箱を押し付けて帰った。

蟬を餌に誘拐されると困ると思ったのだろうか。無邪気な小学生よ、帰って来てよ。

○日

M子が自動車学校の卒業検定の日「暗い顔で帰れば落ちたのだから、声を掛けないでくださいね」と言った。私は「そんな、はじめから落ちることを考えないで、必ず

受かると信じてやりなさいよ」と言っただけで、暗示をかけてやろうと思い、荒神さんのお守りを「ほら、これを持っていけば大丈夫よ。これは靈驗あらたかなんだから」と渡した。この際、なんの神様でもいいだろう。

しかしM子は「レイゲンアラタカって何ですか」と言う。「えっ靈驗あらたかを知らないの」私はびっくりして、一緒にいた三人に「知ってるでしょ」と聞いてみた。が、大学卒も含めてみんな首を横に振る。新人類にとってはもう死語なのだろうか。しかし今も入試期は神社には絵馬があふれているし、非科学的なことが全くなくなつたとも思えないが……。

とにかく私は次の言葉が出て来ない。M子はけろつとして「どういう意味なんですか」と聞いている。私は仕方なく力なく「効き目があることよ」と言っただけ。「なんだ、はじめからそう言ってもらえれば解つたのに」とM子。

私はがくつときたが、彼女達が私に解らない言葉を使つて話していることもあるし、お互いにもう言葉が通じなくなつてきているのかも知れない。

そして靈驗あらたかではなくて、M子は検定に落ちた。スピードを出し過ぎたから、とのこと。これも考えられない。初心者はそのそと走るものと決まっているのだ。お守りも呆氣にとられて力を失つたらしい。でも、もしまたM子にそう言えば、まさ

かと思うけれど「アッケニトラレテって何？」と聞くかも知れないので、もうやめておく。

○日

ペルセウス座流星群がよく見える夜、W子と屋上に上がった。W子は翌日から盆休みなので、今夜は一時からテレビを観るのだと言っていたから、それまで星を見ようと誘ったら、二つ返事でついて来た。シートを敷いてクッションを枕に寝転んで見るのである。

まず北極星があれで、と言えばW子は「こんなに沢山ある星の中の一つがどうして判るの」と不思議そう。「はじめに北斗七星か、カシオペア座を見つけたら簡単」と言えば「それはどうやって」と。(うーんもう救い難いなあ)「形を覚えるのよ、そら、カシオペア座はWの形でしょ、あなたのWじゃない、あなたの星座にしたら?」「私は魚座です」「あら私も」

脱線しながら、私の知っている星座を教えた。その間にも星は流れて「アッ」「見た?」「見た」「大きかったねえ」「二十センチあった」「どういう基準で二十センチ?」「腕を伸ばして親指と小指を広げた長さ」「諒解」「アッ見た?」「見てへん」「視野を

広げよ」「どうやるの」「空全体を漠然と見るの」「できたできた」

そうやって流れ星を待ちながら、話は突然「寮はいつまであるのかなあ、寮生は出る一方だから、私も身の振り方を考えないとあかん」ということに流れた。近く三人が結婚で退寮することになったから、特にその思いが強かったのだ。

それにしても、宇宙の天体ショーを眺めながらの話にしては小さ過ぎるのではないか。あまりの差の激しさに笑いたくさえた。心を空に戻して、星の流れるのをひたすら待つことにする。

流れ星は未明にかけて多いとのことだったが、薄雲が広がって星の数も半減したので、私も二時に引きあげた。あさつては、さそり座のアンタレス星が月に隠れる[〃]星食[〃]が見られることだし。

九月

○日

最近、食数が少なくて「出来ません」という日がよくある。いつも食べていた寮生が続いて退寮したこともあり、連休があつて、この間は三日連続で作らなかつた。私は休みではないから他の仕事はするけれど、料理はかなりの、それも精神的な部分が大きかつたらしく、作らなくてもよい日は気が抜けたようになる。また「ほんまにいいのやろね」と落ち着かなくもあつた。

またまた、料理そのものはいやなことは少しもないのだけれど、ない日が三日続いたら、その気の楽なのに慣れ果てて、次の日はよつこらしよという感じで「何で今日に限ってこんなに数が多いのやろ」とうんざりであつた。

でもこれが当たり前のことなんだから、と諦めて久しぶりに台所に行けば、ガス台に、クモが巣を張っている。急に職場を奪われたような変な氣になつて「のいて、の

いて」と追ひ払い、ガスに火をつけた。

○日

この頃私は千年以上も前からの、菅原氏、藤原氏などの系図作りに熱を上げている。もちろん私が作らなくてもちゃんとあるのだけれど、小倉百人一首の作者に歌を書き入れたりして「私なりの系図」を作ることになるわけだ。

事の発端は、出雲行きの前に叔母に、私が生まれるまでの父母の生活を聞いた時に、母の父方（菅原姓）の先祖は菅原道真だと言ったのに始まる。

私の祖父は国文学者で、二人の自分の娘に、更級日記の作者の父の菅原孝標からとつて、孝子、標子と名付けた。私は単に菅原に因んで付けられたのだろうと思っていたが、叔母の話によると、祖父は元兵庫縣加西郡の生まれで、道真が太宰府に流された時に息子達もそれぞれ各地に流され、四男の淳茂は播磨の国であった。だからその子孫だといふのである。そして調べたがつていた。

今頃になつて私が初めて聞いたとはおかしな話ではあるが、とりあえず手近な所で調べたら、淳茂から九代目までわかつた。しかし、こちらからさかのぼる方は、過去帳は戦災で焼失しているし、枝分かれしている子孫のどれにつながるのか皆目見当が

つかない。足を使つて調べ回れば少しは進むかも知れないけれど、親の、六十年前の住み家を探すのと規模が違う。行き当たるとは思えない。知りたがっている年老いた叔母には申しわけないが、そちらの方は投げ出した。

しかし、菅原と藤原の縁組みがあり、たどつているうちに、百人一首の作者が数多く出て来るので、方向を変えて、歌入り（一節だけ）の系図を作ることにした。

はじめは三代くらいの家族がばらばらとあつて、それが一つの歌の作者によつてつながつた時は嬉しくて、矢印をついたり、書き直したりして、三分の一を残すところで四枚のチラシの裏が詰まっている。

今年の初めに、来年のお正月のカルタ会には取れる数を増やそうと決めたことにも役立つからかなり熱が入つて、これは途中で投げ出せない。百人全部が終れば、もう一度白い紙に写し直して、眺めては悦に入ることになるだろう。

○日

東京にいる友人（女学校のクラスメイト）がいつも洒落た服装をしている。センスが抜群なのは確かなのだけれど、加えて布地の材質や色合いがいい。（手紙のやりとりで、お互いにこんな布地でこんな服を作りました、と端布とスタイルを入れている

から、五百キロの距離は関係ない)

布地はこの周辺では見ることができないものだから、「一着分買つて送つてよ」と言つたら、近くに在后輩と一緒に私の写真を持つて行き、店の女主人と三人で相談して、これがぴったり、というのを送ってくれた。なるほどぴたりであつた。

それを眺めてスタイルを考えている最中に、彼女が旅行の行き帰りに私の所に寄つて泊まつた。またいいのを着ている。恐る恐る「それと同じのを私も着たい」と言つたら、経済的な裁ち方を教えてくれて、布地はまた送ってくれることになった。

彼女もまた布が好きで、買いに行くのは人の物であつてもいやではないらしい。後輩とその布地屋に行つた時は「ミヤさん(私のこと)をここに連れて来てやりたい」と言つていたのでそうだ。しかし私は「そこが東京でよかつたわ。見境なくほしくなるに決まつているから、見ない方が身のためよ」と笑つた。幸か不幸か、池田石橋には氣に入つた店がなくて助かつている。

最近になつて、池田にいい手芸の店があるのを知つた。ここは布地の専門店ではないから、入り浸つて経済ピンチに陥ることはない。洋服を縫うための付属品を揃えるのに不便のない店で、バッグやその他手製の小物が沢山ぶら下がつていて、時々行つては目を樂しませている。

この店の存在は、実はその友人に教えてもらったのだ。が一度は見つからなかった。彼女が来た時に二人で行って見たら、そのあたりは全部なくなつて、バス、タクシーのターミナルになつていた。

ある日自転車で走っていたら、前にそのあたりにあつた薬局が新しいビルにあるのが見えた。急ブレーキをかけて薬局に入り「前に近くにあつた手芸用品店はどうなつたのでしょうか」と聞きかけたら皆まで言わず「お隣ですよ」と言う。えつと出てみたら、あつたんですねえ。大きな店で（何でこれが目に入らなかつたのか）私は構えを見上げて感激した。

すぐ彼女に「見つけたよー」と知らせ、今は、選んでもらつた布とお揃いの布を積み、付属品はあの店で買って、と縫う暇のできるのを待っている。

十月

○日

メニユー表の欠食のサインが長行列を作る日が続いたり、寮生が「家に帰ります」とか「旅行です」と外泊を告げに来て、私はようやく連休があるのを知る。もう普通の休みとは関係がないのに慣れたか。

以前は出かける寮生達に「私を置いてみんな行くのねー」とわめいていたが、今はもう淡々と「楽しんでいらっしやい」と見送るだけである。寮生の方は「お土産買ってきまーす」とか「飛行機に乗るから、落ちたらこの指輪を覚えてて探しに来て」とか、それぞれのしやぎ方でにぎやかに出て行く。

顔ぶれは入れ替わったが、六人しか残っていない日が二日続いたので、私は前の晩に一人一人に朝出る時間を聞いて回った。幸い二日とも早出がなかったので、目覚ましはかけず寝坊を決めこんだ。朝寝の一時間は貴重でもうけた気分になる。朝のぼた

ばたとした慌ただしい気配はなく、夜も遅くにお風呂を焚いてまとまって入り、短時間ですんだ。

旅の者が帰って来たらにわかに活気を取り戻し、ここは世間とは反対に、人数が少ない時は休日で、多くの顔に会おう時が休みでない日である。

○日

秋の京都へ「ターナー展」を観に行った。ターナーという画家のことはよく知らなかったけれど、友人からそのオープニングレセプションに招待されていると聞いて、一度あのテープカットの後の空いた展覧会をただで観るといふのをやってみたい、というさもし根性で無理やり連れてもらったのだ。

行ってみれば、美術館長は病気のためお休みで、もったいぶったテープカットはなくて、入場者は多く、重なり合って見るいつもの見方と変りがなかった。

しかし入るなり私はおのが不明を恥じた。一見平凡な風景画にも、何やら動く気配のものがあるというか、語りかけられるものがあつて引きこまれた。こんな感じ方は久しぶりであつた。先日見たマネ展がよくなく、これはもう私は感じない人間になつてしまったのかと絶望しかかつていたのも救つてもらえた。

見終つても、出ようとして出られない雰囲気があり、また一番気になった絵を見に戻つてようやく不思議のターナーさんと別れた。

最近、私の雨女は返上しつつあり、この日の京都にもわか雨程度でちよつとぬれただけであつた。

○日

四回目の栗ご飯の日。去年までは食堂でみんなと一緒にわいわい言いながら栗むきをしたのだけれど、一人五個ずつとノルマを課しても、いつも二三人むかないのがある。危なっかしい手つきが見ていられなくて、私から「もうやめて」と言うのは別にして、ずるいのがいるのだ。今年は私の精神状態がよくないから、腹の立つことに近寄らない方がよい、とメニューを変更することを考えたが、やっぱり旬のものは食べたいから栗ご飯はそのままにして、栗むきは一人でやることにした。頼まなけりや、ずるをするのはいなくて、腹を立てることもない、という消極法である。

しかし、五十個のうち四十個をむいたところで指が痛くなつたので、残りは食堂に置いてきた。まあこれで、ずるでなくてもむかないのがいるから気はすむ。考えてみれば私も変な性分。

これにちよつと似たことで、私はいま、むきになってやっていることがある。それは社宅の溝掃除。

旧館が社宅になって、会社の人が入ってからクスノキの落葉掃きから解放された、と喜んでいたが、掃除がしてあったのはほんの初めだけであった。私はしばらくは落葉の積もつていくのを見ていたが、町内会で公園の掃除をする日があり、そのままだと町内の人に迷惑をかけることになるから、前の日に私が片付けた。社宅の奥さんは働きに出ているらしく、週日は留守である。

その溝には大事な排水溝が中央にあつて、そこが詰まると大雨が降れば道にあふれる。社宅の奥さんに、週に一回でいいから掃除をしてください、と言えればいいのだけれど、初めて行つた時に玄関横の小窓から応対されていやな気分がしたから、私は会いたくないのだ。

寮母などしていたら、そういう待遇を受けても仕方がないのかも知れないけれど、近寄りたくない。

たまたま関西電力が、高圧線にクスノキの枝が触れるようになったから切らせてほしい、と言つて来たので総務に電話をしてそれを伝え、ついでに溝掃除のことを言つたら、総務氏は、社宅の主に伝えると言われた。しかし変りない。雨の前にまた私が

掃いた。

食堂で仲良しの寮生にばやいた。

「掃除をしてくださいと言いは行きたくないし」

「そりやおばさん、やっぱり言うべきです」

「会いたくないのよ」

「手紙か電話で言えば？」

「それもいいややしね」

「それならいやみで、休みの日に寮生でわいわい言いながらやりましょか」

「いやみととられなかったらどうするの。今までも私がやるまで放っておく人よ」

以来、私はせっせと住宅の溝掃除をしている。言いに行くよりは、である。

部屋にじっとしているより体を動かす方が健康的だし、外の空気も吸えるし、そう、クスノキは落ちて来る葉も小枝もいい香りがして、気分がよいから鼻歌まじりでやれる。

なんてうそ。実は、何でよそんちの掃除を私がせんならんよ、と思いながらやっている。

十一月

○日

新聞に「ヒロインを造花で表現」展の紹介があった。椿姫、カルメン、葬の上、サロメなど激しく生きた二十五人の女を表わしたとのことで、Rさんを誘って見に行く。

先頃私は赤地に黒の水玉のデシンに黒のレースをあしらったワンピースを作り、それに「カルメン」と名付けた。そして次は「サロメ」を作ろうと布を探しているところであつたし、作者は私と似たところがあるような気がして「サロメ」をどう表現するのか興味があつた。

しかし、人の心はさまざまだと思わせ、表面的なものをくぐり抜けてつきつめたらこうなるのかも知れないと考えさせられる、私のイメージとは違うものが多かった。

私の「サロメ」は華やかな七色のベールのイメージから、外へも内へも一步も出ない。造花の方は、こじんまりとした白の葉とピンクの朝顔ような花一輪で、清楚と言

えるほどのものであった。

でも人間には気持ちがあり、行動があり、その行動も必ずしも気持ちの表われであるとはあるとは限らなくて、それを形や色で表現するのはむづかしい。それをするのがまた複雑な人間であるから、これはもう「違い」とは言えないのかも知れない。あなたはそう思うの、私はこうよ、であつさり片付けた方がよさそうである。

Rさんが私に「この花の中でどれが好き」と聞くから「あれとあれと」と言ったら「暗いなあ」と。Rさんの私に対するイメージもまた本人とぴたりしていないようだ。いつか「ミヤさんて、つき合ってみたら普通の人やった」と言ったことがあつた。一体どう思ってたんや。私はごくごく普通の人やと思つてるけど。

ともあれ美しいものを見て楽しくないはずはない。フランス調の喫茶店でお茶を飲んで、おしゃべりも楽しんだ。そのうち「沢山の造花を置くのには広い部屋がいるし、花の上にはほこりがのつたら困るなあ」と現実的な話になって、私は仕事があるのを思い出し、寮に帰った。

○日

ワンピースを買い替えた。今までののは単純なものだったから、縦書きができて、葉書

も使え、漢字変換も熟語でできるのが安くで出たのでとびついた。

しかしこれがカシコイ頭を持っていて、なかなか使いこなせない。それまでは「ワープロ講習会」なんて必要あるのかなあと思っていたが、私も行きたくなくなった。それでも高い講習料を節約しようと挑戦しているけれど、今のところまだ負けている。一旦白旗掲げて頭を休め、元氣が出たらやつつけてやるから、と思っている。

負けてるとかやつつけると言うのは、対話形式になっているからであるようだ。例えば、出した文字を消すために『消去』のキーを押せば『消しますか?』の文字が出て『はい』のキーを押さないと消えない。はじめのうちは素直に『はい』を押していたけれど、ミスが重なってくるとむかついて「消したいから押したんでしょ」とか「はよ消しなさいよ」と憎まれ口をきくようになって、意志のある相手に対していような気分になってくるのである。

奮闘中に二男が来たので「貸すからマスターして私に教えておくれ」と言っただけで「頭の体操になるから自分でやりなさい」とつれなく言っ、古い方を持って帰ってしまった。売ろうと思っていたものを。

○日

年に一度の、池田市の文化財を公開する日なので、Rさんで行った。ダイエーで駅弁を買い、Rさん宅へ行つて自転車を置いて、バスで伏尾の久安寺へ。

境内でお弁当を食べながら紅葉を眺め、半袖でもよさそうな小春日和、これでもう満足という気分であった。

しかし予定は詰まっている。国の重要文化財などを見せてもらつてRさん宅に帰り、残り五か所は自転車で回ることにする。文化財を見ることが普段は通らない所へも入りこむことになり池田の町が少し見えた。

池田はかなり古くて、いろんなものが雑多に詰まっているという印象を受けた。

神社の拝殿に、大きなステンドグラスが一對にしてはめてある。模様は鶴か鳳凰で、おかしくはないけれど、奇妙な感じはした。これが池田の象徴かも知れない。

私は池田に三年十か月住んでいるけれど、何かまだよくわからなくて、わが町、という気はしない。人の気質はもうひとつで、特に商売する人が、らしくない。私が行くのは布地屋が多いが、A屋は愛想はいいけれど、物差しが短いらしい。五十センチ買ったら四十九センチしかなく、三メートルなら五センチは足りない。N屋で「この裏地をコート分ください」と言ったら「そんな沢山無い」と怒られた。K屋で「もう少し腰の弱い布がほしい」と言えば「うちでは扱ってない」とけんもほろろであった。

二軒で言われて、これはひよつとして、そう言わせるものが私にあるのか、と悲しくなつて考えこんでいたら、K屋は別の布を出してきた。扱っていないと言いながらあるやありませんか。

あとで聞けばK屋は機嫌のよい時と悪い時があるそう。でも商売人の態度としてはどうだろうか。A屋は五十センチ買いに行つたのだから五十三センチ切れとは言わない、五十センチきつちりくればいい。N屋はおだやかに「コートには足りません」と言えがいい。私なら申しわけありませんがをつける。本屋も「そんな本ここで探さしても無理ですわ。大阪へ行かはらんと」と言つた。これも「置いてなくてすみません」ではないかしら。

とにかくこの頃一般的に商売する人がそうなのか、池田の土地柄か、たまたま私の行く先に限るのか。私はいつも後味の悪い思いを抱いて帰る。

住めば都、になるのはいつのことだろう。

十二月

○日

大根を買いに出たつもりが、隣の毛糸屋さんの軒先にぶら下がっているモヘアのセーターに目がいつて、かなり複雑な模様編みだけれど編みたくなり、衝動買いをしてしまった。大根百円。毛糸三千六百円。

しかし、毛糸を買えば編み方のパンフレットをくれたが、帰りぎわの店主の言った「これは好評で、もう何人も同じのを編まはりました」を聞いたら、私はもう編みたくなくなってしまった。同じもの、がいやなのである。難儀な性分。で仕方なく別の模様で編み始めたが、一玉編んだところで進まなくなり、ほどこいてしまった。続かないというのも難儀。

でも毛糸がごろごろしているのは気になるから、方針を変えてマーガレットを編むことにした。模様はなしで、身頃はガーター編み、袖は七宝編みである。

これは今のところ順調に進んでいる。眼鏡なしでも編めるし、途中で置いても、模様のどこやったかいな、と考えなくてよいからで、もう、私は目数を数えたり減らしたり増やしたりするのはむづかしい年頃なのかも知れない。

○日

寮の塀の向こうの駐車場に露出狂の男が現れた。ここを女子寮と知ってやって来て、懐中電灯で各部屋の窓に合図を送る。女の子に注目してもらいたいらしいが、寒いのにご苦労さん、である。

寮生達が騒ぐので「知らん顔しときなさい。きゃあきゃあ言ったら喜ばすことになるでしょ」と言っただけれど「塀を越えて来たらどうしよう、おばさん、はよおまわりさん呼んで」と泣かんばかりに言うので、とうとう派出所に電話をかけた。

しかし前によく男が入りこんだ時に警察に電話をしても、いつも後手となるので、直接近所の派出所に連絡する、という申し合わせができていたのに徹底していなくて、改めて状況を聞かれ私の名前や年まで聞かれていたのうちに男は帰ってしまった。今度は私のわめく番。「ほらね、もう電話はしないからね、みんなも変なのが来ても相手にしなさんな」

そして一週間後、また同じ男が現れた。私は「ほっときなさい」と言っていたが、寮生達は口々に怒鳴り出した。男に向かつて、である。その言葉たるやびっくり仰天、あんまりものすごくて書くのとはばかられる。

その日は退寮するF子の送別会を石橋でやってきて、全員お酒が入っていたのだ。それにしても若い女の子がそんな言葉を知っていて、使えるとは……。その上三人が駆け下りてきて「捕まえたいから行かせて」と言う。私はあきれついでに「まあそれだけ勢いがよかつたらいいでしょう」と出してやった。

しかし、男は怒鳴られて恐れをなしたか、イメージがこわれたか、既に姿を消していた。これから後ももう来ないだろう。

それでよかつたのかも知れないけれど、私もイメージがこわれたわ。この前はか細い声を出しておいて、ころつと変つてものすごいものだから。

お酒の飲めない私にはそういう気分は解らない。

○日

大フィル合唱団で歌っていた友人が東京に引越し、年末のベートーベン第九はどのようなと言っているうちに日は過ぎて、遂に九年続いた恒例大行事は今年で途切れ

た。

それにしても、同じものを九回も聴いて、よくもまあ、と我ながらあきれている。でもいつか、歌っている人に「飽きないの」と聞き「聴く方はどうやねん」と反問されて「飽きへんもんやねえ」と笑い合った。何度聴いても同じようには聴いていないのであった。きつと歌う人も楽団員も毎回同じ演奏ではないのだろう。

私の聴くのは大阪フィルハーモニーオーケストラで、大抵朝比奈隆の指揮によるものだけれど、指揮者の解釈によって演奏は変り、朝比奈さんの第九は、おそらく世界で一番時間が長いだろうと言われている。

友人は「団員の肺活量がどれほどあると思てるのか」と嘆くから「プロ並みと思てはるのでしょ」と励ましたが、ゆつくりだと目が回るそうである。その人だって、一緒に歌ってみれば、私の三倍以上も息が長い。

一度同じオーケストラの第九を小沢征爾の指揮で聴いた。指揮者が変れば音楽もびつくりするほど変る。特にこの時は、その年のはじめに亡くなった元コンサートマスターの安田さんに、三楽章が捧げられた。安田さんは穏やかな人で、聴衆にも人氣があり、ステージに現れると、指揮者かと錯覚するほどの大拍手が起るのであった。

（後任の若い人には拍手をしない。こちらへんは大阪人の現金なところ）

安田さんとは私がYMCAに通っている時、市電の天満停留所で一緒になり話をしたことがあった。その頃の安田さんはオーケストラに入りたてで、第一バイオリンの後ろの方で弾いておられた。私が子供を家に置いて出られるようになり、久しぶりに大フィルを聴きに行つて、安田さんはおられるかしらと後ろから探したら、ずっと前の方で、それもコンサートマスターの席であつた。

ある朝突然、事故で亡くなられた。

考えてみたら、年末の第九は、わが大阪のオーケストラで、コーラスの昔の仲間が私の分も歌ってくれていると思ひ、時々打ち上げ会に紛れこんだから別の知り合いもいて、最後に螢の光を歌つて別れるという身内的な気楽さがあつた。世界で一、二と言われるオーケストラを聴きに行くのとは別の聴き方をしている。

朝比奈さんは日本で最年長の指揮者で、時々ドクターストップがかかるようになったから、なるべく多く聴いておきたい。今年は仕方ないからあきらめて、部屋の中で第九を聴くことにする。

一月、私のお正月

一日

前夜はO子と二人。遅くに帰ったO子が銭湯に行くと言うので「大晦日まで働いたのだから、二人で贅沢しようよ」とお風呂を焚いた。O子は「たつぷりでなくても、寝転んでお湯につかればいいのだから、半分でもいいけるでしょう」と言う。私は「贅沢をするのだから一杯入れましょ」と言っただけで、まあいつもより少なめで止めた。それでも六人が入れる大きさだから泳げそうではある。

O子は「明日早くて会えませんか」と改まった挨拶をして引きあげた。私はラジオから聞こえる除夜の鐘を八つほど聞いたところでお風呂に入った。

一年が終ったから、新しい年になったから、といって特別の感慨はない。現実的に、しばらく一人の暮らしになるなあとという解放感に浸っていた。これから百時間は私だけのもの。これも贅沢なことと言える。ただし昼間外出してもいいが夜はいること、

となつてゐる。私はどこへも出ないことにした。その時間をまかなう用意はある。

朝は寝られるだけ寝て起きたところへ長男から電話がかかり、お雑煮を食べに来るとのこと。彼は武田の家風に従つて、元日は白味噌仕立てでなければならぬ。中に大根と人参が入る。私は実家式で、お澄ましに削り鰹と海苔と葱をのせるもの。二人で二様のお雑煮である。

午後から二男が来る予定なので待つていたが「風邪気味で出たくない」と言つて来た。長男曰く「あいつも年やなあ」。

そこで、お節とお雑煮の出前をすることに決めた。一つは夜の、ウィーンからのニューイヤークンサートをテレビで見たいためでもある。食堂に行けば見られるけれど、寒いからラジオで聴くことにしていたのだ。

二男とは久しぶりの対面であつた。秋に仕事で怪我をした時も見舞つてやれなかつたし、声もしばらく聞いていなかった。顔を見てほっとする。やっぱりお正月があつてよかった。

二日

終日百人一首の勉強。十八日にコーラスOBの新年会があり、その二次会で催され

るカルタ会に向けて、頭の特訓である。もうちょつと日が近づいてからの方が忘れなくていいのだけれど、暮に買った「百人一首の謎をとく」本が面白くて、それによって覚えたものもあるから、引き続き本格的にやり始めた。

誰もいないため遠慮なくラジオやテープやCDを大音響で鳴らしながらで、全くのわが世界。一日のニューイヤークンサートの録音テープもある。指揮をしたカラヤンは演奏の合間に挨拶をし「ピース、ピース、ワンスモア、ピース」で終えた。実はドイツ語と英語で、私にはそれしか解らなかったのだが、世界に向けて、平和を、と呼びかけたカラヤンがたのしかった。「もつと言つて！」という感じである。

洋楽を聴きながら和歌の勉強、これも平和なればこそ。

三日

頭を休めて体を動かそうと池田まで自転車で走ることにする。レコード屋と本屋のハシゴをし、CDと「かな」のお手本を買って帰った。CDを聴きながら書き初めをする。

あらさらむ このよのほかの おもひてに

いまひとたひの あふこともかな

(これは私の心境)

はなのいろは うつりにけりな いたつらに
わかみよにふる なかめせしまに

(これもおこがましいけどまあ心境)

こぬひとを まつほのうらの ゆふなきに
やくやもしほの みもこかれつつ

(定家に敬意を表して)

このたひは ぬさもとりあへす たむけやま
もみしのにしき かみのまにまに

(菅家が交野で詠んだといわれるから、

菅原でもあるし、交野の元住人として)

その後、覚えにくい歌を小さな色紙に書いて部屋の中に貼る。トイレの中にも貼った。色があふれて華やかでもある。幼稚園のようでもある。

四日

午後からばちばちと寮生が帰って来るが、食事はなしで、お風呂だけ焚けばよい。

気がつけば、私は三日間お風呂に入っていない。首までつかっていたものは、いにしえの女と男の思いをしのばせた言葉の数々に、であった。

結局、カルタの取り札を見て上の句を言えるのが七十五枚に増えた。これを忘れないうにしようするのがまた一苦勞であるけれど、毎日おさらいをして、このままを保つようにがんばろう。

六日

部屋は暖かくしてあるのに手足が冷たくて気分が悪い。夕方から熱が出て起きられなくなった。お風呂はW子に頼んでひたすら眠る。あんまり頭をいためつけたから、配線がショートして発火したか。古びた頭でも、その気になればなんとかなるやんか、と思っていたが、やっぱり、無理は確実にたたる。

五年目

二月

○日

日が経ってしまったけれど書いておかねばならないのはカルタ会のことである。結果は、熱の出る程覚えたにもかかわらず勝てなかった。でも私としては満足しなければならぬ。今まで足元にも近よれなかった人たちとさしでやって、かなりのところまでいったからである。

しかし勉強の仕方は間違っていた。私は意味が解らないと歌の上下のつながりが判らないと思つて、人物や背景を頭に入れていたのだけれど、単に競技のためなら、そんなもの必要なくて、中抜きで上下句の各上の部分をつないだものを覚えなさいといかないのであつた。なまじ、歌全部を知っていると手を出すのが一瞬遅れるのである。試しに、よく取る人に聞いてみたら、歌全体はよく知らないとのことであつた。

二組二百枚をばらまいて大勢でした時、下の句を読むまで手を出してはいけぬ、

というルールを持ち出した人がいて大騒ぎとなり、よく取る人はいらいらが神経を乱し取れなくなってしまった。それでは次の機会には私に有利な作者名から読むルールを提案してみようかしら。これも全部覚えた。何故か下の句から上の句を引き出すより簡単であった。

カルタ取りには役に立たなかったけれど、私は楽しく参考書をはじめ五冊の本を読んだ。中でも織田正吉氏の、定家が暗号をかくしている説や、林直道氏の、百首が前後左右でつながり、水無瀬の風景が浮かび上がる説はおもしろかった。私も以前の系図作りが私の中で生きているから、私なりの絵物語を描くことができる。

まだ飽かないから、来年にむけてまたがんばろう。今はひそかに私にしか解らない取り札の並べ方を考えている。取り札を読み札のいろは順に並べるといような単純なものではない。成功するかどうか判らないし、相手に知られない方がよいのでマル秘、極秘である。

○日

今年も会社から“ほのぼのキャンペーン”と称して私にも何か改善策や要望を提案するようにとの通達がきた。

去年は苦慮の末に、外部からの侵入者を防ぐために寮生の声紋を登録しておいて、寮生が「行ってきました」「ただいま」を言えば門が開く装置があれば、挨拶もするようになつて一石二鳥なのだけれど、と書いて出したが、三十六点で不採用、となつたのだつた。

寮を見回したところで何も無い、いや全室暖冷房とかあることはあるけれど不採用に決まつてるし、パスしようと思つていたらまた電話で催促。「文章でなくても、メモだけでけっこうです。こちらで適当につづりますから」

字も書けぬおぼはんと思てるのかとむかついたとたん、一度言わなければと思つていたことを思い出した。

入社した高卒生の研修期間中の服装は高校の制服で、となつてゐるが、地方出のセーラー服姿が痴漢の劣情を刺激するのか、毎年きまつていたずらをされて泣く子がいる。研修期といえど、高校は卒業しているのだし、その期間が終ればすぐに私服で行くのだから用意はあるだろうし、希望に胸ふくらませて上阪した新入生の、初めての試験にしては哀れすぎるから、私服にしてやってほしい、ということをやんとした文章にして出した。なんか私はチカン対策専門みたいになつたけれど仕方ない、毎年三月にはそう思つていたのだから。

やがて返ってきた評価は四十五点で、採用とあり、五百円の賞金がついていた。言わずもがな、と思ったけれど、もしそれがだめなら、何故制服でないといけないのか理由をお聞かせください、と書き足したのが効いたのだろうか。

セーラー服を着ていなくても、まだすれてない一年生にはチカンが寄ってくるかもしれないけれど、これで一つ悪条件を減らすことができた。賞金は何に使おうか。

三月

○日

新人が三人入った。短大卒二人、高卒一人。月末には大学卒が二人入ることになっている。

高卒のT子を岐阜県から家族全員で送って来た。母親より父親の方が何かと世話を焼き、T子はずっと泣いている。これはやばい。以前の父親恋しさで鹿児島まで帰ってしまった子の二の舞になりはしないか。

父子がちよつと離れたその隙に、私は父親に前例を話し、間違っても里心のつくようなことを言わないでくださいと言った。近頃の父親は考えられないほど女々しくなっているのだ。この前の、一週間経つか経たないうちに寮を引きあげさせたのも父親であった。ただ退社はせずに毎日二時間余りかかる道のりを通勤しているらしいが。

T子達は荷物を運び終ったら全員で出かけ、暮れてから帰って来た。用意するもの

を言ったから買い物かと思っただけで何も買っていないし、食事をして来た様子もなかった。ただただ泣く子をなだめていたのだろうか。覚悟は家を出る前に、いや入社が決まった時に父子ともつけておくべき、と思うのはきつ過ぎるのかな。

私は慰めを言わないことにした。遠去かる車を涙の目で見送っていたT子に、私は「さあ、がんばろう!」と声をかけて門を閉めた。

○日

今日は息子達と会う予定の日であった。二人とも日曜は忙しいというから、土曜のディナーを予約し、私は休みをとった。

朝「シンシンシンシャラシャラ」というお湯の沸くような音がする。お湯を沸かし、ているはずはないが確かめに行った。最近の私の頭は信用ならない。が、その音は外でして、霰が葉っぱを打っているものであった。私が休むと雨やけど今日は霰か、と思っっているうちに音はしなくなった。雨に変わったのかと窓を開ければ雪である。フン、雪か。でも夕方まで時間はあると思っただけなら、だんだん明るくなってきた。やっぱり気まぐれに降りよったんやなともう一度窓を開けたら、明るいのは雪が積もっていたからであった。そして降り続けている。気象ニュースを聞けば大雪警報が出たと

言った。な・ん・で・私が久しぶりに休んだ日に大雪が降らんなんのよ。

交通機関はご注意くださいと言っていたから早めに出ようとしたら、も早門まで雪かきをしないと出られない。

服を着替えに戻って道を作り、ようやく外に出た。駅までの道も次の足の置き場所を探しながら、こんなに自分の一步一步を確かめながら歩いたのは初めてであった。

しかし、私は無事に着いたけれど、息子達は雪のために仕事が遅れ、来るのに遅れ、二男は遂にたどり着きもしなかった。

閉店間際のレストランで二人で食事をした。「誰か精進の悪いのがいる、誰や」私やないよ、こんなに真面目に働いているのに。いや、でも私のせいかなあ。

出かけたら雨が降る。今日は雪。それも大雪。たまたまの旅行で二度台風に遭った。裕次郎の『嵐を呼ぶ男』というのがあるが、私は「嵐を呼ぶ女」か。おかげで殊更に印象深く、面白かったとも言えるけれど、同じ呼ぶならもっといい別のものを呼びたい。疲れた。

○日

新人生歓迎の寮会。今夜は会社から差し入れのケーキがあり、みんなニコニコと集

まる。

いつものことながら、自己紹介をする時の年齢のことで騒がしい。最年長のS子は「もうそろそろ十コ（歳）も違う子が入って来る、やばア」と言っている。私が「年とったといつても若いのに、何でそんなに気にするの」と言えば「この年頃の差は大きいのですよ」とのこと。

年齢にこだわっているうちに、最年少のT子と私が同じ干支だとわかる。W子「おばさん、ひょっとして三周り違うのでは？」私「まさか」W子「でも、二周りだと四十いくつですよ」私「……」W子「ねっ」

その通りなのであった。うかと過ごしていたけれど、考えてみれば二周りほど違うのはわが子で、それがもう三十を過ぎている。ここに来た時にはまだ下の息子と同年の子がいって、母親も同じくらいか、ちよつと下であった。T子の母親はT子と同じ干支で二周り上、つまり私より一周り下ということになる。

S子に年のことは気にするなと言っておきながら私はがくつときた。「私、もう寝る」。

新人歓迎会は年齢のことに終始して、笑いのうちにお開きとなった。

○日

悪い病気がぶり返してまた布を買ってしまった。この病気は潜伏期はあるものの治りはしない。めったに出かけないのに着るものばかり作ってアホな話。

スーツを作ってもまだ物足りなくて、キルティングしたビニール布でバッグを作り、残りで小物入れ、眼鏡入れをこしらえた。まだおさまらなくて、古いペチコートを長パンツに、寮生にもらった東南アジア行きの古着の中から一枚をかすめ取ってスモックに更生した。

スモックは綿ネルの赤と黒の格子のシャツを、衿、カフス、前立て、裾を切り取り、前は首が入るだけあけてはぎ合わせ、衿ぐりを前立布でくるみ、ポケットをおろし、袖口にゴムを入れて出来上がり。

着たのを元の持ち主が見たけれど、自分のが化けたとは気がつかないのだろう、何も言わない。更生は経済的であるし、虫おさえにもなるから、また何かないかとねらっている。

四月

○日

韓国からの研修生を預かることになった。初日は海外営業部の、いかにもキャリアウーマンと思える人がついて来て頼もしく、私は楽だったが、二日目からは頭痛がとれない。研修生L子は英語がまあまあで日本語は片言、私は日本語はまあまあで英語が片言、とかけちがつているからだ。それに予定ではL子のほかに日本の大学を卒業した四か国語を話せる台湾人が入寮するはずだったのに来なかったため、やむなく私は孤軍奮闘を強いられる羽目になったのである。

日本語をゆつくりしゃべり、解らなければ言い替え、または知ってる限りの英語に替えることで何とか通じてはいるが、複雑なことは伝わっているかどうか。L子ははじめ、解らない時は首を傾げていたが、私の苦勞する姿が哀れに思えてか、解らなくてももうなずくようになり余計ややこしくなってきた。本当に解ったかどうか確かめ、

どう理解したのか逆に私に言ってもらってようやく一つの用件が片付く。

よく、言葉が通じなくても心は通じるというけれど、やっぱり言葉が通じなければ、どつかりと胸の中に残るものがある。言葉は大切なものだ。

しかし、今ごろになって昔の怠けていたのがたたととは……。ツケはいつか払わなければならぬものらしい。諦めて、辞書を持ちながら、怪しげなる日英チャンポン語をあやつっている。でも私の辞書が手あかにまみれる前にL子の日本語の方が上手になるだろう。目に見えて（耳に聞こえて）上達しつつあるのが判る。

面白いのは、L子に対するゆっくりとした日本語が癖になって、寮生は会社でもその口調が出るそうだし、私は別の新入生に対して言ってしまった。新顔でもあり日本人離れしていたこともあったけれども、私の神経はそっちにへばりついていたらしい。

L子を預かるのは半年で、彼女の日本語が上達すれば英語はいらなくなるけれども、ほら、いつまたどんなことで必要になるかも知れないではないか。折角掘り起こしかけたのだから、この際もうちょっと勉強しようかなという気になっている。問題は頭のポンコツ度。

○日

Y子とW子が退寮することになり、送別会と称して寮生全員が飲みに出かけた。そして門限破り。

門限は十時で、門限破りの十時半までの罰は各階の廊下掃除だから、全員で破れば罰はないのと同じことにはなるが、はじめは十時までに帰るつもりであつたそうなの。でもお酒の勢いが謀反気を起こさせたらしい。それと「みんな帰ればおばさんも怖くない」というところか。

けれどもこのもくろみは実現せずに終る。悪酔いしたのがいたのが原因とかで、みんな十時半から十一時までの間に帰つて来た。この間の罰は食堂の掃除。私の持ち場である。

かくして私は当分食堂の掃除はしなくてよいことになった。私は「飲み過ぎるからよ」と飲みたいのに飲めない憂さを晴らし、みんなは物事は計算通りにいかないことを身にしみて感じているであろう今日この頃である。

○日

体重が大幅に減つた。はじめは意識して減らし、ここいらでいいだろうとやめたつもりなのに減り続けた。ちょうど会社から、ガン年齢になったから検査を受けるよう

に言ってきたし、減る原因がそっちにあるのかも知れないと私も考えたが、今のところガンは見つかっていない。

体に余分にあつたのは水と脂。水の方はナトリウム・カリウムの過不足でむくんでいたのが食物の摂り方でよくなった。もともと私は薄味が好きなのだけけど、寮生達には濃くしているから、同じものを食べているうちに慣れて塩分の摂り過ぎになっていたのだ。

脂はお腹の周りについていて、次々とスカートが窮屈になり、緩めてもまたきつくなって、いくら私が更生が好きだといってもこれだけは憂うつである。それが減らそうと思った一つの原因で、一度五十キロを切つてみたいというのもあつた。

運動をして減らすのは、以前のような首をいためるいらぬおまけがついたりするかから敬遠し、カロリー計算をすることにした。各食品のカロリー量を調べて一食五百キロカロリー見当におさえる。三食で千五百。私の一日の必要量は千八百から二千キロカロリーだから、誤差があつたとしても足りないのは確かで、赤字分は貯めてある脂から引き出してまかなうことになる。

計算が面倒なようにだけれども、慣れてきたら見ただけで何カロリーあるか判るようになるし、体もそのシステムに慣れてくれて大食いはできなくなった。もともと私は

カロリーの高いお酒やお菓子をいただかないから楽だったのかも知れない。

しかしこれも功罪相なかばして、体が軽くなってハイヒールを履いても足が痛まなくて嬉しいけれど、皺が増えて年寄りくさくなった。でも体のためにはよいのだから皺の方は諦めよう。年なんだし。

五月

○日

また工事が始まった。今度は“美装工事”で、外壁の塗り替えと防水、窓の清掃、厨房の壁・フードの塗り直しなどである。しかし体にこたえるのは今度のが一番きつい。建物の周りは足場を組み、下から三メートルは登れないようにトタン板が張られ、テントで覆われたから、一階は微かに光がさす程度。窓には養生というものが張ってあるので風は通らない。

ペンキで頭と喉が痛い。私は工事中はいなければならないので、その日の分が終るなり外に出ることにした。緑を求めて走り、おかげであちこちの藤の花を見た。夜桜ならぬ夜藤だけれど美しかった。

外の空気はおいしくて、木の下に座っていたらもうペンキの館へは帰りたくなくなるがそうも言ってはおられない。思い切り深呼吸をしてから帰る。幸い、工事と連休

のために食事作りはしなくてよかった。

工事は日曜は休み、祝日はあり、私が休めば工事も休むというから私は休まないことにした。それと雨が降らないことを願う。一日でも早くこのうつとうしい目隠しを取ってもらいたいからだ。

建物全体を白に近いグレイで塗り終ったかと思われたころ、紫がかったブルーのペンキが持ちこまれた。アレレ。寮生は「まさか」「笑ってしまうわ」と言う。何がまさかか笑ってしまうのか知らないが、この色はM社のイメージカラーで、社章はもちろん、製品の中にも入っている。

結局、各階窓上の庇の裏と門の鉄柵とドアにブルーが塗られた。現場監督は「はじめはどうかと思ったのですが、塗ってみると若者らしい、いい感じになりましたね」と言う。私は別の次元から眺めている。M社カラーでも何でもいい、これだけのことをするのならはこの寮はこしばらくは存在するのだろう。地方出採用が減って、私のクビがとぶ心配があったけれど当分クビはついているようだ、と。

日光を奪われたためか、鉢植えの一つがだめになり、私も風邪をひいたが背に腹は代えられぬ。耐え忍んでいる。

○日

ゴールデンウィークの中日、いなかに帰らず残っていた数人が全員朝早く出勤した。工事もお休み。こんな日を逃す手はない。出かけなくては。でもさてとなると情けないことに行くあてはない。でも「出る」ことが目的なのだからとにかく出よう。行き先は歩きながら考えよう。

かつては私もメンバーであった暮の月例会は今日ではなかったらうか。行ってみることにする。暮会がなければ映画を観ることにしよう。

暮会は今日ではなかったらしく、呼び出してもらったけれど誰も現れなかった。第一のプランはつづれ映画館の方にいく。映画はロバート・レッドフォード主演の『夜霧のマンハッタン』。誰かがレッドフォードの背がもう五センチ高かったら、と言っていたが私は考えてもみなかったなと思いつながら彼を見る。いつ見てもいい男。でもその彼も実生活では若い日の貧乏時代から苦楽を共にした夫人と別居中だと。どこにもいろいろあるわな。

これで私はレッドフォードの映画を三本続けて観たことになる。ということは一、二年おきに三回、それもレッドフォードの出るのばかりを観ているのである。

ある場面で、日本語訳ではこう出ていたけれど英語ではどう言っていたのだろう、

知りたい、と思ったのは最近英語を時々使うせいかな。でももう一回観て聞き直す時間はないので出てしまおう。

ともあれ、無断外出ながら、解放されて楽しい数時間であった。

○日

寮生に物事を伝えるのがこんなにむづかしいものとは。最近特に思う。こう程度が低うてはかなわんわ。

工事のために洗濯物の干し場が使えないから乾燥機がつけられた。寮生達は洗濯機でも何でもよくこわすから、黒板に「乾燥機がつけました。説明書をよく読んで大切に使うください」と書いたが「説明書」に矢印をつけて「食堂にあり」と付け足したがあだか、その後へ「乾燥機は洗濯室です、食堂にあるのは説明書です」と書き加えたのがある。おちよくるな。が、寮長をつかまえて「私のあの書き方では判らないの」と聞いてみた。寮長は「私も乾燥機は食堂にあるのだなあと思いました」と言う。アホか。読めば判るし乾燥機はしぼり機と同様洗濯機に付属するものではないの。屋上で洗濯をして一階まで持って来て乾かすことは考えられないのだけれど。という私の考えは間違っているのかしらね。

また「窓を洗つてもらうから、人が入れるように窓際を空けておくように」と書き、前日には念押しをしたのに、何もしていない部屋がいくつもあった。

私が置いてある物を引っ張り出しておいたら「すみません」と謝りに来て「何でしなかったの」と言えば「窓ガラスに物がひつついてなければいいと思いました」である。

いつか友人の女子大の先生に「常識で考えたって判るのに……」とぼやいたら、彼女は「それはあなたの常識でしょ。今の若い子には通じないのよ。根気よく教えてあげてちょうだい」と言われたことがあった。しかし学生ならともかく、いい年をしたひねた寮生に、幼児に対するように言わなくてはならないとは。十のことを十までならまだしも、十五も二十も言わないと判らんとは嘆かわしい。今の若い子と言うけれど、ここは特に悪いツブが揃っているのでは……。

根気よく、と言ったって、何度言ってもガラスとプラスチックの区別もつかないモンに、私はもうお手上げである。

六月

○日

今日のメニューはお寿司。おいなりさんと新香巻きと胡瓜巻き十二人分。おいなりさん七十二個と細巻き十二本である。最近細巻きも上手になって、ちゃんと真ん中に具が収まっているが、早めに余裕をもってやりたい。でもちようどラジオの番組に聴き逃したくない音楽がある。こういう時、いつもは録音をして置いて後で聴くのだけれど、今日はあいにく生テープがない。それでお寿司は寮母室の台所で作ることにした。

伴奏つきの作業も悪くない。リズムがついてうまく進む。おいなりさんは四分の三拍子で四小節で一個で、面白いようにできてしまった。いつもならまだあるのかあ、とすらめしく残りを数えたり、やっていればいつかは終りが来るだろうと諦めたりしていたのである。

そういえば初めの頃に、疲れ果てて調理場に立つ元気がなくて、こたつに足を突っこんでじゃがいもをむいたことがあった。どこでも同じことなのだから、これからはこの手でいこう。聴きたい音楽をやっていない時には調理場でテープをかける手もある。

寮生がお風呂掃除の時にラジカセを持ちこんで、罰掃除とは思えない陽気さでやっていたのを見たことがあるのに、私もやってみようとは思いつかなかった。遅まきではあるけれども私も「ながら族」の仲間入りをすることにした。

○日

今年の新入社員で、研修の間に寮し東京へ行ったD子が突然「出張で来ました」と訪れた。そして「泊めてもらう連絡が来ていますよね」と言う。私は聞いていない。またや。もうここはへき地なのか？ 連絡が届かないのだ。

この間は給食屋の納品伝票が違ったから「いつもの伝票に書き直してください」と電話したら「おたくの会社の方から、一月分まとめて出してくれと言われたから、毎日の分はこちらの伝票を使っています」と言う。そんなことは品物を受け取る私にも言ってもらわなければ困るではないの。購買部に電話したら「連絡しなければと思い

ながら忘れていました」と。

そんなこともあったから、D子には「また忘れてはるのでしょ、食事は無いけどどうぞごゆつくり」と言つて布団を出した。二泊の予定である由。

ところが翌日の夕方になつて、会社から「Dさんがそちらに行つてるのですか」と言つてきた。聞けば、D子は福島 of 寮に行くことになつていたらしい。連絡がないわけだ。連絡が悪いと言わなくてよかったわ。でも福島に行くことになつていたのなら、前夜に福島で「Dさんが着かない、どこに行つたのやろ」となるべきで、石橋寮かと思つても確かめなければどんな事故が起こつてゐるかも知れないではないか。翌日になつて「来てますか」では遅過ぎる。来ていたからいいようなものの。

でも当のD子は何でここに來たのか。これも連絡が悪かつたのだろう。今度のこととはまた私の思い過ごしたつたけれど、またか、と思わせる体質があることは確かだ。

連絡に関しては寮生にも、遅くなる時はただ遅くなりますと電話するだけでなく、大体の帰る時間を言つて、もう一度、何時の電車に乗るとか、居場所を知らせるように言つてゐる。でないと、まだ帰り道についていないのか、石橋駅まで歸つて来てから寮までの道で何かあったのか判りようがないからである。

でもこれもなかなか守れなくて、十一時を過ぎても所在が判らなくて心配な時がある。こんな時は意識的に大声を出してみんなに聞いて回る。「誰か〇〇さんに何か聞いてない？ 何でもいいから思い出して」と。すると何も知らなくても大抵玄関ホールに出て来るから、そこで、途中経過を連絡しなければこういうことになるでしょと言ひ聞かせ、時には寮長や屈強の若者を選んで自転車隊を駅まで走らせる。遅れて帰った寮生には、この仰々しい出迎えによつて、自分がみんなに迷惑をかけたことがはつきりと判るようになってゐるわけだ。

いつか、そうやって待つていたら、遅れた子は玄関に入るなりわつと泣き出して、後で聞いたところによると「私をみんながこんなに心配するとは思わなかった、嬉しかった」そうであつた。それでも自分で経験しなければ解らないらしく、人が替わつて時々この騒ぎは繰り返される。

○日

Rさんが久しぶりに寮にお越しになられた。彼女は各方面のボランティア活動をし、地区の子供達を集めて童話の朗読をし、奥さん達に刺繍を教え、自分のためにヨガをやり、俳句を詠み、と忙しくて、なかなか私のムダなおしゃべりにはつき合つて

もらえない。

チャイムが鳴って、私が門を開けに行くとRさんは新装なった寮を見て「やあ、きれいになったねえ」と言い、私を見て「寮母さんもおきれいで」と言う。私は「そりや私も厚化粧したからねッ」

前に私が「寮を塗り替える」と言ったら彼女は「寮がきれいになって、寮母さんだけが古い、と言わはったらどうする？」といやがらせを言ったのだ。だから、私の古びたのが際立たないように、せめて目くらましになるように、気を張ってお化粧を出迎えたわけである。

「寮母さんもおきれいで」も皮肉っぽいし、殊更に言ったということは、また追い討ちをかけるつもりだったのだろう。「そうはいきません、気配を察し、先手を打って塗りたいりましたのよ。塗ればきれいになるのです、寮も、寮母さんも」。

七月

○日

最近わが寮はクラシック音楽ブーム。というのはちょっと大げさか、三人でときめいているだけだから。でも今までは寮生のクラシック音楽好きは皆無で、私だけがひっそりと聴いていたのだから、二人増えれば快挙といえる。

きっかけは私がブラームスを聴いていたら、韓国から研修に来ているL子が聞きつけて「アナタハブラームスガスキデスカ?」と声をかけてきてから。私は「ブラームスもベートーベンもチャイコフスキーも好きよ。今はリヒャルト・シュトラウスに凝ってるの。凝るてわかる? クレイジイ」L子は「オウ、ワタシモトキドキ? スキナヒトガカワリマス」というようなことからL子がクラシックファンと判り、私の手持ちのCDの中から希望の曲をテープに録音して渡した。

そのうち映画『アマデウス』を観てからモーツァルトが好きになり、クラシックを

聴くようになったというY子が加わり、L子とコンサートホールへも行くようになった。私も近くの市民ホールでのバロック音楽を聴くのに誘って行った。この時は休憩時間にワインのサービスがあつてL子のご機嫌であつた。

そしてY子の勤務する店の近くにY子ならCDを安くしてくれる店があるとのこと、L子の希望も入れて私が選曲したものをY子に買ってきてもらい、テープに直して二人に渡す組織ができ上がった。しかしテープに入れるとやはりいくら音質が落ちるから「CDプレイヤーを買いなさいよ」と言っているのだけれど、彼女達は「電車の中でも聴けるからテープがいい」そうである。

L子にテープを渡すと、それを胸に当てて足踏みをしたり、跳びはねて「ウレシイ」と言う。隣国の同系族であるけれども、やはり日本人とは違う感じがある。普段はそんなふうには見えないが、何かあると感情をそのまま表現している。日本人は胸に手を当てないし、足踏みなんかしない。私がドレスアップして音楽会に行ったら「オバサン、ベリナイス」と言ってくれた。日本人ならほとんどの人は口にしないだろう。

それと、もう一つ判ったこと、これは全くアホな話だけれど、CDをかけていたら音が飛ぶようになった。いつか息子も音が飛んで、機械が悪くて交換してもらったと言っていたから、電器屋に持って行って診てもらわなければ、と思っていたのだけれ

ど、原因は「ほこり」であつたのだ。プレイヤーの周りをきれいにし、CDを虫眼鏡で点検、ほこりを取ったら飛ばなくなつた。取り外すのが面倒で、たまたまほこりを取つたらよくなつた。持つて行けば恥をかくところである。

かくしてクラシックファンが増えたことで、私は掃除の行き届いた片付いた部屋で音楽を聴くという、豊かな時間が増えた。懐の方は反比例して淋しくなるけれども、演奏会を聴くよりは安いし、外出がままならない私だからよしとしなければなるまい。

○日

調理師の国家試験を受けた。受験資格は中学卒で給食施設で調理業務に二年以上従事した者、となつているから、私は二年経つたところで受けようと思つていた。予備校からは講習会に参加するようにと再三言つて来ていたが、それは三〇五万円も要つて、行く暇も要る。私はどちらも余裕がないから、一人で勉強しようとした。

しかし二年前は問題集を開いたとたんさっぱり解らず頓挫。去年は頭にモヤがかつていて思い出しもせず。今年はようやくその気になり、保健所に行つて聞けば、試験日は後一か月半に迫つていた。これでは短過ぎるから諦めようとしたが、保健所に「試しに受けてみられたら」と言われ、気を取り直し、今度は解説書から始めた。

法律というのはどうしてこう解りにくい文章を使うのやろ、書き直したるかしらん、アミノ酸や添加剤のカタカナ語はかなんなあ、諦めよ、ビタミンは、熱、水、脂肪、酸、アルカリに対する強弱がそれぞれに入り混じって覚えきれへん、捨てよかしら、いやこれでは捨てるもんが多過ぎて足らんようになる、やっぱりこつこつとやるよりしょうがない、などで行きつ戻りつしてようやく七割までこなし、合格線は六割ということだから、アホな間違いさえしなかったらいけるかも、と、仕事を休んで受けに行った。

ところが、そのアホな間違いをやり、調理師試験を受けに行きながら、調理師法の問題を三つのうち二つ落とし、確かに正解というのは六割もなかった。望みは、はつきりと間違いといえないのが○であれば。その上に採点はコンピュータがすること。人間がすれば、調理師法がこれではね、となるからである。

発表までの一か月間、私は自分に、私も年やもんなあ、ひっかけ問題にひっかかり、落とし穴に落ちたのは素直過ぎたからやと慰め、いやそれがアホの証拠やんか、知らんものはしょうがないけれど、あれは知ってたやろ、何考えとったん、とののしった。でも悔しいから、恥をしのんで会社にもう一度証明をもらいに行つて受けなければ、と思っていた。

しかし合格であつた。自信のない、不安な、そしてスリルに満ちた日々。の末に。ラッキーであつた。

○日

新しい口紅が二本ある。アメリカとフランス製。今時珍しくもないが、寮生のお土産である。

一つはハワイに遊びに行ったY子が「色が気に入るかどうかわからないけれど」と言つて、くれた。そしてヨーロッパ各地へスキーの仕事で出張していたT子が「お土産です」と渡してくれたのがまた口紅であつた。

今までにつけたことのない色であるけれども、まだ私と口紅が結びつくのかと嬉しくなつて眺めている。

八月

○日

「幸福の木」というのを買った。これはドラセナの一種らしいけれど、誰がこんな名をつけたのだろう。でもこの名がついていなければ、私は買わなかったかも知れない。

いつか、医院の待合室で、名札のついたこの木を見たとき、涙が出てしまった。殊更に私は不幸だと思っていたのではないのに何故か悲しかった。神経がいかれていたのである。しかしその薬が効いたか、私が立ち直ったか「何でこんなもんが悲しかったのやろ」と不思議に思えるようになっていた。

ある日通りすがりにこの木を売っているのを見かけた。ヤーさん風の男が三人、店の主人をからかっている。「幸せにならへんかったら返しに来るで」と。その風体と言葉の釣り合いが何ともおかしかったので、私はついニヤリとして入りこんだ。する

とその中の一人が「ネーさんも買うの、これがええわ」と選んでくれた。それでヤーさんとネーさんはそれぞれ「幸福の木」をかかえ、ニコニコと花屋を出たのであった。それ以後、朝起きた時にそれを見て悲しくなかつたら「今日は正常」というわけである。

○日

Ｌ子がソウルに帰った。五か月余りいたが、結局私の英語は上達せず、Ｌ子の日本語は日常生活にはほとんど支障なく話せるようになっていた。

東京本社へ日韓の通訳として行くように言われた時、彼女は私にぼやいた。「マダワタシニツウヤクガイルトイウノニ」私は「今言ったことが言えるのなら大丈夫よ。今の日本語はパーフェクトよ」と励ました。一週間後「ツカレタ」と帰って来たが、

「通訳の方はどうだった？」と聞けば「マアマアデシタ」。

そんな言い方を日本語教室で教えるはずはないし、どこで覚えたのか、その他「ホンマ？」と言うし、もう少しいたら「シテハル」とか「シテヘン」という言葉が聞けたかも知れない。Ｌ子ももつといて勉強したいと言っていたが、適当な受入れ場所がなかつたようだ。

L子はここに来てからかなりやせたから「帰ったらお母さんが泣かれるかも知れない」と言ったら「リヨウデヤセタノデハアリマセン、カイシャデヤセマシタ」と言い、帰って行つた。私は彼女の乗つたジェット機が発する時刻に屋上に上がり、飛び立つのを確認し、見送つた。

○日

L子を帰してほつとする間もなく、また外国人が入寮した。今度はフランス人。こちらの方は日本語が全く話せないし、食事やお風呂のこともあるから断つただけで、英語は通じるから、と会社が無理やり送りこんできた。一体どう思てるのや。まあ本人がすぐに、暮らせない、と出て行くかとは思っているが、それでもまた私の頭の中はABCとイロハがごっちゃになるではないか。私は寮でやる。

○日

最近ようやく寮生が（全部ではないが）「行つてきます」「ただいま」を言うようになった。寮生の何も言わないのははじめから気になって、こちらから「行つてらっしゃい」「おかえり」と言っていた。でも私が言わないと目の前にいても向こうから

は言わない。聞いてみると学生の頃からそうらしいのだ。私なんか大声をはりあげないと忘れ物をしたような気になったのになあ。

いつかの朝、私が「おはよう」と言ったのに答えないのがいて、カッとして大げんかをした。

「何とか言ったらどう？」「言いました」「私は耳は悪くないのよ」「朝は大きな声が出ないので」「朝だけ？」夜も聞こえませんかよ」「言うてます」「折角言うてるのなら聞こえるように言いなさいよ」

その後の寮会で、とにかく挨拶をしましょう、と幼稚園児に言うようなことを言つて、それでも急には改まらず、相変らずこつちから声をかけるのが続いていたが、ようやくぼちぼちと、それもご機嫌次第というところではあるが大分ましになった。

クリーニング屋も週二回来るが、黙つて入つて上がり、クリーニングしたものを置き、するものを持つて帰る。コボンさんではなく、れっきとした店主である。これも長い時間がかかったけれど、黙つて入つて来ないようにしむけた。この頃は「おはようございます」と入つて来て「ありがとうございます」と帰つて行く。

九月そして十月

十七日

バイクに自転車ごとはねられた。相手は近くの学園の女高生である。小さな交差点で、私は横断歩道の信号が青になるのを見て発進したところへバイクが猛烈な勢いでぶつかった。二人と二台は道の真ん中に転がり、私は頭を打った。でも私はすぐに起き上がり怒鳴っていた。「青やないの！」考えてみれば相手に言うのだから「赤やないの」と言うべきであつたけれど、私の頭の中には確認した青信号の色が残っていたらしい。

相手も怪我をしているが、私も左足が痛い。右のくるぶしにも擦りむきがあつた。でも何より頭を強く打ったのが気にかかる。

「名前は？」「どこの学校？」と言つたけれど答えない。自転車に乗つた友人のようなのが駆け寄つてコソコソと相談している。そして「タナカです」私「タナカナニ？

住所は？」そしたら「急いでいるから」「私も怪我してるわ、頭も打ったし」さすれば「もうかんにんしてください」何？ 逃げる気か。逃げられてはたまらんわ。何としても吐かさなければ。「警察呼びましょか。それより交番へ行きましょう、その方が早いわ」二人はまたコソコソやっている。

そこへ男の人が来て「大丈夫ですか」と聞いてくれた。地獄の中の仏様。その人は赤信号で車を止め、私の通るのを見ていたらしい。信号が変わって発進したけれど、気になったから少し向こうで車を脇に寄せて下りて様子を見て来られたのであった。私が「こっちは青でしたね」と言ったらうなずいて「無茶ですよ。……ちゃんとしておかれた方がいいですよ」と言われた。

女学生に再度名前と住所を書いて、と言ったら「書くものがない」私も持っていない。戻りかけた男の人に紙と鉛筆をくださいと頼んだら名刺とボールペンをくださった。女学生達は男の人が出て来たから諦めよかと相談したか、名刺の裏に書き始めた。私が男の人にお礼を言ったら「免許証を見せてもらいなさい」と言い、もう一度「ちゃんとしておかれた方がいいですよ、何かあったら電話してください」と言って帰られた。

女学生は住所と名前を書いたので、電話も、と催促し「これ、うそやないわね」と言っ

たら「ほんとです」と言う。それにはハセベとあった。さつきはタナカと言ったのだ。それで「免許証見せて」と言ったら「持っていない」「持っていないって、これ乗るのに免許証いるでしょ？」そしたら「急いでたから忘れました」もうどうなってるのよ。

「学校は？」学校は判っていたけれど校章をにらみながら聞いてやった。そしたら校名を言い、急にうろろして「学校には言わないでください」を二回繰り返した。私は「言わないから、家に帰ってちゃんと言いなさいよ」とこちらの名前と電話番号を書いて渡した。そして行きかけたらまた女学生の声が追ってきた。「学校には絶対に言わないでくださいね」。

十七日分の日記を読んでびっくりした。自分のことだけれど、事故二日後にしてよう書けたなあと思う。

あれからの私は「青菜に塩」であった。あちこちから「何ですぐ警察に届けへんの」と叱られたのと、私自身の、相手に学校には言わないと言った、上にドが三つくらいつくアホさ加減と、後から出てくる体の痛みで心身共にくちゃくちゃになってしまった。

事故直後は警察、警察とわめいていたのだけれど、相手が逃げようとするので自分

で電話をかけに行くことはできなかった。その後証人が出てきて、もし相手がうそをついていても探し出せる自信はあったし、何より早く寮に帰らないと、夕食の支度とはかく寮生をみんな締め出すことになるという思いが一杯であった。

今から思えば誰かの言うように、起き上がって怒鳴ったりせず、ぐったりしていたらピーポーが来て、届ける届けないの問題もなく、相手の出方も違っていただろう。

その子が信号無視で突っ走るだけあって親も同類であった。見舞いに來るところか「娘は黄色で入ったと言っている、あんたも悪い」と言うだけ。学校に知られたら困るという爆弾を抱えながら言うのではないか。私は「そんなことを言うなら警察に届けて証人にも出てもらい、どっちが悪いか決めましょう」と言った。

そこでようやく彼らも警察に届けるイコール学校に知れる、に気がついたらしい。父子が「届けないでほしい」と言いに来た。しかし娘の態度は横柄で、私の言うことを腕組みで聞いているし、電話は二度も途中で切る。私は「あなたねえ、そういう態度をしないとますます分が悪くなるのよ。後で困るのはあなたよ」と言ってやった。私は学校には言わないと言ったけれど、警察に届けないという約束はしていない。届けようと決めたら向こうの親も行くと言う。どうやら私の状態を聞きに行った医者から諭されたらしい。治療費も保険金でと思ったのだらう。

警察署では「どうしてもっと早く届けないのか!」と大目玉を頂戴した。これは仕方ない。その通りだもの。それがまた特に怖い顔した大男の警官で、まさに大目玉で怒る。そして「事故車も持って来ないで、両方で青やの黄やの言うて! 今度来るまでに信号のこと煮詰めてきなさい」と言う。そこで私は「煮詰めるとはどういうことですか。私は青を確認して出ているのですから、これ以上言うことはありません」と言った。

その前に、私はしんどいから物を言うのを節約しようと、聞かれそうなことを書いて出してあった。助けに来た人の名前も電話番号も書いておいた。私が「ウエダさん(証人)を連れて来たいのですが」と言ったら「それは警察でします」とのことであった。

二日後に行けば、大目玉はウエダさんから状況を聞いて書いていたらしい紙を見せながら「ハセベ君よ、横を走っていた車の人がみんな話してくれたよ。その車は止まっていたんだよ」とにらみつけた。女の子はさすがに下を向いた。その時、隣の席で別の調べをしていた警官が「あんたの友達が自転車で歩道を走ってたんやろ? それに気をとられて信号に気がつくのが遅れたのかも知れんとその人は言うてたよ」と言った。まあ! 加害者の(本人が言いもしなかった)言い訳を言つてやるなんてウエダ

さんもやさしい人。

そのウエダさんに、現場検証に行くため警察署を出たとたんに出会った。お礼を言つて「立ち会つてくださるのですか」と聞けば「いや、野暮用で来ました」野暮用とは駐車違反の件とのこと。違反したり協力したり忙しい人だ。大目玉にウエダさんを紹介した。

検証は一時間かかった。私はすぐに済んだがバイクの方が長く、私は立っていられなくて人目も構わず道端に座り石垣にもたれて待った。終つたら大目玉は急に私に優しくなった。調書を作る時も「三十分程腰かけていられますか」といたわる。信号の変り方の時間とスピードから、私の言い分の正しいのを認めたのだろう。当たり前よ。私はうそは言っていないのだから。

その交差点は両方赤信号の時間が三秒間あって、仮に時速二十キロメートルで走つて、たとえ赤になった時に入つたとしても三秒あれば通り抜けられる小さなものだ。まして彼女の言う三十キロメートルで黄色だったら尚のこととつくの昔に通り過ぎていなければならぬ。それでも私が赤信号で出ていたら当然ぶつかるけれど、私はフライングもしていない。青を見たのだ。

調書の終りの方で大目玉は私に「加害者の処分に關して温情をかけてやる気はない

か」という意味のことを聞いた。私は即「ありません」と言った。そして「逃げようとしたし、謝らないし、ここで会ってもそ知らぬ顔だし、はじめに学校に知らさないでやろうと情をかけたことを後悔しているくらいです」とつけ加えた。私への態度はともかく学校で禁止のアルバイトをして、禁止のバイクに乗るから進入禁止の赤信号も無視することになるのだ。一度懲らしめないと本人のためにもならない。

きついなあと言う人もいるけれど、私にしたらそれでもまだ足りないくらいだ。これでボケが本格的になったらどうしよう。お医者は一時的なものでしょうと言うけれど、何をしようとしていたのか忘れる。計算を間違える。言葉がすぐ出て来ない。物を無茶苦茶に片付けている。これは半ば無意識のうちに“立つ鳥あとを濁さず”の気があつたらしい。立たずに留まつたら、みんな変な所に置いてある。鉄は行方不明。

診断書は「右頭部打撲傷、右踝節部挫創、右臀部挫傷、左大腿部挫傷、頸部捻挫、腰部捻挫、三週間の加療を要す（見込み）」で、後から肋骨の痛みが加わった。

人が下り坂をなるべくゆっくり用心しながら下りていたものを、ドンと背中を突くから、何年分か飛び越して滑り落ちてしもたやないの。どれだけか判らないけれど、さし当たって秋を一つフイにした。音楽会行き取り止め。大台ヶ原散策取り止め。

湿布だらけの体で見上げる秋の空はやけに美しい。

十一月

○日

頭を打ってから二か月。徐々に回復しているつもりだったけれど、まだかなりおかしいところがある。

月日の経ったのが信じられないのは、記憶がすっぱり抜けているのであった。忘れたのではなく、経験はないけれど記憶喪失とも違う気がする。別の私がいるか、私がn次元にいるか、というような感じである。

例えば、先週のメニュー表を見たら、こんなの作った覚えはない、というのが多い。休んでいないのだから確かに料理はしているはずなのに、これも知らん、これも知らん、である。ラジオの音楽を録音していないと思っていたのに、録音したテープが出てきて、ちゃんと演奏曲目の載っている新聞の番組欄を切り抜いたものが差しこんでいる。おまけにA面に小品を二つ入れて巻き取り、B面に大曲をまるまる入れて、ア

ンコール曲をA面の残りへ入れるというまめなことがしてあった。ラジオを聴いたのははつきり覚えているが、テープの方を聴いたら、誰かがした、ようである。同じ本を二冊買ったし。爪が何でこんなに早く伸びるのやろ、と思っていたが、爪は時間の経過に従っていつものように伸びていても、私の頭が時間を飛ばしているから、ちょっとした間にもうこんなに、となるのである。恍惚の人が、ご飯を食べたのに食べていないと言い張るのはこういうことなのかも知れない。食べたのを忘れるのではなくてその時間がぼつかりとなくなり前へ詰まってしまうのだ。なくなるのだから食べていないのと同じ。同情できる。

外科医に話したら「どうしようもないことを分析するのはやめた方がいい」と言われた。でも分析したわけではなく、こんなカラクリなのか、と私にしたら発見をした気分である。そして、私の頭の中には存在しない「時」でも間違えないでやっていたのだから安心はしている。ただ、いつものように一月に二回の割でそろそろ休もうか、と思ったら四十日経っていた。体も頭も休めた方がいい時に限って休んでなくてアホな話ではある。

湯船に入っていたお湯と水が突然止まってしまった。ボイラー室に行ってみたら、揚水ポンプのモーターの一つが空回りをしていた。私の頭に同調したらしい。水が入らないからボイラーも安全装置が働いて止まってしまったのだ。

スイッチを手動に切り替えてもう一方のモーターを動かそうといろいろやってみたが動かない。電気部のM氏の自宅に電話をかけて指示を受けたけれど、私のしてみたことしかないようだ。

寮生は湯船に寝転んで入ったが、水の出ないのは困る。深夜、ボイラー室に入りこんで未練がましく電源盤をにらんでいたら、気まぐれのように少し回った。これも私のまねか。しかしこれで朝の水は確保できた。

翌日、応急処置をして、後日モーターを取り替えることになった。取り替えた日、試運転に私も立ち会ってボイラーの火も確かめた。だのに夜になってからお湯が沸いていない。火がついているから大丈夫と思っただのは早とちりで、温度計も見ないといけなかったのだ。

運よく業者に連絡は取れたけれど、来たのが九時半、直ったのは十時半を過ぎてもう湯船に入れている時間はない。どうしても入りたい人だけシャワーで言えば全員入った。髪は毎日洗わないといけないのだそう。

新しいモーターも機嫌よく回って、ようやく安泰の日が続くかと思ったら、別の工事のためにお風呂用の水管を閉じるから二日間焚かないでほしいとのこと。

寮生は銭湯に行ったり外泊したりでしのいだが、三日目もだめと言う。私はみんなが帰って来てブウブウ言うのを聞きたくないから、電話で知らせ、営業している最寄りの銭湯を探し、黒板に地図を書いておいた。

結局その銭湯に行ったのは遅番の三人で、自転車を手繋ぎで行ったが、帰ったのは十二時を過ぎた。たかがお風呂、されどお風呂、の目まぐるしい数日であった。

○日

遠出を試みる。行き先は須磨、舞子。明石にいる友人に須磨水族園に行きたいと言ったら、彼女もピラニアの、餌を食べるのを見たかったから行きましよう、となった。出かけたら例によって雨と風。私はもう心穏やかに、与えられる運は受けようという気になる。わめいたところで嵐が止むはずもなし。

舞子で待ち合わせのところ、私は垂水で下りて待っていた。前途を思つてぎよつとしたが、気がついたのだからよし、と笑つて終りにする。

舞子の浜に建っている孫文の記念館を見た。大正の初めに建てられた八角形の美し

い洋館であるが、淡路島への橋が架けられるためになくなるそうだ。海をはさんで淡路島が見えるこの景色も見納めかも知れない。

須磨水族園は昔の水族館を改装したもので、ラッコが人気をさらっていた。私達も風雨の中を三十分並んだが、見るのは「立ち止まらないで」の声に押されて一分くらい。出るなり後にいた女の子が大声で「あれだけ？」と言った。ほんとにあいそのない。

その他の水族もよく見えなくて、見えるのは陸族ばかり。それがみんな「またすいた時に見に来よう」と言っているのだからおかしい。誰がじっくり見たのだろうか。友人がお目当てのピラニアは二千尾もいたが、食事時でなかったから、ただの魚であつた。

十二月

○日

社宅の庭にあるクスノキをめぐって、このところ人の心が揺れる。近所迷惑だから切ろうと言う人あり、たたりを恐れる人あり、私はクスノキがかわいそう、と思つてゐる。そして切る案が出るまでに、私がその片棒の半分の半分くらいを担いでゐるかも知れないのが氣掛かりでもある。

前に電気部から「社宅の植木のことと近所の人から苦情が来ているのですが、何か聞いておられますか」と言つてきた。私はクスノキのことかと思ひ「落葉の季節はものすごく、私が時々掃いてゐるけれど、近所に迷惑はかけてゐるでしょう」と答えた。

その後の総務部からの電話で、クスノキの落葉ではなくて、別の木に虫がついてゐるらしいことが判つた。この度の苦情はクスノキ側ではなく、反対側の家からの苦情であつたのだ。

毛虫はすぐ退治されたが、会社もこの際苦情を減らすために、植木を整理しようとした。決めたらしい。クスノキは市の保存指定木なので願書を出して許可は下りた。しかし頼んだ業者は「他の木は切るが、クスノキは切れない、丸坊主までにはするけれど切るのは堪忍して」と言うそうだ。大きい木はたたりがあるからとのこと。

総務のO氏も「おはらいをするつもりだけれど、怖い」と言い「寮母はどうですか」と言う。私は怖いからでなく、切らないで済む方法はないか、と思っている。迷惑になっっているでしょうとは言ったけれど、切ることになるとは思っていなかったし、緑を減らすことはない。

このクスノキは電気の高圧線に触れるために、枝は度々切られてすでに木の形は崩れているのだからもっと切って、外に葉が落ちないようにすればよいのではないか。それでも外に飛び出す分は私が掃けばよいのだから。

しかし社宅の主はどういう人間か。自宅の庭の管理くらいしたらどうか。毛虫退治に来た日、奥さんは居留守を使い、構わずやりかけたら出て来て「頼んでいないから要らない」と言い、会社が頼んだと言ったら「会社がお金を払うのならやって」と言った。

会社も直接社宅の主に言えばよいものを、私に言ってきて、私は社宅の管理人では

ないのよ。と言いながら、私は同じ会社の者として近所に悪いから、文句たれたれ掃除をしている。O氏にいつか「社宅の人に掃除をするように言ってください」と言ったら「寮母さんには何々しなさいとは言えるけれど、社宅の奥さんは社員ではないから言えない」と言われた。奥さんに言えなくても社員である主人に言えばよいと思うけれど、私は「それなら私に正式に命令を下さい。社命とあれば気兼ねなくやれますから」と言ったことがある。私もかなり意固地。

クスノキは怒っている。多分。私を含めてみんなおかしいよと思っているだろう。償いに、文句は返上して「切らないで」とO氏に言おう。

○日

病院に行くのは、しんどくても「外に出られる」こともあって、せっせと通っていたのだけれど、さっぱりよくならないのでいやになってしまった。お医者にもう一度レントゲンやCTの写真を見直してほしい、と申し入れたら、見える所は悪くないが、見えない神経の失調があつて、そのために頭に血が行かなかつたり、行き過ぎたりするのだろう、と言われた。そしてそれも自分の責任でないのは治りにくいのだ、とも。

私は四六時中、責任がどうのと思っっているわけではないが、こうなってみると、私が赤信号を無視していた方がどれだけ楽かと思う。私にも安全を確認しなかった落ち度はある、とは思ってみるものの、百パーセント諦めの境地には至らない。

病院の帰り、泣きながら自転車走っていたらひっくり返って膝を擦りむいてしまった。

○日

総務部から「みなさんでどうぞ」と干し椎茸と、かぼすが届いた。椎茸は煮物の時に加えてもいいし、佃煮でもよい。かぼすはどうしようか。「鍋物をしよ」という声もあったが、休みの日も帰る時間もまちまちの寮生が、みんなで鍋をつつく時をもつのはむづかしい。それでかぼす酒を作ることにした。お酒にすれば「みなさん」が飲むだろう。

ホワイト・リカーと氷砂糖につけたら緑色がすぐ黄色に変って、レモン酒のようであるが香りは違う。しばらくねかせてから、かぼすを引き上げ、こして出来上がり。小瓶に分けて総務にも届け、食堂に置いた。が、寮生は初めは喜んでオンザロックで飲み、この分ならすぐになくなるか、と思ったのにぱたと減らなくなった。「甘い」

とか「葉のような匂いがする」とか言つて、評判はよくないのである。

要するに彼女達は、よく言えば純粹なものがよいのだらう。私は果実の味や香りをつけたものの方が夢があつていいように思うけれど、これは私が下戸だからだらうか。私はこして瓶に入れるだけで、なめもしないのにふわつとなつて、水割りで挑戦したがだめであつた。

○日

最近また百人一首をリハビリとお正月用を兼ねてやつている。初めに、どれだけ覚えていたかをテストしてみたら、見事に半分に減つていた。暗然としたけれど、繰り返し復習をしていたら徐々に戻つて来た。

百枚の、私だけの並べ方を作つたが、実際には五十枚でどれが来るか判らないのだから、取り札を半分に分けては並べる練習を飽きもせずしている。結果は来月。

一月

ウィーン ニューイヤークンサートを聴きに行った。ンと二の間にへが入るといいのだけれど、これは催物名である。ボスコフスキーがウインナワルツ管弦楽団を率いての日本公演で、私がボスコフスキーの指揮を直接見るのは約二十年ぶりである。それに、三日前までは考えられないことだったので、大感激であった。

来日は早くからわかっていたけれど、体の調子もあって諦めていたから、切符はとうに売り切れ。でもやっぱり行きたくて、十二月の第九を聴いた方法でいけばなんとかならないか、と間際になってからやってみた。

第九の方法とは、これも行かないつもりで切符は買っていないくて、でも未練があつて、ひよつとして一枚くらい残っていないかと電話を試みたら「全部売り切れだけれど、キャンセルがあるかも知れない、それは当日開演の十五分前にならないと判らないので、一応来てみてください」というもので、散歩のつもりで行ってみたら、真

ん中のよい席が手に入ったのであった。

それではじめから「キャンセル待ちの予約を」と申し込んだ。しかしこれも満員。ただし「立見席ならあります」「立見って補助席ですか？」（第九の時は補助椅子があった）「いいえ、真正正銘の立見です」うーんどうしようかなあ、二時間立っていられるかしら、全く無いと言われるほうが諦めがつくものを、などと迷ってしまふ。でも電話の相手をそう待たせられない。遂に「それでは一枚お願い」と言ってしまった。やはり柳の下に二匹目のどじょうはいなかった。いや半匹くらいはいたことになるのかな。

この日の外出は急に決めたから食事は取り消せず「食事ありの休みにする」と言っていたら、O子が「お風呂のない日だし、私が早く帰って留守番してあげる」と言ってくれたので、早めに料理をして抜けて出た。

立見券を買って入ったが、立見といえど場所のよしあしもあるし、人の後ろにならないよう手すりを確保しなければならぬ。しかし、手すりに手を乗せてその上にあるごを乗せたり、頬杖をついたりして、席に座っているより気が楽で、立ち聴きというものなかなかのものであった。

演奏は休憩をはさんで二時間あったが、楽しさ以外の何もなく、またボスコフスキー

さんが振り返って聴衆に手拍子をさせてくれるから、私は靴のかかとも音を出したりして、これは立っていればこそである。

外の冷たい風も私の興奮を冷ますことはできなくて、いつまでも熱く、それでいて安らかな素敵な一夜であった。

○日

しばらく休んでいなかったなので休みをとったが、さあ一日何をしよう。まず髪を切つてすっきりしましょうと美容院に行く。時間はあるのだから何時間かかってもいいと思つていたのに案に相違してすいてすぐに出来上がってしまった。

本屋をのぞき、蜜柑を買つて帰ろうとしたら「国鉄、茨木行」という、珍しいバスがいた。毎日放送でやっているエッシャー展を観に行きたいと思ひながら忘れていたのを思い出す。いつ出発するのかと聞いたたら「五分後」。蜜柑を積んだ自転車の本屋の前に置きに行つて、バスにとび乗つた。

西国街道をたどりながら茨木へ。JRで千里丘まで切符を買つて入ったけれど、大阪行きか京都市行きか判らなくなつた。改札さんに聞くと「二番線！」こんな人間も少ないだろう。千里丘でも、毎日放送は？と聞く。ここは丁寧に送迎バスがあると教え

てくれた。

エッシャーは昔から私の好きな画家である。でもだまし絵の、どこでごまかされるのか見極めようと、にらんでいてもたまされる。正則分割あるいは種類の違うたくさん動物のはめ絵など、どういう頭の構造なのかと感心し、かつ呆れる。私は絵の展覧会で時々私も描こうかなあと思うことがあるけれど、エッシャーの絵を観ても全く思わない。こんなむづかしい代数の問題は解かれへんわ、という感じである。

帰りの送迎バスの行き先はいろいろあつて、一番早かったのが千里中央だったのでそれに乗った。今日は何事も成り行きまかせとなつた。

千里中央で、馴染みの陶器屋をのぞき、阪急百貨店に行く。布地屋さんにいいのがあつたけれどお金がない。何しろ石橋までのつもりで時計も持たず、普段着のまま。よそいきは頭だけ。布は買うなということかと諦めて、箕面経由で帰ろうとバスを待つていたら、直属の上司にばったり出くわした。何で休みの日に、こんな所で会わんならんの。並んで腰かけて途中まで一緒。『行きはよいよい帰りはこわい』とはこのことか。

恒例コーラスOB新年会の日。カルタ取りのためにはよく寝ておかなくては、と思
い過ぎたのがあだか、少ししか眠れなくて、もう今日はあかん、と諦めた。でも出席
はしたい。痛い頭をそろそろと運んで、大分遅れて会場に着く。

しかしみんなの「トラックにぶつかって、トラックをこわしたんやって？」とか
「狂った頭がまともになったでしょ」とかの手荒い出迎えを受けて応酬している
間に頭痛はましになり、いつものようにお酒は一滴も飲まないで、飲んだ人と同じ
ように騒いでした。

さてカルタ取りの方は、目指す強敵二人には三枚と四枚の差で負けてしまった。そ
れで「頭のテストやから、一度だけでいいから作者名から読むのをやって」と三拝九
拝してやってもらった。

名前を読んでも一秒ほどのことから、はじめのうちは普通と変らない。しかし枚
数が減った時にはその一秒の差は大きく、歌までいかないうちに札が取れて、相手の
歯ぎしりの音が聞こえた。

六年目

二月

寮母になつて丸五年が過ぎた。五十の坂を越えてからの就職だから、いやでも後がない、というのもあるけれど、私にしてはよく投げ出さないでやってきたなあとと思う。五年間のうち休んだのは八十五日。普通のお勤めの一年分にも足りない日数で、これはきつかった。

寮生に対する気持ちは大分變つてゐる。はじめは娘のいない私には珍しくもあり、娘達の言動を楽しみ、優しく接していたが、親の立場になつてみれば、男と深く付き合つては次々と相手を変える娘はいやだし、責任を果たさず、自分だけに甘くて横着で、これでは社会で女はだめだと言われても仕方がない、と同性として残念なこともあるし、かつての自分の娘心を思い出しても役に立たない。今や失望と苛立ちと諦めのごちゃまぜの中にいる。

会社は「結婚しても困らぬようにしつけてやってください」と言うけれど、しつけ

が要るのはいくら言っても聞かず、はじめからよくできているのは、向こうから「料理を教えて」などと言つて来て、何も言うことはない。ただしこんなのはごく僅かであり、大抵は、こんなので大丈夫かな、と思いながら送り出してしまわなければならない。

私は前の寮母さんのやり方を白い目で見て、決してあんなにはならないでおこう、と思つていたけれど、この頃段々彼女の気持ち判つてきた。彼女も私のやり方を否定していたから、今判つた、と言えどどんな顔をするだろうか。

これから、止むを得ない軌道修正はして、そして自分の心身を守ることに重きを置いて、規休以外にも大きな顔して休もう、と思つてゐる。

○日

門限破りの常習者がいる。遅れるという連絡もしないから、一度に二回の罰がつく。その罰の日をボードに書き並べ、済んだら／で消してまた日を書き加えるから余白がなくなつてしまふ。済めば拭き消せばよいではないか。私には楽しんでゐるのかとさえ思えるので「どういうつもり？ 恥をさらして面白いの？ とにかく、寮にいる限りは規則を守りなさいよ」と言つた。でもまだ遅れは続く。次は「あなたには寮にい

るのなら規則を守れという言い方では分らないようね。規則を守れないのなら寮を出なさいということよ」と言った。それでようやくましになった。

このことを寮長が「彼女なりに努力しているようですから」と言いに来た。かばっているつもりか？ 彼女なりにとはどういうことよ。この寮長も自分で「なりたい」と言つてなつたくせに、寮長らしいことは何もしない。いつも私が催促してから事を始めるのだ。これもあるから私はムツとして「何でも言われなければできないのは情けないじゃないの」と両方にかけて言つたのだけれど、寮長は「ほんとにそうですねえ」と他人事のような顔をしている。蛙のつらに水、というところ。「あなたもよ」とはつきり言わないと分からないらしい。

私は、後味が悪いから面と向かつて怒らなかつたけれど、いらいらしている方が神経に悪いから、今年から方針を変えて怒ることにした。といって、まだ怒鳴ることはできない。でも見ていなさい。そのうち怒鳴りまくつてやるから。

三月

月末に新社員が十四人入寮することになった。そのうち何人かは研修が終れば東京に行くけれど、寮生が倍增することは確かである。去年の試験時に泊まりに来なかったから、もう増えないのかと思っていたら、いきなり十四人と言われてびっくりしてしまった。

かつて二十五人の時もあったから、炊事などはやれないことはないけれど、生活上の指導は、在寮生にしっかりしたのがないから孤軍奮闘となるだろう。今までとやり方を変えて、ここは一つこわもてでいかねばならない。と、弱気を押しこんで待っている。

○日

石橋に「個人レッスンはしない、コンクールには出ない、お揃いのドレスは着ない、

三か月で顔つきが変る」のキャッチフレーズを持つコーラス団があるのを知った。

心ならずも閉じこもって「無言の行」に近いことをやっているせいで顔つきの悪くなった私には、ぴったりのところではないか。そこに行けば外気を吸えて、声も出せて、その上顔つきもよくなれば言うことはない、のであるけれども、それには一か所、大きな関所を越えなければならぬ。

社内の異動は終わってしまった。異動の季節が来る度に、こちこちの上司殿が栄転になるのを、ひたすら願っているのだけれど、今度もまた泡と消えた。大きな関所とはこのところ。

人をよく働かそうと思えば、適当に遊ばせるのも必要ではないだろうか。特に私のような、休んだあくる日には「さあ働こう」と思う単純な人間には効果的なのに、解っていない。

五年の間、機会があれば言って、最近ようやく「会社に電話をかけてから」の条件つき外出許可を得た。だから、電話をかけて歌いに行けばよい、と言われるかも知れないが、二十日に一度の休みで、夜も仕事がある職場では、その間に適当な息抜きが必要なことを、根本から解ってもらいたいのだ。

ここで笑ってしまった。元亭主に対して、私は別の意味だけれど、「人権を認め

よ」と旗を振っていたのだった。どうしてこう拘束される所に縁があるのだろうか。そしてしつこく抵抗している。

元亭の所は無理やり抜け出した。しかしここは抜け出すわけにはいかないし、話合いをしたい。果たして成るか、この難関突破。

○日

本が山ほど積んである。つん読の趣味はないけれど、月刊の小説誌は前のを読み終つてなくても、買っておかないとなくなるし、本屋をのぞいたら何か買ってしまうから増えるばかり。貧血になると寝てしまうのが原因でもある。

積んだ本を見て、前ならまだあれだけ読むものがある、と豊かな気持ちになったのに、この頃は追われる気分で、つん読となった。それなら急いで買わなくてもいい本は山が崩れてから買えばよいものを、つい手を出してしまう。

布地と陶器を売る店を私は毒屋と言っているけれど、本屋も毒屋となりつつあり、当分近づかない方がよさそうだ。

四月

○日

恒例の「ほのぼのキャンペーン」を一月に提出した。それがいつもならもっと早く結果が判るのに、今年は忘れた頃に返って来た。一次審査を通過して二次まで行ったからであつた。

私の提案は「古着でカーテンを」の題で、デザインが変つたために破棄される女子社員のユニフォームを、寮のカーテンに更生したいからいただけなのか、というものである。すでに寮生からもらつたもので一枚作っていたから、写真に撮り、布地見本をつけて出した。

しかしこれには、元のカーテンがもう朽ちているから「新調してほしい」と機会がある度に言っているのに叶えられない不満と皮肉をこめたつもりだったのに、私の書き方は優し過ぎたのか。審査員はその含みを見逃がし、単純に「いい提案です」とほ

めて、本店では一番の六十五点、採用、賞金千円となった。書類だけでなく、電話もかかって来た。横書きが苦手なのでワープロで打ったのも話題となった。

でもそんな目的はずれたところで感心してもらったら困るんだけだな。そしてほんとに「カーテン用にどうぞ」とユニフォームが山ほど届いたらどうしよう。入口にぶら下げるのだけで五着分の両身頃、両袖の二十枚を接ぎ合わせた。窓用となると何着分いることやら。部屋は十八ある。

○日

新入社員が大挙入寮して、覚悟はしていたものの、仕事は二倍以上となり、氣を使うこともあつてもうくたきただ。人間が来る前に荷物が届き、寮を見に来る親があり、それもいつ、と決まっていけないから、ひたすら待つ日々があつた。そして研修中は食事を作つてやりたいから、と休まなかったら、食欲がなくなり熱が出た。もうこの頃は鬼の霍乱などとは言えない。ためがなくすぐプツンと切れる、もろいことこの上なし。

○日

高卒の五人が研修を終え、九州、北陸などそれぞれの任地に帰ったので一息つく。まだ九人残っているが、一日休み、友人の歌う、サリエリのレクイエムを聴きに行った。サリエリはモーツアルトの陰にかくれて有名にならず不運な人であるが、ベートーベン、シューベルト、リストの先生であり、ハイドンとは友人だったとのこと。音楽も素晴らしかった。私はモーツアルトのレクイエムは聴き過ぎたからか、サリエリの方が荘厳に聴こえた。

でも待望の外出だけれど、お行儀の悪い人間の多さにへきえきして、後に続く別の演奏会は放棄して帰って来てしまった。これは私の神経のせいだけではない。聴衆のマナーが悪い。第一、昼の音楽会に遅れて来る人がいる。それを途中で入場させるから、演奏が中断される。れっきとしたシンフォニーホールである。昔は、遅れたら一曲終るまで入れなかったはずだ。途中で入れる癖をつけるから、平気で遅れて来るのではないだろうか。ホール側に文句を言いたかったけれど、その元気はない。私は生演奏の、ホールの雰囲気が好きだったけれども、もうオーデイオで聴く方がいいのかも、と、ふと思う。

去年の春に仙台へ帰った元寮生のワダさんから電話がかかった。いきなり「おばさん、お金持ちよね」ときた。

私「お金持ちなら、おばさんはやってません！」

ワ「またア。とにかくワダのお願い聞いてほしい」（この子は自分のことを名字で言う）

私「何か知らんけど、お金のいることなんやね」

ワ「それと十月九日十日はワダのためにとっておいてねっ。ねっ」

私「十月に何があるの。結論をはよ言いなさいよ」

ワ「へへ。ワダは結婚します」

私「えっ、結婚で……相手は男やろね。今日はエイプリルフルではないし……」

私は驚きのあまり、つい言ってしまった。彼女は男の子のような女の子で、というより今の男より男らしい子なのであるから。それが結婚、それも恋愛結婚だと。これは何が何でも相手の男の顔を見なければならぬ。

しかし、結婚披露宴は、私は別れているから招かれざる客であり、もともと白々しくていやだから出席する気は全くない。この間も元寮生の披露宴への招待と、スピーチをお願いしますと言われて、私は招待に対するお礼と、お断りと、別にスピーチ用の手紙をお祝いと一緒に送って、堪忍してもらったところであった。

ワダさんは「おばさんが別れていようと関係ない。来てもらわないとワダが困るのだから」と食い下がる。お母さんも電話口に出られて「是非」と言われた。そして彼女は「結婚後は東京に住むけれど、二人の生まれ故郷が北海道だから、式も披露宴も札幌にする、だからおばさんも札幌に来て」と言う。

「二人の」だなんて、どんな顔して言ってるのかと思って私は笑ってしまった。とにかくその「二人」を並べて見てみたい。男は熊のような人か、でなかったら、ワダが尻に敷いたらつぶれそうな人か、どっちだろう。

でも案外彼女は普通の女の子になっているのかも知れない。寮では、私が部屋をノックしたら、寮生だと思って「おう！ 入れよ」なんて言っていたのだけだ。

五月

○日

今年の新入社員で研修の間来ていた東京の大学卒業生はひどかった。生活の基本的なことが全くできない。五人揃ってである。言っても効き目はなく、言い疲れてもう後始末は在寮生が私が出した。

寮の食事は毎日全員欠食である。こんな貧しいものは食えるか、というところだろう。入寮した日に寮則を渡し「出る時は返してね」と言ったのに、五人中四人は返さない。どこに入ってるか判らないから後で送るとのことであつた。読んだのかどうかも怪しい。部屋の鍵も見つからないのが一人いた。

先に研修を終えた高卒生は鍵も寮則も返し、きちんと挨拶をして帰って行つた。大卒生がもしも「お世話になりました」とでも言えば、私は「食事もしなかつたし、何もお世話はしていませんよ」と皮肉を言つてやろうかしらと思つていたけれど、彼

女達は「時間がない」とバタバタと出て行ってしまった。私は口あんぐり。口もしまらぬまま、残した荷物を送り、部屋を片付けた。ゴミも置いたままであった。

在寮生も「何やのん、あの人達は」と怒っていたし、会社でも評判はよくなかったようだ。本店のO氏から電話がかかり「今年の大卒の新入生に対して何か言いたいことありますか」と言われた。彼女達が出したレポートには「寮生活は門限はあるし、掃除当番はあるしつまらない。東京組は東京で研修をやったらどうか、そうしたら自宅から通えるのに」と書いてあったそうである。私はよくぞ聞いてくださいましたとばかりみんな話し「高卒より質は落ちます。東京の子はあんなのか、大学に行ったところがマイナスか、とにかくあのままでは社会へは出られないでしょう」と言つてようやく口を閉じた。それでも寮則と鍵のことは、O氏が「東京本社を通じて返すようにしましう」と言われたけれど「彼女達が送りますと言ったのだから、それを信じてもう少し待つてみます」と断った。

しかし一か月経つても送つて来ない。もう自発的に返す気はないらしい。鍵はないと困る。O氏に「ご手配をお願いします」と頼んだ。

四年間、何を学んだのだろう。恥をかくことだけを覚えたのか。プライドがあるのなら、かえって批判されないようにするべき、と私は思うけれど。男女雇用機会均等

法が施行され、折角差別がなくなりかけているのだから「しっかりしてよ」と言いたい。そして「さすが大卒だけのことはある」と言わせてよ。

○日

久しぶりに碁会のお誘いがかかった。メンバーの中の、ご両親が亡くなられて猫だけが住んでいる家ですとのこと、碁会所でもないし気は楽である。それはよいとして「お茶くみしてな」と言うから、私はむかつて「そんなものせえへんよ」と二回も念押しをした。

しかし女性陣は欠席の様子、とすればやっぱりなあ。それに「してな」と言われたら「いやや」と言うけれど、するに決まっている。それならいつそ先手を取り、からめ手でいけば殺される（碁盤上で）こともないかも知れない。口で負かそうと勝ちは勝ちであるから優しくして、胃袋もねらってみるか。

おにぎりの山と焼豚茹で卵をモチーフに、バックの色は野菜でつけたお弁当を用意した。これでそんなに働かなくてもすむだろう。

六人の男達はお酒はしっかりとご持参で、呑む打つを同時にやっていた。私は「カモが来たよ、ネギしょって」と自分から言う。「よう来てくれたなあ」は「よく食べ

物を持って来てくれたなあ」だと解釈する。

からめ手という手筋は碁にはなかったらしくて、ほんとにカモとなり、私は散歩に出た。判らずに来たけれど、どうやら我が母校に近いらしいのだ。でも町は変り果てていて長年通った学校なのに人に尋ねながら行く。

たどり着いた母校は、四十年前に私達が土を運んだ築山と、玄関はそのまま残っていた。懐かしさと年をとり過ぎた悲しさがわいて、しばらく立っていた。

家に帰って指導碁を打ってもらい、コーラス仲間にかえって歌を歌い、変化に富んだ一日は終った。

六月

○日

最近、欠食する寮生が多過ぎる。給料前には食べるが、お金が入ったらとたんにはほとんどが欠食する。ただし卵料理や洋風肉料理の時は別である。つまり好ききらいがあつて、お金のない時は我慢して食べるのだ。私は料理だけは手を抜いていないつもりだから気が悪い。そして給食屋の関係で三人以下はできないというのも、断るのはいつも同じ顔ぶれになるから気の毒である。二十五人は多いけれど、十三人分なら私にとつて文句なしの許容量であるから、さあござれ、と思つてゐるのに、欠食のサインがずらりと並んでいるのを見ると拍子抜けがする。

そこで、メニュー表の下に「好ききらいを言わず、栄養のバランスのとれた寮の食事をして、健康な体になろう!」と書いた。

以前にも似たようなことをしたし、効果はあんまり期待していなかったが、いつも

なら張り出すなり乱暴な字がすぐ並ぶのに、この週の欠食サインは締め切り間際になつてからで、少し減り、字も小さかった。ちよつとは私の気持ちを察したか。いやそんなしおらしいタマ達ではない。でも、まあよし、とした。私は単純で、ほんとに甘い。

○日

寮生二人と京都に東山魁夷展を観に行つた。十年目のN子と新入生のM子二人が京都へ行くのは知っていた。鳥取から来たM子は、京都は修学旅行の時だけ、と言つたから「Nさんに案内してもらつたらいいわ」と言っていたが、出かける間際にN子が「魁夷展に行くけど、おばさんも行きませんか？」と言つた。私は「え、あ、そう、それなら」で、仕度もそこそこに抜けて出た。

会社には「私用で二、三時間外出します」と電話をかけた。三時間で帰れるはずはないけれど、一応知らせておけば後ろめたさを感じなくてすむという、神経のための形だけの手続きである。

N子が、京阪特急の隅の席を四人掛けにして確保したのは、お菓子を食べ、ジュースを飲むためであつた。まるで子供の遠足気分である。私にもすすめてくれたが、私

は電車の中で物を食べることはできないから見ていた。しかし、横を見たらまだうわてがいた。男女二人連れがお弁当を食べているのであった。

N子とM子は「お腹がふくれたら眠くなつた」と言つて眠つてしまった。私は眠ることもできない。二人の寝顔を見ながらつらつらと考える。今はもうこれが普通で、私が古いのか、といつて、私でも旅行に出たら駅弁は食べるのだから、近郊の電車内というのにこだわっているだけかも知れない。そして二人は、帰りの電車の中でも眠っていたが、疲労をいやし、上手な生き方をしているとも言える。私は気休めの電話を会社にかけて、私もタフになつたもんだ、と思つていたが、神経を張りつめた生活をして体をいためている。もう少し緩める必要があるのではないだろうか。

さて、東山魁夷の絵はどれも素晴らしくて、という陳腐な言葉では不本意だけれど、どう言えばよいかわからない。見るなり涙の出そうなのがあつて、画題を見たら「郷愁」。解説を読むと、魁夷の心の中にあるふるさとのイメージとのことであつたが、私はこの景色を知っている。昔歩いた信州の中にあつた。しかし図録によると六年前の展覧会にも出品されていたそうだけれど、私の記憶に残っていない。これはどういうわけか。

例によつて、へ理屈をひつつけて納得した。この景色は、昔の思い出ではなくて、

あの世へ行く時の景色なのだ。川もあることだし、遠い昔の思い出よりも、近い未来の方が強いから、それで懐かしい気がするのだろうと。

それはともかくとして、どれも、仕事を頭の隅に置いて見る絵ではなかった。もう一度きちんと休みをとって観に来よう、と楽しみを預けて帰って来た。

十日後に美術館に預けた物を取りに行き、ついでに、地下鉄が南へ伸びたから、行くのに便利になった城南宮（鳥羽離宮）の「源氏物語の花の庭」を観てきた。ここは「曲水の宴」が行われる所で、庭にはきれいな遣り水が流れていた。今の季節は花が少なくて、ここにまた別の物を置いてくることになった。

○日

草取りを兼ねてドクダミを採集する。去年は外壁のペンキ塗りで取っていなかった。今年、と花の咲くのを待っていた。おとしは五百本あったから、今年はこれなら千本はあるだろうと見当をつけた。

腰をいたわりつつ、日光を避けて、で二日かかる。千八十本あった。私の勘もまんざらではない、と、しょうもないことで嬉しい。

ドクダミの花は、日本では見向きされないが、ヨーロッパでは教会に植えられ、十字架の花として観賞されるのである。見れば可愛い花だけれど、あの匂いはいただけない。でもきつと、あれほどのことなら深い意味があるに違いない。いつか、雑草の先生に聞いてみよう。

しかしいやな匂いは一日干せばなくなり、いい香りがしてくる。干すのに、日陰を求めて出したり入れたりするのがめんどくさくなったので、大体乾いたところで、切つてポリ袋に乾燥剤と一緒に入れた。

これが、意外とドラ息子 of 熱冷ましに効くのである。他に、飲ませたらシャンとする薬草はないだろうか。そしたら大汗かいても取りに行くのだけれど。

七月

○日

とうとう、クスノキは切られた。私の「切らなくてすむ最善案」提出の効き目なく、残念至極。

会社はこの際、近所迷惑の木々をなくし、駐車場にすれば一石二鳥だと考えたらしい。掃除をまめにやっていたら（といっても私の手を離れて、社宅住人の責任であるけれど）会社もそんな気を起こさなかっただろうから心が残る。

これに関していろいろあった。私は、クスノキのことばかり考えていて、駐車場にすると聞いても、駐車場になるのか、で申し訳ないだったけれども、寮生が三人、三人とも同じことを聞いた。曰く「駐車場にして、貸して、儲けるの？」と。私はとにかくが回らなかった。なるほどなあ。まだ工事中で、何台入るのか判らないけれど、社宅用ではなさそうだ。

駐車場になると聞いて、お金と結びつける寮生がハシコイのか、それが普通で私がトロクサイのか、どっちにしろ両方に感心してしまった。

それと、近所の人から電話がかかった。曰く「駐車場にするそうだけれど、塀を取って見通しをよくしないと事故が起きますよ。家を建て替えるときなどは、元の場所より引っこめるのが常識なのだから、カーブしている塀を真つすぐにしなさい。木を切っているから、たたりで人身事故になりますよ」。

うるさいな、もう。木があればあつたで文句を言い、切ったら切つたでまたイチヤモン。それも会社や工事場横の住宅に言わず、寮に言ってくるなんて。私にしたら、泣きつらに蜂、である。私やもう知りません。

○日

「結婚式に来てね、来てくれないとワダが困るのだから」と言っていたワダさんが電話で「結婚式はキャンセルした」と言つて来た。変りないような声だったので私は「も早捨てられたのか」と冗談を言つたけれど、のつてこない。わけを聞けば、お母さんが腫瘍の手術をすることになったそうで、予後を見てからになったらしい。今はお勤めも辞めて看病のため病院通いをしているとのことであつた。元氣印のワダさんだ

けれど、心痛はいかばかりか。

どうしてこういうことになるのかなあ、神サマ。

思えば「九州に帰って結婚する（相手を見つける）」と言ったI子も、帰ってすぐ家が類焼し、間もなくお父さんが急病で亡くなられた。結婚せず、今は家業を彼女が主になってやっているようだ。

I子は「私が帰ったことは、家が大変な時に居合わせたし、父の死に目にも会えたのだから、幸せだった」と言っていたが、それを言うまでの、打撃に向かつて耐えているI子を思ったらかわいそうになる。

ワダさんもしっかりした子だけれど、これ以上悪い状況にならないよう、今はお母さんの手術が成功するように祈っているしかない。

○日

毎年、扇風機を買いたい、と思いつながら、デザインが気に入らない、で見送つてばかりいた。風通しの悪い部屋に、ちよつと風がほしい。

電器店をのぞいて、今年もあかなあ、と諦めていたが、去年、寮生の部屋にクーラーがついた時に取り外した扇風機があるのを思い出した。

物置に行つて、十ほどある中のよさそうなのを持つて来る。これは壁掛け式で、シンプルなものである。どうしてこれに早く気がつかなかったのだろう。工事は簡単、柱に器具をつけて、それに引っかければよい。

場所を取らず、見えなくて、頭の上から風を送つて来る。首も振る。

○日

事故の後遺症か、年のせいか、どちらか証明はできないけれど、左手が少し不自由なのは確かなので、使わずにいてもつとだめになつても困るし、と思つてまともなものを縫うことにした。

まずお友達のためのブラウスを縫つてみる。人のものを手慣らしに使うのは失礼なようではあるけれど、自分のものではごまかすから、これに限る。

やつてみたら、もたつきは少なかったが、手の心配よりも頭の心配をしなければならなかったようだ。右袖を左につけていた。やり直しの時は、右！左！と声に出して確認する。右をつけたから残りは左に決まつているわけではない。裏表逆にして、右袖を二つ作っているかも知れないのだから。そして、大声を出しては自分でその状況状態がおかしくて笑つてしまった。人が聞けば、不気味だろうなあ。

ともあれ、途中のことを抜いて合格と認定、同じ型で自分用を作る。しかしたか
をくくつて気が緩んだか、やつぱり頭の問題か、片袖の傾きを間違えていた。でもも
うやり直す気はなくて、そのまま着ている。

○日

お友達が「クモの子がかえるのを見たけど『クモの子を散らす』という言葉通りね
え」と言ったので「私も見たことある、ほんとにその通りね」と言っていた。

その後間もなく、ロビーの天井が何やら汚れている。この間掃除したばかりなのに。
よく見ると小さなクモが十センチほどの間隔で点々と巣を張っているのであった。

いつか、そう遠くない過去に『クモの子を散らす』日があったのだ。その数は二十か、
いや三十はあった。箒を逆さに天井を掃き、外で振り、を繰り返す。しかし、ロビー
は白いから見えたけれど、見えにくい所にまだどれほどいるのやら。外で見る分には
可愛いけれど、あーあ。

八月

○日

ドイツのアウトグスブルクから来たアニタが入寮した。尼崎ロータリークラブの奨学生で、はじめの一か月は日本語の勉強をし、あと六か月はM社で服飾の仕事をするとのことである。

ドイツ人は大きいだろうなと思っていたが、身長は寮一番となったけれど、在寮生にも背の高いのがいてダントツではなく、私とは十センチの違いにとどまった。

ブロンドで青い目の二十三歳。それがやっぱり日本語がほとんどだめで、英語は話せるのだけれど、日本人には日本語でないとと思うのか、もう苦心惨憺の様子で言ってくれるのだが、解らない。それで私は英語で言ってほしい、と言ってしまった。英語のだめな私が英語を希望するのだから皮肉な話。でもそれで少し楽になった。

一番気にかかっていた、お風呂にみんなと一緒に入ることについては、あっさり

OKで、去年のフランス人のように、単独で入れる時を見つけてやる手間が省ける。ところが、私が湯船にお湯をためながらシャワーにかかっていたら、彼女もやって来て、二人で入浴する羽目になった。もう私は慌てふためいて、洗ったのかどうか、のうちに出てしまっていた。みんなとよう入らないのは私であった。そして一度も寮生と一緒に入ったことがないのに、これも皮肉な話。

彼女は自室から浴室までの往復はバスタオルを巻いているだけで、寮生の言葉を借りると「わア、さすがガイジン」である。も一つさすがなのは、カンカン照りの屋上で日光浴することだ。この真夏の太陽の下で、肩も足もむき出しのまま、本を読んでいる。私が日焼けは心配ないのかと聞いたら「ニジガスキデス」という答が返って来た。私が英語で聞いて、彼女が日本語で答えたのは大傑作。でもタイヨウかニッコウでしょ。めったに見えない虹なんかを教えたのは誰か。

○日

毎日新聞『みんな集合』欄にこんなのがあった。

まず「京都の皆様一言おわびを……」とあり「今年の葵祭が三十年ぶりに雨天順延となったのは、わたしたち雨一家のせいなのです。ほんとにごめんなさい」という

和歌山県新宮の人のものである。

みんなで初めて京都に行ったところ、はじめは小雨で、よかったね、と言っていたがすぐザアザア降りになったとのこと。雨女、雨男はあっても、雨一家は珍しく、おかしくて、そして気の毒になる。その人達はもう慣れっこだと書いていたけれど、かつて雨女だった私は少しも慣れず、何で！と空をにらんでいたものだ。

しかし、過去形で言えるように、私は遂に雨女、嵐を呼ぶ女は返上した。今年になってから休んだ十五回のうちの割合は十四〇一●。なんだかお相撲の成績みたいだけれど、十四勝一敗なら優勝かも知れず、これは異例のことである。去年まではほとんど雨か嵐であつた。それも、きのう晴れ、あした晴れ、で、休んだ今日だけ降るのであつた。

今年降られないわけは、冗談半分に「雨女交替！」と〇子の両手を叩いて移したのが効いているからだ。〇子はそんなもくろみとは知らず、私の求めに手を出して「いやア」と手を引つこめた時はすでに遅く、私に代わつて雨女となつた。そしてそのま間もなく退寮、結婚した。来た便りに「結婚式の日もばっちり雨でした」とあつた。

〇子がかawaiiそう？　いいえ、〇子の嫁ぎ先はスキー場の民宿で、雪がないと困るのだから、〇子が行つたために雪がよく降れば商売繁昌となるかも知れない。だから〇子は雨女の方がよくて、恨みはなく、私も助かるので双方めでたしなのである。

○日

六甲植物園に行く。去年、伊吹山のお花畑を見てから、にわかに昔よく見た「アルピン・フラワー」達に会いたくなつた。でももう本格的な登山はできないので、手近な所で少しだけ見て虫をおさえよう。

しかし行つてみたら、咲く時期があるものの、沢山の高山植物が揃つていた。今、本物の高山で見られるものは五・六月に咲いてしまい、秋の花には早過ぎて、ちょうど花の数が一番少ない時であつた。けれども不満はない。コマクサが二株残つていた。三十五年ぶりである。

コマクサを南アルプスで初めて見た時、感激より神秘さにじんとした。この高い山のがれきの間の花と葉の色、どこにそれを出すものを持つているのと聞いてみたかつた。他の花々にも驚いてばかりで、私がお花畑の中に座りこんでいる写真が今も手元にある。その時山上で出会つた大阪の蝶の会の人達と仲良くなり、その後もよくついて行つた。頂上を極めるための登山ではなく、蝶を探すためのお花畑が目的なのだから楽しかつた。

思い出をかかえ、来年もまたここに来よう。四月にはミズバショウ、五月はエーデ

ルワイス。

日差しはきつくても緑の木陰は涼しく香り、神経のいやされるのがわかる。カナカナが空を貫くように鳴いて、このままここにずっといたい。そうだ、いつかこのあたりにセカンドハウスを建てよう。ファーストハウスもままならぬのに、そういう気にさせる、山は大らかであった。

九月

○日

もうほとほといやになる。やってられないわ。どうしてこうなるのか。

私が声をかけても反応のない寮生がいるから当然会話は成り立たず、ゴキゲンがよければ話ができる。それが「おばさんは氣分にムラがあつて、話のできる時とできない時がある」となるのだ。氣分にムラがあるのはそつちでしようが。

私は外国語はだめ、と、はじめから内外に大声で言つてある。外国人と話をする時は、英単語を並べ、相手が理解してくれるのを待つか、みんなと「こう言うたらどうやろ」で言つてみて通じたら「通じたア」とみんな一緒に他愛なく喜んでゐる。それが「外国人が来た時に、インテリぶつて寮生をバカにした」となるのだ。どうしてよ。インテリぶるなんて、どこを押したら出て来るのか。私の一番しないことなのに。

掃除をさぼっていたら（これは事故後遺症の回復が遅れているせいで）「おばさん

は罰掃除を自分の受け持ちの所にして、門限破りの寮生にさせて自分はいない」となった。罰は寮生が決めたことで、私はタッチしていない。言うのなら、単純に「おぼさんは怠けている、悪い」と言えばよい。

私が情けないのは、それを本店総務のO氏が「寮生がこう言っているのですが」と言いに来たことである。加えて「神経質にブチブチ怒っていないで、もつとゆったりと寮生に接したらどうですか」とも言われた。私は怒ったことはない。規則を守らぬのが続いたら、規則は守りなさいとは言うけれど普通の言い方だ。

中傷をした寮生は判っている。いつか、あまりの態度の悪さにたまりかねて注意をしたら、つかつかって来た子である。それでもその後は少しよくなって、私の言ったことが効いたかと思っていたが、恨みが残っていたのだろう。もちろん、逆恨みの形で。

しかし、他に寮生は十二人いる。O氏がそのうちの一人にでも確かめさえしたら、事実反していることは判ったはずだ。どうひねくれて考えたところで、そこまでのことは出るはずがないという自信は私にある。私はムラなく平等に声をかけているし、インテリぶつてもいないし、寮生をバカにした覚えはないし、罰も決めていない。

何も知らない人が私の顔を見て「冷たそうな人だ」と思うのなら仕方ない。私はそう見えるらしいから。でも違う。ついでに「お酒を一升でも飲めそう」とよく言われ

るけれど、私はビールを猪口一杯飲んだだけで頭がガンガン、胸がドキドキして苦しくなる。しかし一見そう見えても一緒にいれば事実が証明する。O氏とも何回か会ったことがあるのに、一寮生の言うことで、さもありなん、と思われたとしたら情けない。人事に関する人は、人を見る目が特に優れているのだらうと思っていたけれど、これは私が浅はかだったらしい。

しばらく氣力をなくし、呆然としていたが、寮会を開いて、O氏から言われたことを話し、心外なことだけれど、掃除をさぼったのは確かだから、ごめんなさいと謝った。「そんなこと思いもしなかった」「お婆さんが、みんながそう思っていると思われるのは困る」「O氏がおかしいわ」と言う声が出て、大勢は私に同情的であった。でも私の気持ちはすつきりしていない。言った寮生を探し出して糾明したわけでなし、言われたことは残っている。言われたことのない人には解らないだらうけれど、私は谷底につき落とされて動けない状態にある。

寮会は、罰掃除はもう場所を変えてと言って私は座をはずしたが、一時間ほどわいわい言っていて決まったのは、罰の他に二か月に一度の割でお婆さんも一緒に一杯やる会をもち、カラオケをやる、ということであった。何かあつたら「飲もか」となる彼女達。

また、思いもかけない展開に私は困り果てている。お酒もカラオケも苦手の私。これに参加しなかったら、また「冷たい」「……ぶっている」となるのだろうか。

十月

プツン。これはかなり前の流行語だけれどよくできている。今の私のやる気の切れた状態にぴったり当てはまる。事の起こった直後はまだ元気があって、どうしてやるうか、と思っていたが、もうそれもなくなった。

また総務の人が「行く」と連絡してきたので（前とは別の人）まだ何かあるのか、誰か他に雇いたい人がいて、私が辞めると言い出すのを待っているなら、そんな回りとどいことをせず、はつきりと言って下さい、と言ってやろう、と待ち構えていたら、電気部を連れて、寮の手入れ箇所の検査ということであった。

それで私から「O氏から注意をされたけれど、私には身に覚えのないことで……」と言いかけたら、知っておられて「『一方的な訴えで言いに行くな』と言うんです」と。何やらもうガツクリ。

つまりはO氏の勇み足のようであつたけれど、それで済むのかと言いたかった。私

の人格にもかかわるようなことをわざわざ言いに来て、私が抗議しなければ、それで終らせるつもりなのか。

しかし、食らいつくほどの相手ではないから（会社そのものも）もう放っておくことにした。そして仕事は精一杯にはやっていない。今のところ、やる気がどこかへさ迷い出てしまっているからでもあるけれど、これで文句を言われても材料はあるのだから、谷底に落ちなくてもすむだろうという自衛策とも言える。

中傷にもめげず、劣悪な労働条件にも耐えて、黙々とひたすら職務を全うするとう、サウイウヒトニワタシハナレナイ。

十二月

○日

C 総務のK氏が来られた。この人は寮関係の元締めで、私のしめつけ係でもある人。この前、あまりのしんどさに、せめて十日に一度休みたい、と言ったら「休んでもいいが、代わりに来てくれる人を見つけないさい」と言われ、そう簡単に適任者が見つかるわけもなし、つまりは休めなくて過ぎていたのだった。

来られた理由は「寮の雰囲気を変えようと思って……」私は先日の中傷以来いじけているから「それは私のことでしょうか」と言う。K氏はきょとんとしておられる。違ったらしい。私「いえ、Oさんから身に覚えのないことでご注意を受けましたから、またそれかと思ひまして」K氏「そんなことは聞いてないよ、何を言うんだね」そして「Oさんの言ったことは気にせんでよろしい」（気にせんでよろしいと言われたって、私はもうさんざん気にしてしまっているから遅いワ）

で、雰囲気とは文字通りのもので、食堂の一隅にソファを置き、鉢植えも置いて、やわらかい感じにしたい、とのことだった。

寮生が植物を見て喜ぶとも思えないし、水やり掃除など私の手間がふえるだけだと思ふけれど、これこそ本気で気にすることはないのだ。こちらからこうしてほしいと言つてもなかなかしてもらえぬ代わり、こうしようと言われてもすぐにはならないのだから。

そしてこのプランは別のことでおじゃんになった。急に社内の仕事の分担が變つて、K氏は寮とは関係がなくなり、H総務のF氏に移つたのである。

私は、あの、こちこちの、しめつけのK氏の栄転を、毎年の異動期には心から祈つていたのだけれど、こんな形で離れることになろうとは。

急に目の上が開けた。それとうまいぐあいに、とことん態度の悪い寮生二人が相次いで退寮することになった。このうちの一人は中傷をした子である。あんなうそを並べて、あとの自分のことは考えなかつたのか、と不思議だつたけれど、これで解つた。やめる前だから言えたのだろう。

とりあえずお赤飯を炊き、代役なし、気がねなしの休みをとろう、と思つている。

一月

私のお正月は例によって寮の留守番を兼ねて掃除に明け暮れ、お正月気分も、気持ちを新しくする状態にもなかったけれど、世間の鏡開きの日、念願のコーラス団に入れたもらった。

練習場は自転車で五分ほどの所で、メンバーは中年以上四十人くらい。中には四年代生きてると言う人あり、ママさんコーラスとはとても言えない。しかし歌う曲はかなり高度のもので、先生の「わたしはうれしがりで、新しい曲が好きやから」の方針のようだ。

はじめ「今日は見学して、よかつたら入りなさい」と言われたけれど、私はもう長い間チャンスをねらっていたのだから「ぜひ今日から入れてください」と椅子を並べるのも手伝った。

ところが「新しい人は一番前！」と言われてギョッ。音名で歌うのなんか久しくやつ

てないから、かなんなアと思いながら前へ座って、でもハ調とニ調だったので助かった。

先生はきれいなアルトの活発な人で、私が「少々神経がイカレてる」と言ったら「そんな人にはうってつけの所やから、休まずにいらっしゃい」と言われ、コーヒーを飲みにも誘ってくださったけれど、私は抜けて出て来ているから走って帰った。

出た時に限ってなんかある。この時もぼつちり本社のF氏から電話がかかっていたらしく、午後になって「行くつもりだったけどあしたにします」と言ってこられた。

F氏が来られた時に私は「毎週一回コーラスに行きます」と言った。「行きたいのですが」「行かせてください」なんて言っていたら今まで通りになるから、強気で言うてみた。ところがF氏は前のコチコチ氏とは違って「出てはいけないと言うのはおかしい」と言う人で、それだけで私の神経は元に戻りそう。コーラスの先生は「自閉症でも治る」と言われたけれど、私のはいわば「他閉症」なのだから出してもらえれば簡単に治るだろう。

年号が変わり、直属の上司が変わり、私はおおっぴらに歌えるようになり、ちよつとずつとして、気持ちを変えてできるだけがんばろうと思えるようになった。



五月山公園の眼下を流れる猪名川。遠景は六甲山系（1985年。→p.174）



寮の食堂で歓送パーティ（1990年）

七年目

三月

ドイツから来ていたアニタが帰国した。これまで韓国、フランス、ドイツの外国人が来たが、このドイツ人ほど愛国心に満ちて、日本に対し文句たらたらの人はいなかった。

まだカタコトしか話せない時から「水がくさい。売っている水は高い。ビールもヨーグルトもおいしくない。りんごはもう食べたくない。ドイツへ帰ってから食べる。タバコは健康に悪いからドイツ人はあまり吸わない。日本人が一番よく吸う」など顔をしかめて言う。

寮生達は「池田の水はおいしいし、りんごも秋になればおいしいのが出るよ」と言っていたけれど、彼女はがんこに自説をまげないで、それも言いまくるのだから、寮生達は「そんならドイツへ帰ったらいいわ」と言つて、相手にしなくなった。

彼女は京都見物に行つてあちこちまわり、金閣寺へ着いたのが四時半で、四時半閉

門の規則を守られて入れなかったらしい。私が京都の印象を聞いたら、「おもしろくなかった」の返事で、わけを聞けば右のことがあったからで、つまりはそれひとつでおもしろくなかった、となるらしい。それに似たのは、暮からお正月にかけて会社の人の家へ泊まりに行つて、三日に風邪をひき、改源をもらつてのんだら薬疹が出て、一日早く歸つて来た。そして「お正月はおもしろくなかった」のひとつであった。ひとつのことが全体をぶちこわすことがあるにしても、泊めた人はそれ以前に、日本のお正月を楽しませようといろんなことをしてやつたに違いないのに、気の毒な気がする。

この治療代が千九百円で、健康保険がないにしては安いと言つたが、彼女は「高い、高い」とまた顔をしかめて、ドイツへ歸つたらどこから返してもらふとのことであつた。

そりゃ日本の物価は高いかもしれない。けれども彼女の月収は手取り二十万円であつた。他の寮生の倍ほどの収入があるのだから見合つていたのではないかしら。

ある時、よその会社を見学することになり、八時半に寮を出たが、九時過ぎに案内してくれる人から「八時半の約束だけれど来ない」と電話がかかつてきた。これは彼女のミスで、歸つた時に私が「八時半の約束ではなかったの？」と聞いたら、はじめ

て気がついて、ひたいをおさえて「まちがっていた」と言うので「一時間も待たせたのだからごめんなさいと言ったら？」とすすめた。しかし「見学に行った会社はよくなかったからいい」と。

洋の東西を問わず若いモンはこんな考え方ができるのか、国民性なのか知らないけれどあきれてしまう。私はわが寮生なら叱るところだけれど、彼女に言つても、がんこに自分の思いを通すに決まっているから、もうひっこんだ。愛国心があるのなら、もつとドイツ人の印象をよくすべきと思うのに矛盾している。

私が感心したのは、日本語が上手になったことくらいで、でもその上手な日本語で日本の不満を聞いていると「働けど働けどわが暮らし楽にならず」と思い、楽に暮らせる国はないものかと思つている私がむつとしてしまうのはおかしかった。

結局アニタは七か月余りいて、私をドイツ人ぎらいにして帰つて行つた。

四月

ささやかな旅の記録。札幌の町を歩き、元寮生の結婚披露宴に出て、三鷹市へ行き一泊、武蔵野をサイクリングし、布地を仕入れ、友人としゃべり、映画を観た。寮を出て帰るまでちょうど四十時間。ふだんはせいぜい三キロメートル以内をうろうろするしかない私にとっては驚異的な行動であった。

折角北海道まで行くのだからと思うのに、四、五日どころか二日続きの休暇も許されるかどうかあぶない。幸い二日前に開いた寮会へ、総務氏がビールをご持参になり、ゴキゲンで帰られたので、その前のどさくさまぎれに届けを出してまんまとサインをせしめた。

札幌へは早く着くから、披露宴があるホテルの前の北大植物園へ行こうと思っていた。しかし植物園のホテル側の角に「正門はあちら」と矢印があり、かなりの距離を歩いて正門へたどり着いたら、「冬期休園中。ただし温室は入れます」そして「温室

はあちら」の矢印。温室前へ行けば今度は「本日休み」の札がかかっていた。

戸をけりたかったけれど、はしたないから思いとどまり、しばらく歩いていたら金網ごしにミズバショウが見えたので、それであきらめた。

でもどうしてはじめの所に休園中と書いてなかったのだろう。（温室の休日も）私だって冬は閉園だろうと思ひ、空港で植物園の案内書を立ち読みしたが、どれにも出ていなかった。細かくないところが北海道的なのか、北海道の四月は冬で、日曜は休日というのは常識だから書く必要はないのか。でも私としては拒絶され続けて気分が悪い。（今思い出した、ホテルマンも私が植物園へ行つてくると言ったら「行つてらっしゃい」と言つたのだ）

あとはやけくそで、迷子になつてやろうと気の向く方へ足を向けて町の中を歩いた。花嫁さんは女らしくて別人のようであつた。なにしろ、男の子みたいな女の子だつたし、考えてみれば、すました顔など一度も見たことはなかったのだ。そしてあんなにみんなの祝福のビールを受ける花嫁も見なかった。介添の人は彼女がひとくち飲むとさつとコップをとりあげて空にして戻している。どうやら下にバケツかなんか置いてあるらしい。その頃彼女はようやく以前の見た顔をして私にVサインを送つてきた。

別れしなに彼女が言ったことは「おばさんの結婚式にはきつと行きますからねっ」それに対し私はうっかりと「いつのことやら」と言ってしまった。彼女と話をするとついこんな調子になるのだけれど、はずみにしてもオソロシイことを言ったもんだ。

三鷹では下手くそなうぐいすの声で目が覚めた。森は若葉の季節。まだ木漏れ日があるけれど、やがて葉っぱが重なって光はさえぎられるそうだ。自転車でそのへんをかけまわる。いろんな鳥がいて、上手に鳴くうぐいすもいた。

下北沢の布地屋へ行ったら時間を忘れてしまう。布に囲まれると見境がなくなつて、これはやっぱり不治の病か、中毒症みたいなもの。友人もこれにかかっている。

「ちよつとオ、わたし大阪まで帰らないかんのよ、はよ出ようよ」「そやったなア」

友人は映画好きで、私はなにも東京で映画を観ることもないと思うけれど、泊めてもらったし、つき合うことにする。私の希望の『風の又三郎』はもうやってなくて、『バベットの晩餐会』を観た。しかし友人は大半眠っていて（なんべんもつづいたのに）出てから、あそこはなんでああなったのかと聞く。もう何しに入つたのよ、寝るときよ。

あとは駅の近くで、大阪へ帰れるぎりぎりまでしゃべりこんで、夜中に帰ってきた。月給の半分を二日で使い、この先しばらくはけちけちと暮らすことになる。

追記。帰った翌晩に友人から、買った布の私の分がひとつ彼女の袋に入っていたと電話がかかり、そして自分のはもうブラウスとスカートに縫いあげたとのこと。私はまだゆっくりと眺めてもいない。

五月

去年、六甲高山植物園へ行つてから、この次はミズバショウとエーデルワイスを見なくては、と思つていたのに、行かねばという氣の割に体調が悪く、ようやく十四日に休むことにした。そして、長男を無理やり誘いこんだ。自動車とはよく言つたもので、これで自動的に山上まで運んでもらえる。

こうと決まったら現金に元氣が出て、ミシンを出し、先月東京で仕入れた布でブラウスとキュロットスカートを縫う。友人が一日で作つたと言つたから、私もまねをして一日で仕上げた。でも雨が三日間しとしと降つて、前の夜も雨の音を聞きながら眠る。また雨女か。

十四日、息子の電話で目を覚まし「お天気は？」と聞けば「いいのじゃない？」という返事。雨粒は落ちてないくらいのことかと思ひながらカーテンをあけたら、なんと雲ひとつない青空が見えた。

しかし寒い。山はもつと寒かろう、とスカートはやめにしてジーパンをひっぱり出し、風よけも着て、それに合わせて運動靴をはいた。カメラはばかチョンとかしいのと、レンズも望遠と接写用を用意し、双眼鏡を持って、格好はすごく勇ましい。

目的のミズバショウは名残りの穂だけ、エーデルワイスは葉っぱを出したところで花の咲くのはまだ先らしく、両方ともはずれたけれど、ミヤマオダマキ、ゲンチアナ、アコリス（りんどう科）、エゾイヌナズナ、ナツユキソウ（なでしこ科）、ヒメシャクナゲ、クリンソウ、イワカガミ、アツモリソウ（らん科）、センダイハギ、イカリソウ、クロユリなど、コマクサも気の早いのは花をつけていて、言うことなしであった。

しかし、風の中で花を写すのはむづかしい。早めのシャッターに望みを託したが、目の網膜にゆれている花が残っている。この方が確かだろう。

青葉が美しく、ホトトギスが鳴いていて、いつものことながら離れたくなくて困ってしまふ。でもまたそう遠くない将来にエーデルワイスを見に来ることにして山を下りた。息子をこき使ったけれど、はからずも母の日であった。

六月

梅雨に入って頭がはつきりしない日が続いて困る。そんなら梅雨時以外ははつきりしているのかと言われるともひとつ困るけれど、とにかく今はお空のせいということに……

長男に働きたくないとぐちつたら、テレビとビデオカセットを持ちこんできた。これで気を紛らわせろということか、つまりはごまかしの手のようだ。

でもラジオを聴きながらの生活に慣れてしまってるし、テレビは見んならんからめんどくさいのだ。見ていても仕事で中断されるから歓迎できず、まあ部屋の中がちよつと文化的に見えるというところか。

三か月経つと顔つきが変わるというキャッチフレーズのすみれコーラスに入つてもう五か月。一向に顔つきはよくならず、肺活量もふえていない。それでも喜んで行く。歌うのが好き、もあるけれど、ふだんは味わえない安らかな気持ちになれるからだ。

私の仕事は寮生が帰ってから忙しくなり、トラブルは夜起きるに決まっている。ボーラーが故障しているのが判るのも、モーターが止まって水が出ないのも、もちろん停電も。その度になんとかならないかと配電盤をにらんだり、脳みそをかきまわしている。

先夜は洗濯室の水が止まらなくなつて、ことはパッキンを替える簡単なことだけれど、元栓が屋上にある貯水タンクのそばにあつて、作りつけの垂直のはしごを登らないと行けない。屋上のそのまた上だからほぼ五階の高さである。夜の闇が幸いして目がまわることもなくすんだけれど緊張は残っていたのか、翌日コーラスへ行ったらほつと気のゆるむのが判つた。

コーラスでは大勢の中に入つて、先生の言われる通りにしておれば間違ひなくて、例えば口を大きくあけてと言われると明るい声が出るし、とにかく従つていたらよい結果が出るのでとても楽なのだ。

昔からコーラスが好きだった私は性格的にもソリストではないのだろう。特に夜起きる事を、私一人でなんとかしなければならぬのは荷が重いようだ。心ならずもつっぱって長らくやってきたけれど、コーラスへ行つてそれがよく判つた。

お湯が出なくて、水があふれ、まっ暗になつても「あした、会社の人に頼もう」と

言えるようになればよいがと思っている。

エピソード

同人誌は目標の百号を達成してめでたく終了した。同時に私の日記も終ったけれど、寮母としての生活はまだ続いた。最終回には、もういやになったとぐちっていた私を励まし慰めてくださった同人の皆さんへのお礼と、ちよつとええかつこして、百号にあやかり百折不撓という言葉を自分に与えて終りにする、と書いた。